
VOCALOID STORY ~ 奇跡の世界 ~

零音川 かのん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VOCALOID STORY ～奇跡の世界～

【Nコード】

N3375W

【作者名】

零音川 かのん

【あらすじ】

悲惨な過去を持ちながらも生きてきた一人の少年【如月 柚鷺】。高校入学式前日。親の転勤でとある家柄に居候することになった柚鷺。

彼の人生最大の波乱生活が幕を開ける。

この物語は、作者の100%妄想且つ御都合主義な小説です。

もし【ボカロ】が人間だったら 見たいな話です。そういう【人間】であるということボカロのイメージが崩れるという人は戻るを押

してください。

曲が物語のネタになったりするときもあります。

以上ご理解のうえみてください。

駄文ですがよろしく願いします。

序章（前書き）

復活〃復活〃復活。

三度目のユーザーでスタート。

序章

プロローグ

季節は春．．．．に入りかけで、『初春』と言う時期だ。

未だに肌寒い空気がときおり人の肌身を震わせる。

まだ始まりとは言えない、お別れの時期だ。

自然の風物である桜や梅の花が蕾を生らせ咲くまでもう少しといえる境目にあつたそんな時期。

とある場所のとある場で、何か始まるうとするこの時期。

少年の目には．．．

「．．．．．」

目の前には平原が広がっている。

それもただの大きさではない。野球ドームが一個出来てしまつほどの広さだった。

しかし、何もない。本当に何もなく。ただ短く生えた芝生があつただけだ。

だが、野球ドーム一個分よりも向こうにいけば崖があつた。その先は気が茂り、広葉樹林が覆いかぶさるようにして崖の表面を覆って

いる。

その崖の向こうには、小さな集落ではなく、村が見える。

遠すぎて小さく見えている。それも村全体が小さく見えるほどだ。

ここはよほど高い場所にあるのだろう。

本当に何も無い。自然の風物だ。

「・・・・・・・・・・はあ」

広い原っぱへ下りる途中にある、草が茂った坂の上に一人の少年が立っていた。

目の前にはまっぴろい原がある。ただそれだけ。何の意味も持たない。

しかし、少年はここが好きだった。ここから見える風景が好きなのだ。

自らが住むあの村が。自らが大切にしたいと思うあの村が。自然が風景が形が。

大好きなのだ。

少年隣には墓があった。大理石で作られた豪華なお墓だった。

墓には糸が巻かれている。紅い運命を表す糸が二重に巻かれていた。

誰の墓なのか？

墓には名前が彫ってある。

『朝日奈 伊織』

そう刻まれている。

「なあ」

少年は――――寂しく、虚しく、惨めに、醜く、哀れで、悲惨な面持ちで、そう呟いて

「俺、これからも生きていけるよね」

・・・・・・。

墓は答えない。生き物でも、ましてや人間でもないのだから、答えるはずもない。

だが、生き物だとしても、人間だったとしても、そこにいる『朝日奈 伊織』は何も言いはしない。

彼を悲しませないように、自分の満足できなかった人生を担わせない為に・・・・・・いや、寧ろ担ってもらうべきなのだろう。

そこにいることを、そこにいてくれることを、後悔させないためにも、自分の為にも、彼には、朝比奈伊織の人生の残りを背負って担って荷物になって着いて連れて引っ張って終わらせてあげないと、

いつてもらわないといけない。

「俺はさ、お前のために何かは出来たんだろうけどさ。やっぱり、出来たことは当たり前ばかりで、本当にさせて上げたいことは何もなかったからさ。僕はお前に、伊織にいいたいこともあったし、一緒にやりたいこともあった。2年前のとき、僕がここに来たばかりで、何も分からなかったとき、伊織に出会えた」

出会ったから今があれば、出会いがあったから過去があり、未来が存在する。

「もう行くよ」

少年は、墓に背を向けた。

「また来る。そのときは、いい土産話をしてあげる。僕は伊織を愛しているけれど、他に再び愛すべき人が出来る……ことは、あるかないか分からないけれど、お前はもう居ないから、隣に居ないから、その再び隣でいてくれる人が見つかったとき、伊織は誇らしげにしてくれると嬉しいぜ。そのときは、浮気みたいなことになっちゃうかもしれねーけど、許してくれ」

少年は、裏切るように、解れる様にして、言葉を紡ぎ言った。

そしてその場から去った。

彼の名前は、如月柚鷺。

この世で、最も珍しく哀れな少年の一人である。

とつじょーじんぶつしょーかい（前書き）

登場人物紹介です。

とつじょーじんぶつじょーかい

『きつらぎ如月 ゆわね柚鷺』

身長：171cm

体重：52kg

一人称：千变万化

誕生日：10月2日（孤児な為飯の誕生日）

性格：千差万別、千变万化、十人十色、結構な鈍感

髪型：黒髪だが一部が碧色に変色している。長髪で後ろで一纏めしている

好きなもの：なし 嫌いなもの：桜 ツンデレ？ 怖いもの：事故現場や殺人事件、海、雨

好きな食べ物：ない 嫌いな食べ物：ない↑好き嫌いが無い

好きなタイプ：髪が長くて結んでいる人 嫌いなタイプ：分からない

趣味：ない 特技：パルクール

詳細

紫色を少し濁らせた様な眼差しと一部碧色に変色している地面に付きそうなほどまで伸びている黒髪を後ろで一纏めしている【少年】という文が似合う少年。

『私立白媛高等学園』の転校生。
学力は横一線。

性格は至って意味不明で、掴み所がない。

女子に対し耐性が非常に高く、着替え姿や下着姿、裸を見ても微動だにしないうえ、心も揺らがない。

食べ物好き嫌いがなく、本人が言うに、「え？食べ物って大抵が美味しくない？」で、「美味しいものって決めるのは無理じゃね？」という声もあり、基本的に言えば、「和風だろーが、洋食だろーが、中華だろーが、スペイン料理だろーが、イタリア料理だろーが、それぞれにあった魅力的な美味しさがあるぜ」といいたいわけであり、例えば好きなものを決めてもそのときの体調とか気分とか状況とか空間的にとかで、大きく変化するということが言いたいようで、纏めてしまえば、なんでも食べるということ。

親が、元軍人のため戦闘に関してはかなり上手。

特別な体質や持病などはないが精神的持病がある。

パルクールが得意・・・というより、習得している為、逃げ足が速く、運動能力も頗る高い。

養子の親が、情熱恋愛主義者夫婦で、母は主婦（元海軍防衛庁長官）。父は小説家（元陸上軍隊將軍）。

さらに、義理の姉がいるが放浪癖により単独で旅行中。

現在の地元は燦々とした山に囲まれ平地の広がると田舎で、本人は一応は気に入っている。

だが、仕事の関係で、引越すこととなり、今回ど都会にお住まいの母の親戚に居候することになった。

都会経験がすくないものの、割と対応力が高い。

一時期、一人暮らしをしたこともあるので割と料理も出来るようになった。

田舎育ちな為か大抵の果物は丸かじりにする癖がある。

孤児で、引き取られた一年後に誘拐事件に遭い、一ヶ月に及ぶ拷問を受ける。

孤児院育ちで、元の親さえも解らぬままで、現在まで育っている。

いろんな物にトラウマがある。

たとえば事件現場などを見ると精神の奥に眠る恐怖感を思い出し数日間脅えるように身を固めて籠もる様になる。

柚鷺自身を持つ、雰囲気や肌で感じる知覚などで、自然に混じることが出来る。

公開していないというか公開する必要もないのだが、髪が長くゆえに括っている女子が好み。

たまに酷く傷つく毒舌を吐くときがある。

とうじょーじんぶつしょーかい(後書き)

次はプロローグか・・・

プロローグ（前書き）

近畿地方の方、台風大丈夫でしたか！？

プロローグ

肆月五日。

亡在地『下霧村』。

人生の物事は行き成りである。

「は？引越し？」

そこは政令指定都市よりも数十キロ以上も離れた田舎で、人口は七百人と至って少なく、そして日本の中でも特産物の取れる一つの土地で、燦々とし淡々とした大きな山々に囲まれ、その背後には、聳え立つ様に近くで見なければ全貌も掴めない様な標高三千m峰のアルプスを背後にし、冬となれば雪が降り屋根に積もり雪掻きをしなければ成らないし、夏となれば蝉が盛大に鳴き荒れ莫大な暑さに照らされるような場所だったり、更に言えば、アルプスの反対側にある山を越えて少し行けば海があるような場所でもある村だった。

しかし、山々に囲まれているとは言うものの、一つ加えれば広大な平原を削り住処を作ったような場所で、一言で言えば『蟲が巢穴を作ったような場所』とでもいうべきだろう。

なにより、氣に成るのはその田舎のと真ん中に位置する、古い石塔だった。

一体全体誰がどんな目的で作ったのか、もう今となっては解りもしないような塔で、その名の通り石塔で出来ているのだが、殆ど足で蹴れば碎け崩壊するかもしれないほど劣化しているので、むやみに

中に入ったり遊んだりしようとする子供は居ないため、既に放置状態に等しく今となってはもう記念品でも注目物でもないただの置物であった。

そして、学校らしき建物は存在せず、バスで山を越え街の学校まで行かなくては成らない場所でもあり、はたまた大きな商店街があるわけでもなく、ここでは一番大きく、都会から見れば小さなスーパーが一軒あるような場所で、ほかにそれらしい建物は見当たらない。

そんな田舎風景の中にそんな声はあった。

声主は『如月家』の家内に住まう、学問で学年1位という成績を街にある【市立紫木中学校】で横一線で収めている『如月 柚鷺』の声だった。

黒い学ランの服装、胸に『如月』と彫られたネームプレート。

珍しく男子の髪とは思えないほど煌びやか且艶やかで潤いに溢れ漆黒を纏う一部が碧髪の黒長髪が腰まで伸びており、特殊なりボンで後ろで纏めていた。

身長は平均でそれ程高くない体躯。

人を惑わすような幻惑の籠る紫褐色の濁った瞳。

現在、【市立紫木高校】入学予定で、四月六日から高校一年生になる。

学校では、既に、一学期が未だに始まってもない、入学式の準備さえも教員はしていないだろうこの春休み、柚鷺は中学校に行つて

部活をして帰ってきたところにそんな発言を投げかけられた。

「そうよ」

「い、何時？」

「今日から」

「・・・・・・」

『引越し』

柚鷺にとって急な話で、準備も何もしないというのに、学校から帰ってきた瞬間玄関で言われたのだ。

否。宣告された。

部屋は片付いているが、荷物は纏めていないのだ。

今日から行くとなるとたいそうな荷物を纏めて、行かなくてはならないし、そんな準備を出来るわけでもなく、友達になんとはいのだろうか？

「学校はどうすんだよ」

「今から言う」

厭きた野郎だ。暢気な野郎だ。阿呆だ。

素直に柚鷺はそう思い、溜息をついた。

「友達になんていやあーんだよ。学校から帰って前触れ一閃もなく、行き成り『引越す』って馬鹿かよ。しかもすぐってアホ以上の馬鹿だ」

柚鷺は、自らの長い長い長髪の髪を撫で回すように掻き回す。

「我俚言わないで、私だって寛ちゃんから、今朝言われたばかりだし……」

「……」

因みに寛ちゃんとは、『如月 寛光』のことで、柚鷺の義理の父親だ。職業は小説家。結構売れている。

「と・に・か・く。準備はしておいて」

「つーか待て。居候つつても何処に居候すんだよ？」

「それなら大丈夫よ、私の親戚なんだけど、『初音』って人の家よ」

「（知らねえな）大丈夫か？」

「ええ、元々私も居候させてもらっていたし、お金のことも心配ないわ」

「はーん……でも、『初音』って苗字……どつかで聞いた事あるよーな」

「あら覚えてないの？」

「あー？何が？」

柚鷺の母は不思議そうに柚鷺を見つめ、そんなことを言った。

柚鷺は一体何のことか解ったものではなく、何が覚えてないかと言われても、初音と言われて何を思い出せばいいのか解らない。

ただ一つ思い出せるのは……最古のものは事件に遭ったらしい、その後程度。

「まあいいわ。言っておくけど、そこには『初島 未来』って子がいるから……」

「ああ？誰？」

「そういえば、テレビ見ないのね。えっと、言うならば世界中から人気のアイドル」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

とんでもない発言だっただろう。

無論柚鷺はこれっぽちも知らないわけではないが、有名人だ。ありえん・・・・・・・・

「・・・なんで俺はそんな奴の一つ屋根下に住まなくては成らねえんだ？」

「仕方ないじゃない。居候なんだし・・・」

「・・・・・・・・まあ、いいや。いや、全然よくねえ。で？俺は一体何処の学校に転校？」

「神奈川県秦野市の『私立白媛高等学園』」

「・・・・・・・・・・・・・・・・名門じゃん。馬鹿みたいだ」

その学園名は、全国にも広がり、学問、部活において、東京の高等学園に匹敵するほど高等である。

詳しい内容は知らないのだが、全国通津浦々に、名の知れる『学園』である。

それに比べ、柚鷺は田舎の学生だ。そんな格段のある学校に果たして柚鷺は値できるだろうかと心配になる。

幾ら学年一位の横一線をしているとはいえ、市立と私立は違うわけで、全くしゃれにもならない。

「春休み中に転校手続きもしておくし、もう、『初音家』には、ちゃんと事情は話しているし、後は・・・・なにもないわ」

「俺は有るぞ！友達になんて言えばいいんだよ！」

「転校するって普通に言えば良いじゃない？」

「あっさりしすぎてるわ！なにそれ！？ぜってー普通に済むってその顔、マジで済むと思ってるの？」

「そうよ」

「ただの馬鹿だ！アホだ」

「じゃあ、そういうわけだから、準備しておいて、一時には出ないといけないし・・・」

「早！後二十分しかねえじゃん！」

現在十二時四十分・・・過ぎた所だった。

柚鷺は急いで、家に突入し部屋に入って着替える。

最低限必要なものを、鞆に放り込み、ほかは、母に任せ、丁度の時間に、柚鷺は家を出れた。

道は母に教えてもらいながら父親の車で移動。

現在柚鷺の親父は、街で手続きをしている頃で、その間に移動すれば住民登録の変更が完了しているということらしい。

友達に何も言わないで結局出てきてしまい、後悔しながら柚鷺は携帯でメールを送り、駅までの道のりを何となくおぼつかない感覚で見っていた。

波乱な日常が、その瞬間から待ち受けている気がした。

プロローグ（後書き）

やっと、一話にいける・・・

1×1＝1話

新幹線で一時間程度、現在電車で十分ほど移動している。

柚鷺は現在電車に乗っていた。

がら空きの空間に、たった一人で座席に座り、最低限の荷物が入った鞆を背負っていた。

窓から見える風景は柚鷺にとっては、久しぶりな光景で（といっても、何年も戻ってきていないので久しぶりという感覚は薄かった）田舎の風景とは違う為、聊か違和感を持っていた。

大まかな高層ビルが並ぶ都会は、若者の好奇心をくすぐるように、大きく偉大に立てられている。

「久しぶりというか・・・なんだか感無量だな・・・」

そんなことを呟いて進む電車の窓から一望できる風景を堪能していた。

緑が少なく白や鉄の色をした建物や高層ビルやマンションがあり期待を寄せ集めるような、そんな場所にも見える。

やはり都会というのは好奇心があり、期待を寄せ集まる場所であるのだろう。

政令指定都市に近いこの街もそんな風な感じがする。

「しかし、あのでかいマンションは一体どんなに家賃がたけえんだろーな」

窓から見えた都市の中心にあった高層マンションを見て柚鷺は呟いた。

近くでもなければ全く全貌もつかめなさそうな盾にも横に面積をもつ、超高層マンションのことだ。

何処のどいつが何をしてあんなふうな生活をしているのか？と考えたところで分かるはずもなく、柚鷺は結局溜息をついた。

「うーん、この駅でいいんだよね？」

母から渡されたメモを見ながら柚鷺は呟いた。

流石に電車を使ったことがない訳ではないが、何年も使ってなかったので、よく覚えていないのだ。

電車といえば単純に指定された駅までの切符を買い、改札口を通り特急か急行か普通の電車に乗り、自分の行きたい駅まで行くのが普通だ。

それが、いまだ錆びれたように、当たり前に出来ない自分が居ると柚鷺は思い深い溜息をついた。

『次はー秦野。秦野でございます。忘れものが無いようご注意ください』

「あ、この駅だ」

ホームに電車が着き、柚鷺はドアが開いたところで荷物を手荷物と電車を出た。

ホームに出たところで、階段を上り改札口を通り、商店街のような地下街を抜け、匂いの香るパン屋を通り過ぎ、地上に出た。

「・・・・・・・・」

密集する街のマンションや建物から空が覗き、蒼い空と雲が黙々と広がっていた。

並木の公孫樹が緑に染まり、人ごみは絶え間なく並んでいる。

薄紅色の桜の樹が駅の入り口から見える公園で咲いていた。

「ちっ」

その色に柚鷺は不愉快感を覚え、目を逸らした。柚鷺はなぜか桜が好きには、なれなかった。

いや、なれないのだ。

何かトラウマがあったわけでもなく、トラブルがあったわけでもない。

なぜか、その色と匂いと形が嫌いで、憎憎しかった。

「えっと・・・こっちだよな」

住所のメモに目を通しながら、道を進む。人ごみなので、進むのが大変だったが、柚鷺は慣れた様にその道を突き進んでゆく。

都市の道を珍しい、田舎で見ることの出来ない店をのんびりではな

く、早く目を回しながら観察してみてゆく。

やはり田舎にはまったく似合わないようなものが並んでおり、その商品たちの価格といったらありえないほどでもある。

しかしやはり都市内なのか、寒いのか暑いのは普通なのか解らないが、一先ず普通という空気だが、匂いが違うため柚鷺には臭く思えていた。

一定以上歩き続けると、人の少ない都市外れに出た。

どうやら、今迄歩いていたところは商店街道だったようで、そのほかは空いた道だったようだ。

少しは楽になると思い、鞆を背負いなおし再度足を勧めた。

現在歩いている場所は住宅街で、高級そうな（ただしここら辺りでは一般の模様）家が並んでいる。

この中ではないが、柚鷺が目指す居候先の家は、外れにある。

何故外れにあるのかは、相手が有名人だからで、まさか居候先がそんなところとは全く思っていなかったのだ、これは大変な毎日に成るのかそれとも数週間で終わりそうなのか、解らないと考えながらも、「ま、いつか慣れるだろ」と簡単な思いを寄せていた。

そしてなぜか見覚えがあるような気分だった。

記憶に直接的に覚えがあるわけではない。

体が覚えている。

何時の間にか体が無意識に道を知っているかのように進み、自分の行くべき場所を知っているかのように動いていた。

住所は見えないのだが、なぜか体が進んで何時の間にか目的の家の前に居た。

[illegible]

そして、その家の大きさに絶句した。

和風で、大きな『初音』と書かれた掛札と、木造100%の羅生門の様な門がありその向こうに何があるのか全貌もつかめない。

ただ横百m近い三mの塀が続いているのだけが解り、中は相当広いのだというのだけが、柚鷺の想像上の中ではわかっていた。

⌈
•
•
•
•
•
•
⌋

うん、インターホンを押そう。

そう思い、手を動かし重い気分で目の前にあるインターホンに指を差し向け……ようとしたが

がらがらがらがらがらがらがらがらがらがら

押すか引くかで開く扉と思っていたものが大きく横に（しかも自動で）開いた。

そこからロールスロイスが出てきた。

真っ白い光沢を帯びた長い車で輝かしく、目を付けていいのかも解らないほど鮮やかで眩く、高級さが目にしみた。

やべえ、直視できねえ。

柚鷺は、目を逸らした。

いや、逸らさせられた。ついでに体が引いた。

「・・・・・・・・」

柚鷺は何も言えぬまま、引きつった顔でそこに立っていた。

「あら？」

急に後部座席の窓がゆっくり開きそこから美貌に溢れた清楚で純粹且つ八方美人のような清廉潔白の女性が姿を現した。

エメラルドの髪色がキューテクルを纏う。

煌びやかに光るイヤリングが太陽光を反射して光り、身に纏う高級の生地が、容赦なく柚鷺の眼光を焼き尽くす。

「若しかして、『如月』ちゃんの？」

「え？ああ、はい」

如月。たしかに・・・（歳が判断出来ない）この人は、そう言った。

それは、柚鷺の苗字のことです。言われれば返す言葉はある。

「じゃあ、あなたが柚鷺ちゃん？」

「（・・・ちゃん付けだった・・・）はあ・・・まあ」

「なーんだそうだったの。一々駅に迎えに行くところだったわ。あんまりにも遅いし迷ってないか心配だったから・・・」

「・・・そうっすか」

っていつかこんな高級の車で迎えられたくない。なんだかいやだ。

平凡のママがいい。だから、今すぐ家に帰してほしい。

「でも、昔より背も高くなっているし、髪も長くなっているわね・・・」

「・・・」

どうやら、柚鷺にとっては初対面でも、この人にとっては初対面では無いらしく昔に会っているようだ。

小さいころを憶えている程の記憶力を持っていないわけでもない柚鷺だが、明らかに忘れてしまっていた。

元々、何か支障がある訳でもないが、柚鷺は人のことを一々憶えるのがめんどろうだと思っている様で、そういうのは苦手だったりする。

唯一つ言える事は小さいころに酷い何かを患った。

それで、覚えていない。

「まあ、兎に角這入って」

「えっと・・・どっから？」

見るところ玄関は全開だが、人間が入れるスペースはなく、この通り荷物を持ったまま、ましてや狭い場所を通れるわけでもない。

「すまないけど、表へ回ってくれない？」

「は？表？」

「ここは裏なの」

「・・・・・・」

どうやら、再び歩いて回らなければ成らないようだった。

仕方なく、柚鷺は荷物を持って表へ回ろうと思い、足を動かした。

何処となく後ろから、ごめんねーと声が聞こえた。気がした。

それからどれくらい歩いたかは解らなかったが少なくとも大きく迂回して表へ歩きついたことだけは解った。

約十分である。

裏よりかは玄関は小さく、どうやら裏は車庫のようだ。ちゃんと初音と書かれた掛札がある。

それで柚鷺は何故表ではないのか納得した（裏にも初音と書かれた掛札はあったが・・・・）。

「うーん」

ここで再びインターホンを押すべきか考えた・・・が、結局押すこ

とにした。

裏であっていても、中の人と会っていなかったら意味が無い。

変人と間違えられてしまつては困る。

『はい?』

「あー、如月柚鷺って言うンスけど……」やだ。――
々呼び出さなくてもよかったのに……」

どうやら本人が出たらしい。

ラッキー。

『とりあえず、私が行くからそこで待つてー』

「……」

声が途切れ、柚鷺は一人家の前へたっていた。

「待つておこつ」

ボソッと呟き、柚鷺は欠伸をして待つ。

5分後……

「入っていいわよ」

玄関のドアが開きそこから、初音家母方（名前を知らないの【母方】と偽名）が出てきた。

しかもさっきの服装とは違い、着物だった。

何故に？

柚鷺は疑問に思いながらも、玄関門を開け渡り道に足を踏み入れた。

「広！」

第一印象だった。

細かいことは全て他に置いて置くとして、兎に角広かった。

庭が、草木に囲まれ鮮やかな花色をした風景に成り立ち、高級に囲まれていた。

多分今踏んでいるこの石道さえどこかの立派な石なのだろう。

完全高級和風式である。

かなり気が引ける。

「眩しすぎるだろうに・・・」

柚鷺は呟いて、足を進めた。

基本的こんなところに一般人が入るべきではない場所だ。何故母親はこんな家柄の人間と知り合いで、居候をさせてくれるほど仲がいいのだろうか、柚鷺には理解が不能だった。

ともあれ、経緯がどうであれ、仲がいいのならそれでいいと深く考えるのを柚鷺はやめた。

というか放棄した。

深く考えるのは頭の悪いくせになるだろうと思ったからだった。

母方が玄関を開けながら進み、それに続いて柚鷺もついてゆく。

「あれ？こういう時何つつて入ればいいんだ？」

見知らぬ家に入るのに、何も言わずに入るのは駄目だろうし、居候するのだから『おじゃまします』では駄目だろう。

「今は、『おじゃまします』でいいけど、今度帰ってくるときは『ただいま』でいいわ」
「・・・そうっすか」

見知らぬ疑問に母方は、そう答えを返してくれた。

靴を脱いで揃えて、中へ這入り荷物を担いだまま、廊下を進んだ。

ほかに、二十足程度の靴が並べてあったが、多分ここの住人のものなだろう。

因みに言っておくと、柚鷺の歩く和式の廊下は全て、高級物である。

一般人が大概に踏むものではない。と柚鷺は言いたい。

そのためか柚鷺には、遠慮が籠ってばかりいた。

まあ、親の仕事が終わればここを出て行くだろうし、それまでこれで甘んじるしかないだろう。

なんだか今は、親の仕事が早く終わって田舎へ帰りたい。という気

持ちで柚鷺は一杯だった。

そうこうして思考を回転させているうちに、何時の間にか見知らない廊下を歩き、何時の間にか知らない客間につれてこられた。

「ここで、待つててちょうだい。皆を呼んで来るから。ここは大抵客間だから、我が家の娘はあまり来ないと思うわ」

「は……あ……」

「緊張しているわね」

「そりゃあ……身の知らない家で高級物に囲まれるなんて有り得た話じゃありませんからね」

「あら？高級物だともう？」

「じゃあ、安っぽちな物ですか？」

「どっちか？つていえば、高級風に見せたてているだけかしら？どんなものでも、工夫次第でビューティフルになるわ」

「どんなものでも。とは少し無理な言い方ですが、まあ、そうでしょうね」

「揚げ足を取らないで」

「すみません」

そう会話をやり取りし、母方はそこを去っていった。

「なるほど、これは『偽物』か……」

柚鷺は床の畳を撫でる。

ざらつきといい匂いといい、一般家庭におけるものと変わりはないが、確りと出来上がっている類だ。

職人技という奴だろう。

因みに、畳のい草だが、何処かでケーキにして売り出されているらしい・・・いまだに柚鷺はお目にかかったことは無い。

「ふむ」

客間に這入って担いでいた荷物を下ろし、庭の景色を見に縁側へ出た。

大胆に広がった庭で草が風を受けてゆさゆさ揺れ、樹木の枝たちが風に撫でられて、旋律を奏でる。

しかし、その気を柚鷺はすぐに視界から消す。

くしくもその木は『桜』だった。

分厚い幹から伸びるぶつとい枝は、多才に変化し変幻自在に枝を伸ばし、実となる蕾を作っていた。

「ち・・・」

軽く舌打ちして柚鷺は荷物を手に取った。チャックを空け、中から本を取り出した。

分厚い二、五cmの、ライトノベルだった。

それをペラペラとめくり、一頁に三十四行。上下に十七行ずつ分かれた、講談社独特の表示の仕方だった。

現在しおりを挟んでいた百五十一頁から読み始めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・」

無言のまま、黙々と何も聞き入れないように読み続ける。

柚鷺は、読書力はあまり高いほうではないのだが、文章を読み取り理解する能力。所謂理解力が高いほうである。

10分後

「・・・・・・・・・・」

現在、二百三十四頁24行目・・・待ち時間三十分・・・時刻三時二十三分。

柚鷺本人としてはそろそろ、糖分を補給したい時間帯であつたがそもそも菓子がなかった。

だが、そんな些細過ぎることに、柚鷺は何も言わず、無言で黙々とラノベを読んでいた。

勿論誰かが来たわけではない。使用人がお茶を置きに来た程度で、家内のものが来たわけでもない。

無論、柚鷺の場合。神経が本だけに集中している為、周りのことなど聞こえも見えもしないはずだろう。

だからこそなのか、今更になって、隣に女の子が座っていたのに、気が付いた。

「・・・」

「・・・」

少女と視線が合う。

不思議そうにみつめるその目には、純粹しか籠ってなく、濃い紅色に光沢された瞳が柚鷺を見つめていた。

長い桃色と桜の色が混ざったような色の長髪に小学生程度の矮躯。頭の天辺から伸びるアホ毛。

寒くないようになのか、それとも好んで着ているのか解らない、だばだばのパーカーとマフラー。

その中には、馬鹿なのか薄いＴシャツとミニスカートだった。

だが、すぐに柚鷺は本に目を戻した。

気まずいのもなく。気が悪いと思ったわけでもなく。

視線が気に成った程度だ。

少女も何かしらを感じたのか、そのまま　ちょこん　と座る。

「・・・・・・・・・・どー？」

「？」

「・・・・・・・・・・き・・・・・・・・」

声が聞こえる。

「・・・・・・・・・・どー？」

どうやら、誰かを探しているようだ。

柚鷺の耳にもその声が入る。

そして段々とその声は近づいてくる。

「美希ー何処ー？」

床が軋む音と、声が廊下から響いてきて、柚鷺のいる客間に直接入ってくる。

襖が開く。

「美希ー」

入ってきたのは、母方だった。

「どうかしたんですか？」

「ああ、柚鷺ちゃん。こっちに、ちっちゃな女の子が来なかった？」
「えっと……」

徐に頭の中を回転させる。

「さっき、桃色の髪色をした女の子が座っていたけれど……どこか行っちゃったようです」

「あら？あの娘にしては珍しいわねえ……」

「なにがですか？」

「あの娘、男女問わず年上の娘にとか他人の人とか近寄らないの」

「にしては、僕の横にちょこんと座ってジッとしていましたけれどね。目を合わせても何にも反応なかったし……」

「んー」

「どうかしたんスか？」

「柚鷺ちゃんって、性格って自分でどう思う？」

「いや、俺にもよくわかんないです・・・」

「柚鷺ちゃん。若しかしたら性格がないんじゃないの？というよりも、定まっていけないわ。これは断言できる」

威張って言うな、上から目線で言うな。どこの、S女だ。

「はぁ・・・そうですか」

「千差万別、千変万化、十人十色　　ってところかしら？」
「・・・・・・・・・・」

【如月柚鷺】は、性格が定まっていけないとなれば、正解である。

普通であれば、一定の領域の言葉遣いや感情があるが、柚鷺にはそれが無い。

劣性で、狡猾で、温厚で、冷静で、物静かで、優しくて、友達思いで、家族思いで、兎に角、性格が定まっていない。

ころころ変わり、ころころ変わる。

だが、基本的男子らしい性格である。と柚鷺は思っている。

「そんな洒落話は良いですけど、その娘探しているんじゃないんですか？」

「そうだったわ！」

・・・・・・・・・・。

「んで、探している目的は？」

「あなた、今日から居候するって話じゃない？だから、皆集めて紹介しておこうと思ってね」

結構能天気な人だ。

柚鷺は自分も探そうかと思ったがやめた。

理由は単純明快だった。

この家は広すぎるため、下手に歩くと何処が何処だか分からなくなる為だ。

迷子になるのは面倒だ。

「じゃあ、見つけたら十字四肢固めで仕留めるか、襟裳と掴んで縄で縛り着けておくとか、とりあえず拘束しておいてね」

そついい残し母方は部屋を出て行った。

「十字四肢固めってなんだよ・・・」

子供にやるような技では無い　と柚鷺は思った。

「ん？」

ふと横を振り向く。

少女がちょこんと座り、さっきのようにジッとしていた。

「・・・」

「・・・」

再び目が合う。

柚鷺の薄暗い濁ったような紫褐色の瞳と無邪気で純粹な淡い紅の瞳。

だが、少女は、さっき母方から聞いたように逃げようとはしない。

他人や知らない人や年上などには懐かないし近寄らないはずが、柚鷺に限ってなのかもしれないが逃げようとしない。

少女は、ポケットを弄り一つの飴を取り出した。そして袋を破り、飴を口の中に抛り込んだ。

コロコロと口の中で舐めているのが分かる。

「なあ」

柚鷺は思い切って（別に思い切っていないが・・・）、話しかけてみることにした。

母方に十字四肢固めで、捕まえとくとは言うものの、柚鷺の力量では骨をいとも簡単に押し折ることになる。

「なにー？」

普通に返された。

「名前。なんつーんだ？」

「わたしー？」

「ああ」

「何で訊くの？」

「こんなに近くに居て、会話もなく名前も知らないんじゃない意味ねーからな」

「そだね。じゃあ、自己紹介するよ」

少女は飴玉を齒で齧り砕いて飲み込んでから、再び口を開いた。

飴舐めるの早いよ・・・

「わたしは、初島美希っていうんだよー。そういうおにーちゃんはある？」

「俺は、如月柚鷺って、名前。ちよいと訳有ってこっちの地方まで来ている」

「じゃあ、柚鷺おにーちゃんってことになるねー」
「・・・・・・・・」

おにーちゃん・・・ねえ・・・。

「んー？」

柚鷺は急に腕組みして考え出した。

「如何したの？」

「いや、美希ちゃん。さっき母方が言っていたけど、年上とか知らない客とか、近寄らないって聞いたけど・・・僕は平気なのか？」

「えへへ、まあねー」

「・・・・・・・・」

「わたしは、年上が嫌いって言うよりなんか、意地悪されたりするから・・・知らない人は恐いんだけど・・・ね？」

「年上・・・ねえ」

「私のところは兄弟が多いし、私は一番下だし、虐められるって言よりもおちよくられるから・・・年上って好きじゃないんだ」

「へえ、わかんねえな」

柚鷺に兄弟はいない。一人っ子である。

柚鷺が大丈夫だということは、どことなくなのだろうか？それとも、美希の感覚的に大丈夫なのだろうか？

「僕は、一人っ子・・・いや、一人っ子かもしれないけれど・・・兄弟のことがよく解らない」

「かもしれないって・・・？」

「孤児なんで、兄弟がいたかもしれねえんだよ」

「こじー？」

「親が居ない子供ってことだよ」

「おとーさん、おかーさんが居ないの？」

「居ないって言うより、解らない・・・かな？いま、世話をしてくれる父さんと母さんは、養父と養母ってかんじだ」

「ええっと・・・」

美希は言葉の難しさに頭を濁らせた。さすがに、幼い子には難しい話だ。

「つまり、俺は、親がわからない人間だ」

柚鷺は少し俯いた顔で言った。

さすがに、そういう感覚には慣れていない。

「かわいそう」

「・・・」

無垢な純粋な顔で言われた。

柚鷺の心が悲しくなる。

「（不幸だ・・・）」

そんな事言つては、自傷するが、確かに柚鷺は不幸な人生を送ってきた。

十二歳のとき事件にあつて以来、それから前の記憶がない。

加えて事件の所為でさまざまなトラウマがいまだに体に染み付いたままだった。

が、その殆どが降伏できている。

とは言うものの、慣れないものは慣れない。過去というのは逃げてもしつこく追いかけてくる。

最近雨を見るたびに目の前で自分の大切な人間が死んだときのことを思い出す。

それは最近のことだった。ほんの一年前だった。雨が降るたびに、心が痛んで仕方がない。

思い出して涙が出てきてしまう。

「（いかんいかん）」

首を振って忘れさせる。

「美希―」

「!」

再び襖の向こうから、母親らしき声が聞こえた。

そういえば と柚鷺は思い出す。

母方に捕獲して十字四肢固めをしようと言われていたのを忘れていた。

「さてと」

そして柚鷺が目的を達しようと思ったとき、美希が臨時体勢に入っていた。

どうやら、逃げる気満々のようだ。

何故逃げるかは解らないとして、これは逃がすわけにはいかない
と柚鷺は臨時体勢に入る。

そしてクラウチングスタート宜しく、脱兎の如く逃げようとしたところを、柚鷺は少女の数倍程のリーチのある腕で襟を引っ掴む。

踏み出したときの反動が残っていたこともあり、美希は足が滑って
背中から畳に打ち付ける。

「ぐへえ」

女の子らしくもない声で美希は倒れた。

そこに母方が入ってくる形になる。

「やっと、見つけたわ。柚鷺ちゃんご苦労様」

「………ところで訊きたいんですけど……何で探してたんですか？」

「勿論。皆にあなたのことを説明しないといけないでしょう？これから、何年か住むかもしれないし……」

「………あ、そういうことか」

先ほど言われたことを思い出し、ここで柚鷺は初めて気がついた。

「（どうやら、俺は、ここで暫く過ごすらしい……）」

ほんの数ヶ月間。ここで暮らし過ごすと思っていたのだが、何年も過ごすなど思ってもみなかった。

親の仕事はいつも迅速で、一時期一人暮らしのときは数ヶ月で帰ってきた。

「ところで……みーきーちゃん」

そこで、やっと美希の話が持ち上がる。母方の声に、美希の体がビクビクと動く。

まるで電気を流された生き物の如くだった。

ぎぎぎぎぎ と錆びた機械が無理に動いたような音が聞こえそうな動きで頭がこつちを向く。

その顔は恐怖に溢れ、哀れだった。目には涙が浮かんでいる。

「（可愛い）」

それを見て柚鷺はそのままそのまんま、そう思った。

柚鷺は口リコンではないが、普通にその顔を見て思った感想だった。

柚鷺は掴んでいた襟を放し、母方に代わる。

「なーんで、来てと言ったのにこなかったのかなー？」

「だ、だってえー……」

美希の瞳に涙が溢れた。もう泣き顔である。

「なんかされると思ったから……叩かれたり怒られたりすると思
ったから……悪いコトしたと思ったし……」

「……」

「……」

柚鷺の思考では、美希はどうやら何かをやらかしたりする奴のよう
だ。と思っていた。

「美希ちゃん」

「はう？」

「悪いことって？」

「勝手に人のもの触ったり、物を落として壊しちゃったりだけで、
叩かれたりしたことがあったから……」

「はーん」

納得して柚鷺はうなずいた。

なるほど、好奇心のおかげで酷い目にあっているだけか……と一
先ず、柚鷺は安心した（なぜだかは知らない）。

「まあ、いいわ」

母方は溜息をついて、諦めたような顔をした。

それに、美希は「ほっ」と息を吐く。

「それよりも……」

母方は手をパンと鳴らし、

「柚鷺ちゃんの事話さないといけないんだったわ」

今更思い出したような、そんな振りをするような様子で、母方は言う。

そして立ち上がり

「いらっしやい」

と手招きした。

柚鷺はそれに招かれるように、立った。

これが、物語の初めであることは、言うまでもない。

1 × 1 = 1 話（後書き）

次回は多分明日？

1×2Ⅱ2話（前書き）

この前アマゾンから【ブラックロックシューター THE GAME
E ホワイトプレミアムBOX】が届いたのはいいのですが、ここ
の二日でクリアしてしまい、悪ノ娘の最新刊だと思って買ったもの
がワールドガイドだったし……なんか……もう……

まあいいや、とりあえず更新です。

1 × 2 Ⅱ 2 話

現在柚鷺は廊下を歩いていた。

高級な漆でも塗ったのかと思われる艶やかな床を三人で歩いていた。

他の人間から見た視点を表現するならばこうだ。

一人は、髪の高い少年だった。黒髪の髪には一部が碧髪に変化している。そして一部でまとめている。

一人は、背の低い矮躯な子供だった。桃色と桜色が混ざり褐色化したような髪色でだぼだぼの服を着ていた。そして髪の高い少年の裾を引っ張って歩いている。

一人は、着物を着込んでいた。煌びやかな雰囲気と明るくおっとりとした物腰のいい母方っぽい人。

とまあ、こんな感じ。

柚鷺は現在、皆が待っている大広間に向かって廊下を進んでいた。先ほどから、結構な道を進んでいるのだが、一向に広間には着かない。

そして、柚鷺の裾を美希が引っ張って引っ付きながら歩いていた。聊か柚鷺には歩きにくい状態だった。

母方には「気に入られちゃったわね」などとどこかの漫画風にいわれ、振りほどくのは既に無理そうだと諦めていた。

そして現在もその話は続いている。

「まるで兄弟ねえ」

鬱陶しいよ。と柚鷺は発言しそうになる。

「早速何を言い出すかと思えばまだその話が進行していたんですか？」

「でも、柚鷺ちゃん。兄弟いないんでしょ？」

「まあ……」

まあ、そうだけど。いや、別に兄弟ないわけじゃないよ？

ただの孤児だからいないわけじゃないと思うよ？

義理の姉ならいるよ？放浪癖だけど……人蹴って骨折るけど……。

「だったら、義理の妹くらい出来ても良いじゃない。あ、そうそう、ここで暮らすときは【誕生日】で、兄が誰で姉が誰で妹が誰で弟が誰ってなるから」

「めんどくせえ」

「意外にあなたと同じ年の子が、2人もいるの」

「何でそんなに多いんですか？」

「ここは都会よ？だから従兄妹たちが犇き合って暮らしているの。彼ら、もしくは彼女等の親は海外や田舎で働いているし、精々正月にしか会えないの」

一度に全員集まったほうが親の負担は少ない。

特にこの一家は金持ちだ。分配するよりも一箇所に集まって暮るのが一番だ。

「へえ。意外にシンプルな家族構成」

感慨なく柚鷺はその言葉を口にする。

シンプルかどうかはさてはおいて・・・

「因みに私の子供は、未来と恵美だけ。本当によく出来た二人だわ。結構運動神経と脳味噌の違いがあるけれど・・・」

・・・。

「一瞬自分の娘を愚弄したような気がしました・・・」

「やあねえ。気のせいよ」

全く一体何処の親子の会話だ？と柚鷺は溜息をつく。
実際この人達とは他人だし、家族でもなければ自分自身の知り合いでもない。

いわば、母親の知り合いだ。

柚鷺本人が母方自身と仲がよい訳ではない。

だが、あちらは友好的なようだ。

「ねえねえ、おにーちゃん？」

「僕はお前の兄じゃないのに何でそんな呼び方をする？」

「え？だって年上でしょ？」

「そりゃそうだが・・・柚鷺さんのほうがよくねえ？」

「こら。柚鷺ちゃん？あなたはこれから【初音】家に居候する身でしょ？だからここではあなたは大事な家族だわ。子を任された親としてそんな身勝手なこととは言わないで頂戴？いいわね？」

「・・・・すみません」

家族・・・・ね・・・・・・ありがた迷惑だ。

うーん。まさかこんな居候先で家族として迎えられるなんて思いもしないな。それとも想定していない柚鷺が馬鹿なのだろうか？

「それよりおにーちゃん？」

「んー？」

「何歳？」

「一六」

「へえ、じゃあ、未来おねえちゃんと恵美おねえちゃんと一緒だね

ー」

「誰だよ？」

「んー？知らないの？てれびに出てるよ？ついんてーる？だっけ？
つていう髪形してるほうが未来お姉ちゃん、ゴーグルしているお姉ちゃんが恵美おねえちゃん」

美希はそういつて、自分の手で髪型を作つて未来を表現したりする。

「解せぬ・・・」

「えー・・・」

「大丈夫よ。美希ちゃん以外あつたはずなもの」

「？」

「あ、いえ、なんでもないわ。今の忘れて・・・」

「え？・・・あ。はい・・・」

そう言われて柚鷺は気がつく。

多分それは自分が事件に遭った時より前のことなのだろうと……

柚鷺は今から、四年前のその前からの記憶を根こそぎ事件による後遺症でなくなった。

頭部殴打による脳細胞に直接ダメージを負ったためでもあり、精神的に機能しなくなった脳への負担が高くなったためである。今はもうその傷は修復しているが、記憶は完全に抹消している。

その所為で、全て失った。

だからこそ、柚鷺自身は何も覚えてはいない。自分の友達の名も姿も知り合いの名前も姿も近所の風景さえ覚えていない。

酷いものだけが記憶に残っている。

だが、ここが自分の居場所だったという感慨だけはあった。

だけど、友達の顔を見たとき自分が何をしたか分からなかった。何故そんなにも悲しい顔をしているのかわからなかった。

それからすぐだった。柚鷺がその場所から逃げ出したのは……すぐだった。

呆気ないほどすぐだった。

学校に転校依頼を出し、荷物を纏めて田舎へ逃げた。自由奔放の形を見るために。

結局今じゃこの地方の友達だったであろう人間の顔も覚えてはいな

い。

だから、柚鷺はここに引越してきたばかりの新人であろう状態だ。勿論、柚鷺本人にはその考えはない。

「どうしたの？」

「うっん？なんでもないので美希ちゃん。それよりもよく聞いてね？」

「何？」

「柚鷺ちゃんには、絶対に昔の話を教えてなんていわないこと。いわね？」

「う、うん」

「柚鷺ちゃん？」

「はい」

「田舎にいた頃くらいの話はしてあげて？田舎って言うと私たちじゃあまり見当もつかないから」

「旅行しろ！！！！」

悲しみを振りほどくように柚鷺は叫んだ。そしてその顔は完全に無理を抱えていた。

それからと言うものの、暗い話は無くなり会話が続いた。

廊下を歩きながらその先に見える未来のようなものに、柚鷺は少しの期待だけを持って踏み入る。

「ついたわ」

結構な廊下道を歩いた挙句に着いたのは大きな襖だった。

なにこれ？将軍が入るような襖じゃないのか？と柚鷺は疑問を持つ

たがすぐに深く考えるのをやめる。

「お入りなさい」

母方が襖を開けてくれた。

その置くには、和式のテーブルがあり、そしてその周りを家族らしき人が囲んでいる。

襖が開く音に皆が振り返り、柚鷺を見る。その瞬間顔色が変化し、表情も変化した。

柚鷺にはこれほど変な気分になった覚えは無い。

見た瞬間、哀れな視線を向けれたことはこれ以外に存在しない。

そして、彼らの顔を一切として覚えてはいない。名前も他ではない。

「・・・・・・・・」

無言のまま柚鷺はそこに這入る。

「座りなさい」

母方の声。

空いていたテーブルの前の座布団へ柚鷺は座る。

「さあ、皆今日から居候するのがこの子よ。柚鷺ちゃん、挨拶して」「え？あ、はい。えっと、初めまして、【如月 柚鷺】…………です。不束者ですが宜しく願います」

そう丁寧に柚鷺が挨拶する。というか、お世辞に近いのかもしれない。

雰囲気的には問題がないが柚鷺にとってみんなの顔が、一番の問題だった。

見慣れない悲しそうな顔をしているのだから、無理もなかった。無論、何の意味でそんな顔をしているのかさっぱり分からないのだが……

「ほら、皆、暗い顔しない」

母方が手を叩く。その音と言葉に皆が我に帰る。

一瞬で暗かった顔は戻り、柚鷺のほうへ再び向く。

「柚鷺ちゃん。皆を紹介するわ」

母方がその後懇切丁寧に紹介してくれ、柚鷺は大体の家族を覚えることが出来た。

そして紹介された後、柚鷺は到着した自分の荷物を用意された部屋に運び入れる仕事を開始した。

家族を一覧に詳細で示すと……

母方の名前は【初島 杏里】。この家の主。

茶髪のショートヘアで身長が結構高くスタイルがいい（巨乳なだけといわれたけれど……）臍をいっつも出している（らしい）というより、臍の見える服を着ているのが【初音芽衣子】 年齢二十二歳

青髪で長身に一年中長袖マフラー（寒がりでもないらしい）をしていて、大抵見るたび棒アイス食っているのが【初島海斗】
二十一歳

小豆色の髪色に癖のかかったロングヘア・・・プロポーション抜群のちょー美形お嬢様的な人が【初島瑠歌】
十八歳

紫の髪色で長髪にして侍のように、髪を結んでいる長身で腰に【真剣（「なにがしてえんだよ」と柚鷺は思った）】を差し持っているのが

【初島樂歩】
十八歳

黄髪・・・金髪・・・まあ、どちらか分からないけれども混合したような髪色に腰まである長髪に釣り目で派手な姿をしているのが

【初島 梨花】
十七歳

黄緑髪・・・か明るいライトグリーンの横髪が長く後ろ髪が短い髪形をして、何時もゴーグルをしているのが【初島恵美】
十五歳

ご存知、鮮やかで艶やかな碧の髪色をした脹脛まで伸びているツインテールが目印な、可愛い彼女。【初島未来】
十五歳

黄髪に頭につけた白いリボンが目印となっている背の低い（まあ、中学生なので当たり前）ショートカットの髪形をし前髪をピンで留

めているのが【初島鈴】、一方双子の弟である黄色髪で、鈴と似た顔つきに後ろの髪を纏めているのが【初島 蓮】。二人とも十四歳

そして、現在も柚鷺の手を取ってしがみ付いている、桜のような小豆のような色が混合した髪色をした腰まであるロングストレートヘアにアホ毛がついた、【初島美希】。十一歳。

と言う辺りであり、そこに柚鷺が入るとなれば。

黒髪で一部白髪が入り混じった長髪の髪を一部で纏めている目が幻惑を感わすような瞳をしているのが【如月柚鷺】十五歳

と言う風な感じになる。

ともあれ、柚鷺にはこれから覚えてもらえればそれで言いと母方は言ってくれたことを思いだしながら、部屋の何処に者多くか思案しつつものを置く。

用意されていた部屋は結構広かった。

十八畳程度はある部屋で、机が既に配置されベッドも部屋の隅に置かれている。

入って右斜め上にはクローゼットと箆笥が並んで置き、そこに柚鷺は自分の服を入れる。

そしてベッドの頭には工夫をして目覚まし時計が置ける台を設置した。

机の上には教材や辞書などの勉強道具。机の横には本棚がありそこにゲームや小説やマンガやCDアルバムを置いた（実のところ柚鷺はゲームをしないし漫画は読まない）。

そして机の第一の引き出しには、特にあまり使わないものを入れる。

「ふむ……」

持ってきた荷物により問題が発生した。

柚鷺の私物ではないのだが、親から頼まれたものだ。

なんでも、親も引越すわけであり、自分の趣味を持っていくわけにも行かないので、柚鷺に押し付けたわけだ。

ほとんど、仕事の参考本だったり書類だったりする。

「どうすっかな」

これ以上置くとなれば部屋の中が狭くなるのは確かだった。

しかし、他に置く場所など見当もつかない。

そうして彼は柚鷺が思考していると

「柚鷺ちゃん」

背後にあった部屋のドアががちゃりと開いて、そこから杏里さんが顔を出した。

「どう？ 予めタンスの位置とかは決めたちゃったけど、荷物の整頓とかは如何？」

「殆ど問題は無いんですけど・・・親から預かったやつが邪魔で・・・」

「なに？それ？」

「仕事の書類とか・・・まあ、そんなもんです」

「お仕事何してるんだっけ？」

「・・・・・・とりあえず、これどうにかしたいんですけど・・・」

「・・・スルーなの？」

「・・・・・・」

「まあ、いいわ。とりあえず、荷物を何かに入れて持ってきて頂戴。倉庫に案内するから」

「どうもです」

母方の溜息を聞きながら、柚鷺はとりあえず近くにあったダンボールに書類等を丁寧に整頓して入れる。
大小関係なく、一応入れられるものは入れる。

「結構な量になったな・・・」

「そんなにもてるの？」

「まあ・・・そこそこ、力がありますので・・・」

そう言つて柚鷺は、大量に書類が入ったダンボールをまるで買い物袋を持つように持ち上げる。

「じゃあ、そこって何処ですか？」

「教えてあげるから、着いて来て頂戴。まだまだ柚鷺ちゃんにはこの家の全部を見せていないからね」
「・・・・・・」

思えばこの家をまだ全部見ていないのは確かだ。

この家の敷地面積は、かなりの大きさになっているはずだ。柚鷺が見ていないところが有ってもそれはおかしくない。

一旦部屋を出て廊下へ。

柚鷺の部屋は、廊下窓から見える景色からすればこの『邸』の中心から西側にあるようで、ほかのみんなの部屋もここに並んでいた。

廊下は何時までも続きそうな迷路のような道筋になっている。

ここを一体何日過ごせば全部覚えられるか、分かったものではないが、柚鷺にしてみれば既に『通った道だけ』全部覚えているのでその時間は掛かるまい。

『演習場』……とか言うものは、どうやら中心より東側にあるようで、結構歩いても未だにつかない。

一応言って置くと、倉庫代わりでもあるそうだ。

「……………大変だなあ……………」

「んー？どうかしたの？」

「まあ、こんなに歩いてまで演習場まで行くななんて大変だなあと…
思つて……………」

「あー」

その後、『演習場』につくまでは、数分かってしまった。

「やっぱり広いですね」

「30人程度なら入るわ」

「……………そうですか」

「じゃあ、それはここに置いてもらっていいわ。後の物は、自分で

運んできて頂戴。もう道は分かったでしょ？」

「はい。ありがとうございます」

荷物を置いて柚鷺は演習場を後にして、自分の部屋まで歩いて向かう。

演習場から出てからちよつと進むと、迷路のように既に何本かの道に分かれている。

「すぐに迷子になれるな」

柚鷺は呟きつつ、足を進めた。

ここまでの道のりは、勿論覚えている。

迷うことは無いのだが、好奇心とやらが分かれる道の先に興味を湧かせていた。

まあ、何よりも先に自分の荷物を如何こうしてからにしよう。好奇心の遊びはそれからだ。

部屋に戻って、柚鷺は次なるものをそろえ演習場に持っていった。それを五回ほど繰り返し、全部の荷物を運び終える。

「意外にもあるものだよなあ」

自分でも驚いていた。よくぞ、ここまでの書類を使っていたとなるとは結構な名誉だ。

名誉と言うよりか・・・立派と言うべきだろうけれど・・・

「さてと・・・・・・・・部屋に戻って他の片付けをしないと・・・・・・・・

ふわあゝ」

欠伸を一つ掻いて、『演習場』を後にした。

漆を塗った様に煌びやかな木造の廊下を三步進んでゆく。

そして、途中空気が変わったことに柚鷺は気がついた。

湿度が上昇し、空気中に含む水分の匂いが濃くなっている。

「雨降ってるのか……」

雨が降れば空気も変わる。

それは勿論この廊下が、外の空気と入れ替わりをしているからで、縁側から流れてくる空気がそれにあたる。

柚鷺はそんなことを考えながらも、自分の部屋への道のりを歩み始めた。

ふとして途中に、何を思い出したのか柚鷺自身にも分からなかったが、何時の間にか脳内で彼是思考をぐるぐる廻っていた。

回想に回想が重なり、複雑な思考や理論を柚鷺の頭の中を巡る。

そんな風にして、前方不注意に歩いていた為、角に差し掛かるとき。

「きゃ！」

「ん？」

誰かとぶつかった。

勢いが強かったのか、如何いう勢いを着けていたのか柚鷺には分からなかったが、しかし柚鷺の体は反動によって尻餅どころか顛倒てんとうすることになった。

そして、災難なことに後頭部の一番痛いらしい部分に直接に衝撃系の激痛が迸った。

[illegible]

痛みで現状がなんだか把握できない。

とりあえず、自分でも意味不明な理解不能な言語を発して後頭部の痛みを少しでも減らそうとのた打ち回って居ることだけが分かった。ぶつかつた相手が一体誰なのか分かつたのは、頭の中の火花が段々納まつてくる数十秒前だつた。

翠の長いツインテールの髪。それが葱の緑の部分と比喻するのならあやがち間違っではない。

襟元というより、チャックが全快まで締まっていなかったために襟に見えてしまうノースリーブでネクタイを絞めているブレザー。スカートベルトから下げたあるウォレットチェーン。

柚鷺から見ても寒そうにしか見えない、膝の中心までしかないスカート・・・だが、転倒したおかげでその奥にある、黄緑と白の縞々のパンツは、はっきり見えていた。

「いっくううう……」

だが、現在の柚鷺にはそんなことは一切現状を処理できず、兎に角頭の中の痛みを追い出そうとふらふらしながら立ち上る。

そして、目の前に少女が尻餅をついているのを発見して……

「あ、大丈夫？」

と尋ねた。

「いたたたたた」

少女は、何かを誤魔化す様にして頭を掻く。

「あ」

少女が柚鷺のほうを向いて声を漏らした。

少女は……未来だった。

「柚鷺君……」

呆然とした顔で未来は言った。懐かしさを感じているような眼差しで柚鷺を見た。

そして、その光景を残念そうにしていた。

「大丈夫か？つて僕は聞いているんだけどな」

「あ！うん。大丈夫だよ」

呆然とした状態で柚鷺に声をかけられ我に帰る。

そういえば勢い余ってぶつかっちゃったんだっけ？と未来は思い出した。

ぶつかった際、何か鋼鉄同士がぶつかったような凄い音がしたけど、気のせいかな？と思考を並べる。

がその音の大元は、目の前の少年の後頭部のものだったとは気付きもしない。

「立てる？」

柚鷺がしぶしぶ手を差し伸べる。

「あ、えつと・・・その・・・うん」

恐る恐る未来は柚鷺の手を取る。

最初触ったときは、変な緊張が未来には奔った。が再び取るとそれはなくなっていた。

柚鷺の手が未来の手を握る。

暖かい感触が未来の手を包み引つ張られる。

その反動で未来は立ち上がった。

本来であれば柚鷺が引つ張られる側なのだけけど・・・

「ありがとう」

「今度から前向いて歩け」

それは柚鷺が言う台詞ではないのだけれど・・・

そして、背を向け柚鷺は面倒くさそうに自分の部屋へ歩み始め、未
来は自分のやることを思い出し柚鷺とは違う廊下を走っていった。

廊下を歩いていると、外が見える縁側を通りかかった。雨は強さを
増し土砂降りになっていた。

屋根を叩く音が連打し、雨水が屋根から滴っている。

それが庭の窪みの場所に水溜りとなって蓄積する。

息を吐けばそれが白くなっていた。どうやら結構気温が下がってい
るらしい。

手に寒さを感じられる。

単純な光景が柚鷺の視界に入る。

瞬間、視界が爆発した。

「・・・っ!？」

一瞬、全身が槍で貫かれたような激しい痛みと、精神を縛られる様
な心の痛みが連鎖する。

視界が、フラッシュバックする。何度も、白黒の映像が記憶にある
声と共に頭の中に流れる。

頭が痛い。割れそうなほどガンガン響いている。

「ううう・・・」

その場に柚鷺は膝を着く。朦朧とした感覚が全身の自由を奪ってゆく。

恐怖だ。記憶の奥に眠るあの恐怖が雨と言う光景によって柚鷺の頭の中で復元されたのだ。

「はあ・・・はあ・・・」

視界がぼやける。どんどん意識が遠のいてゆく。

頭が痛い、割れそうだ。声が、映像が、痛みが・・・

「柚鷺ちゃん？」

そこで、我に返った。

横を見ると、母方が立っていた。

「大丈夫？」

慎重な顔で話しかけてきた。

「・・・」

息を吸う。大丈夫だ、ちゃんとすえてる。

恐怖は？もつない。

手を突き、膝を曲げて体を持ち上げる。

「・・・・・・・・・柚鷺ちゃん？」

「・・・・・・・・・大・・・・・・・・丈夫・・・・・・・・です」

かすれた声だったが、無理がないような振りをして言っただけど・
・

「ぜんぜん大丈夫には見えないわよ？」

「ほんとうに・・・・・・・・大丈夫ですから・・・・・・・・」

汗が頬をつたるのを感じた。

「片付けないと・・・・・・・・」

再び歩みだし、柚鷺は母方の横をすり抜け自分の部屋に戻り再び片づけを始めた。

汗はなかなか引いてくれなかった。

殆ど終わっていたので、小物などの置物を置く場所を試行錯誤し、
気付けば自分なりの置き方になっていた。

「こいつで終わりか」

最後に取ったのは、写真だった。
透明のプラスチックの入れ物に入った、簡易的な写真入れだった。

足がありそれで立たせることが出来るようになっていた。

写真に写っているのは、自分と碧の髪の長い少女だった。
どこか、未来にそっくりだった。

顔立ちも髪型も似ているが、その顔は弱弱しく、か弱く、可愛く映っている。

それが唯一の違いといえるだろう。

表情はけして他人には真似出来ない様な微笑だった。

その隣には同じく微笑をした柚鷺が居た。

彼の肩に彼女が頭を乗せるようにして、抱きついている。
幸せそうな二人に見えないわけが無い。

柚鷺はそれを見ながら自分の机の上においた。

自分の、恋人の顔を見て再び微笑んだ。

1
× 2
|| 2話（後書き）

次の更新は結構遅れそうです。

1・5_×2_〃3話(前書き)

初音ミク project diva extend が早くや
りたい・・・

1・5×2〃3話

部屋の片付けが全部終わった柚鷺は、一先ず休憩と言う形で、雨の中を散歩にでも出かけようかと思い、部屋を出た。

空気の湿度の匂いが更に濃くなっている。どうやら本格的に降っている様だ。

屋根を叩く音が、耳にもよく聞こえる。

その分、体感温度がかなり低く肌寒い感じがする。

「喉が渴いたな」

とはいうものの、台所で飲むにしても台所が分からない。

迷路のような邸であるこの家は、柚鷺はまだ全部見ていないので下手に動くと何処だか分からなくなってしまう。

だからと言って、その場に立ち止まって暇を潰してのどの渴きを我慢するのも嫌だった。

だいたい、何で暇を潰せば良いのかも分からない。歩き回ってこの住民に場所が何処か訊くのもなんだし……

そうしているうちに、柚鷺の傍に一人の影がそこに近づいていた。

ゴーグルをした人だった。

柚鷺は考え事をしているが、その気配に全く気がつかないわけでは

ない。

と言うよりも、数秒前から既に知っている。

軍人である親から「空気の流れを読む」という無茶なことをも叩き込まれている。

「『雰囲気』が変わることで、そこに怪しい奴がいるのが『本能的』に分かるだろ？」

いや、わかんねーわ とその時柚鷺は答えた。

親のように、そこまで正確に感じ取れるわけではないが、少なくとも感じ取れないわけではない。

だからこそ

「ファーストインパクト！！！」

掛かって来る・・・というよりも、それはアタックだったがそれを余裕で避ける事が出来た。

アタックした人間は勿論止める者が無く、その先にあった壁に激突した。

堂々と真正面から。顔面をぶつけた。

それと同時に、凄い音が響いたような気がする。

「ん？」

考え事を止め、柚鷺は改めて初めて気がついたようにゴーグルを掛けた人間を確認した。

黄緑色のショートヘア、なんか長い横髪。赤と黒のゴーグル。未来より少し背が高い体躯。

TとかかれたYシャツにパーカーを羽織り、膝までしかないミニスカート。

【初島恵美】・・・

「（こいつってこんなに元気な馬鹿野郎だったか？）」

大方呆れた顔で柚鷺は恵美を見た。本気で馬鹿だと思った。

なぜ突っ込んできたのか？何故そもそもそんな発想と行動力があるのか？

それを踏まえて柚鷺は馬鹿と思った。

スカートが翻り、レースがあるショーツがそこから丸見えになっていた。

だが、それを見たからといって柚鷺の羞恥心と言うものが動くものでも揺らぐものでもない。

無言で恵美に近寄る。

ぶつけた為それで昏倒しているようだ、柚鷺は判断し溜息をついて恵美の体躯を持ち上げ背負う。

ひとまず、自分の部屋につれて行き自分のベッドに放ると、部屋を出て再び廊下に出たところで、

「どっかいくか」

そうどっかだ。どっか行けば何か成る筈だ。つまり、どこかでフラグを立てようと魂胆なのだ。

何か起こると信じて柚鷺は廊下を歩き出した。

「・・・・・・・・」

歩き出した・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

歩き出した・・・・・・・・のだが、何も起こることはなく何かむやみに廊下を進んでいるだけの結末になった。
空しいにも程がある。これではお散歩だ。

「もうどうでもいいや。部屋に戻るか」

踵を返して廊下を歩く。

結構な道を歩いていたようで、景色は結構変わっていた。

息を吸うと空気の匂いが更に濃くなっている。空気中の湿度が更に上がって水分が高密度な為だ。

多分、更に雨が多く振っているのだろう。

だが、その景色を見たくはない。

鼻の中に不快な刺激を感じた。
くすぐつたい様な痛いようなそんな感じだった。

そんな感慨に浸りながら、廊下の角を曲がり――

「うわ！」

「うお！」

「おっと」

角を曲がる際黄色い者（二匹）が突撃して来た（いや、走ってた）。
それを、一歩下がることで柚鷺は避ける。
そのまま黄色い者（二匹）は、転んで回転して一度跳ね　びたん
と叩かれる様な嫌な音が鳴って止まった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・さて、部屋に戻って――」

「――」

「うぬおい！無視するなよ！」

「んだよ、生きてたのか」

「あの程度で私は死なないよっ！？」

なんだ元気な餓鬼じゃん。

とりあえず？柚鷺は安心した。いや、別に心配はしていないが何となく安堵感が出た。

何故安心しなければならなかったが、まあ安堵した。

意味が分からん。

「いやー、意外に柚鷺兄さん。キツイ事言っね」

「黙れ小僧。挽肉に糺り潰すぞ」

「それはもつときついよ!？」

「いや、冗談だし・・・」

結構ノリのいい黄色だった。

そういえばこいつらの名前ってなんだっけ?と今まで話していたくせに柚鷺は今更思った。

自己紹介はされた。だが、存在感としてとても惨めだった気がした。

「そっぴや、お前等って名前なんだっけ？」

「・・・ええ」

精神がどん底に陥ったような表情で二匹は呆れた顔をした。
もうなんか、何もかもが終わったことを聞かされ半信半疑で聞いた
ときのような表情だった。

「鈴と蓮だよ？覚えてないかなあ？」

「ああ、そんなの居たな」

「うぬおい」

たぶん、リボンが鈴で姉で、こっちのポニーテールの野郎が蓮か・
・。

どっから見ても双子だな。

外見だけで、柚鷺は二人を判断した。

「んで？そんな元気がお前たちが廊下なんざ走り回って何してんの？」

「別に走り回ってたんじゃないんだよ。お母さんに呼ばれたから、走っていたら柚鷺の兄ちゃんに出遭ったって訳」

「漢字が違う」「え？」「いやなんでもねえ」

なんかこいつ等と話しては時間の無駄になりそうだと考えた柚鷺は、一先ずその場を立ち去ろうと思い鈴たちに背を向けた。

「何処行くの？」

「お前等は早く行かなくていいのか？」

「「あ」「

柚鷺に言われ呼び出しを食らっていた二人はその事を思い出し、柚鷺と反対方面の廊下を走っていった。

邸はやはり広い。この家を作るのにどれだけ時間が掛かったと考えると面倒で考えたくもない。

ふと、客間に差し掛かったとき、使用人が部屋の掃除を手際よくやっていた。

「・・・・・・・・・・」

日本にこんな風景があるとは絶対的に思っではいなかったけれど、あるんだよなあ。

未知なる世界は眩しい・・・

はあ　と柚鷺は溜息をつくと再び歩き出した。

眩みそうになる感覚でふらふらと廊下を歩き順路を覚える。

廊下の道のりを丁寧に覚えるのは困難なので、頭の中で図形を形成し家の廊下の図を覚えてゆく。

途中で忘れそうになるが、何とか形成する。

そんなうじうじした感情が続くと・・・

「ああもう!」

となる。

柚鷺は髪をくしゃくしゃと掻き回し脳内を少し冷ます為に、廊下の中心で背伸びする。

「頭が痛いなあ・・・」

根詰めすると急に頭痛が襲ってくる。

長時間でも短時間でも三十分が人間の集中力が限界だと言われるが、柚鷺は一時間が限界になっている。

それは、三年前からのずっと疑問だったことだ。

四年前より前の思い出は一切ない。
今一番古い記憶に残っているのは、誘拐されていた期間の記憶、病院のベッドでくたばっていた時の事。それから、隣で誰かが泣いていたこと。

その後のことはあやふやで覚えていない。

とりあえず、引越して一部の記憶が消失している為そこを補う為に、一年間兎に角勉強して何時の間にか検定とかなんか獲ってて氣付いたら中学2年生になってた。

その時初めて自分で氣が付いた。集中力が異常なほどに長かった。

だが、最古の記憶を掘り出してもそのことは結局分からなかった。

ともかく勉強ばかりしていたので、地元では余裕で成績は一位だった。

運動も別ではなかった。

元々親が自衛隊の人間だったので、いろいろな護身術を習得し、ついでにイロイロ学んだ。

そして田舎では、特別な【能力】も習得させてもらった。

「……綾香……元氣かなあ」

誰かの名を呟き、再び歩き出した。

地元では殆ど何も言わずに出てきてしまった。今頃騒いでいるのか分からないが、ポケットにある携帯には何もかかって来ていない。

こつこつ間が空くと後が恐い。すげえ怒られそうな氣がする。

「田舎は女の子ばかりだったからなあ。男子って言えば【木田】程度だからなあ・・・他は成人やおっさんや爺ばかりだったからなあ」

事実田舎は色々と広がったが、柚鷺と同年や年の近い年下や年上は全員女子だった。

男子は殆ど居らず、精々柚鷺と隣の家に住んでいた【木田 良樹】だけだった。

男と言えば、年増のおっさんや爺やどっかの親父さん程度だけだった。

一体如何いう田舎なんだろうと何度考えたことだろうか・・・

「まあ、考えるだけでも無駄だろうけれど・・・」

なんか女が多いだけの田舎という適当に煽った様なことにしておいた。

御粗末な言い方かもしれないが・・・

その後、廊下を散々歩き回ったと思えば何時の間にか、自分の部屋へ戻ってきていた。どうやら回っていただけらしい。

無駄な順路を覚えたような気がする。

これは無駄足だ。

「・・・べつに、いつか」

とりあえず自分の部屋のドアを開け中に入ろうと、ドアノブに手を

かけた。

「は？」

部屋に入った数秒。認識するのに結構時間が掛かった。

部屋を彼方此方探られたような有様だった。

漁ったものと思われるものはもとの位置に相当に戻してあるが、雑で探ったのはバレバレだった。

「なんだこりゃ？」

いや、なんだこりゃ。と言つてる場合じゃない。これは誰の悪戯だ？あ、でも、思い当たりはあるな。

誰がやったかは大体想像がつく。

というか、分かっている。

「ぐす」

「狸寝入りはやめろ。初音恵美」

犯人は――――柚鷺のベッドで寝ている恵美だ。

「すいませんでした」

大人しく白状した恵美は既にげんなりした顔だった。

今から遡ること三十分。

説教をされ、満遍なく駄目だしされ、徹底的に弱点を当てられ、完膚なきまでに精神を削られた。

全く恵美のことを知らない柚鷺だが、見た目で判断して言葉を並べてみたら当たっていた。

見ていれば少し恵美は気の毒だと思いが自業自得である。

と言っても柚鷺はそれほどまでの娘とは言っていないのだが、結構意表を突いたので恵美は相当沈没していた。
情けないほどに陥没していた。

精神爆砕。精神粉碎。精神破砕。精神撲殺。精神裂傷。精神爆破。

精神殺傷。と言う精神的な心に受ける精神的ダメージの名前が並ぶ。

もう檻褻檻褻。

「酷いよ!」

眼球に突き刺す勢いで指を立ててくる恵美。そのポーズ少し腹が無意味に立った。

「うるせえよ。俺に激突しようとしたのは態とだってことは、この時点ではもう分かったよ。理由は簡単。お前が俺の部屋に入りたかっただけなんだろう?」

「どうでしょう?」

その言葉に柚鷺は無言で、恵美の頬を引っ張る。

結構、スイッチが入りかかった。

「いひやいいひやい」

目茶目茶痛がっている表情が見るだけで分かる。

結構人の頬は伸縮性があるらしく、恵美の頬は結構伸びている。こ
う・・・三cmくらい。

んで、離す。紅くなっただ頬を押さえて恵美は当然のように

「何すんの!？」

と怒鳴った。

「ほらあれだよ。人体実験」

「頬を引っ張ることが人体実験!？」

「嘘だ。お前がうざい」

「うわあ、男子に初めて正面でうざいって言われた・・・」

意外にも、相性はいい・・・かもしれない。

「まあそんなことはどうでもいいや。言っておくが俺の部屋には、
何にもないぜ」

「いや、単刀直入にスパツと言わないでよ!・・・今まで、面白
そうなものを探していたあたしがすごく虚しいですけど!」

「ざまあ、自業自得だ」

「ど、如何したの私なんかじろじろ見て・・・」

説教や何やらが終了して、早二十分。

柚鷺は自分の部屋にいる、もう一人の人物をじろじろ見ていた。

邪な気分は一切ない。寝そべっている物に対しての疚しい気持ちは一切ない。

唯一ある気持ちは、

「何で、お前が俺の部屋にいすわってんの？」

「え？悪いの？」

「俺はここに来てまだ一日も経ってない」

「だから？」

「つまりどころ！まずは一人での空間を馴染ませたい」

「というと？」

「お前がいちゃ馴染めねえんだよ」

恵美は柚鷺の寝る場所が気に入ったのか、ベッドになっところがつて柚鷺の私物である雑誌を読み老けていた。

ファッション雑誌である。

「馬鹿か。アホ」

「アタシは馬鹿でもアホでもないよっ！」

「ほう、じゃあ、間抜け？」

半ば怒り気味で、恵美は喰いかかって来た。手には硬い武器を持っている。

よくよく見るとあれば、田舎から持ってきた小さな木刀だった。

「勉強くらい並には出来るよっ!」

「そんなの当たり前じゃねーか、お前が並以上なんか出来るわけねーわ」

しかしながら、取っ組み合いをするわけでも、先ほどのように柚鷺を恵美がボコるのでもなく、ふたりは、その場で言い合ってたただけだった。

柚鷺は椅子に座って、恵美はベッドになっところがつて、其々の体勢でいた。

「べーだ。柚鷺の意地悪ー」

「貧のねえ娘だ……」

ベッドで寝返りをうちつつ、舌を出してまさに情けないような格好をしていた。

実のところ、特に柚鷺にとって恵美が邪魔だとかは思っていない。寧ろ弄っている。

いや、試しているとも言えるし、実験しているとも言えるだろう。

これから、一緒に過ごす家族のことを少しでも知っておくべきだから弄っている。

「ははは」

「何笑ってんの？」

少し、怒り気味の恵美が柚鷺の顔を見て怪訝な顔をする。

「なーーんもねーよ。ただ、これから何日もお前等に世話になるから・・・少し、気分が変だったただけだ」

柚鷺は、精一杯の微笑を恵美に向けてそう言った。

「ふ、ふーん」

行き成りそんなことを言われた恵美はよく分からない顔をして首をかしげた。

柚鷺は本当に掴めない人物だろう。

性格は異常気象のように変わり、その本心を掴む事が出来ることはない。

軽薄で、軽快で、嘔吐きで、意地悪で、悪趣味で、性格悪で、小芝居好きで、我が儘で、鈍感で、皮肉屋で、正直で、不真面目で、真面目で、ぶっきら棒で、不器用な奴で、器用で、何処までも優しく、素直だったり、不良みたいだったり、恐かったり、優しくったり、善人で、悪人で、責任無視で、責任負いで、自分を責めたり、他人を責めたり、自己犠牲な、何処までもいい奴なのだ。

数えれば多分きりは・・・あるだろうけれど、それでも、数え切れない。

如月柚鷺はそういう人間だ。

・
・
・

ところで、先ほどから柚鷺は机に向かって何を没頭しているかと言うと・・・

「さっきから、ノートに書いているけど、なにやっての？」

「暇つぶしに、数学の問題やってる」

「どんな暇つぶし・・・？」

特にやることも見つからなかった柚鷺は、暇つぶしを考えたのだが、呆気なく思いつかず、今に至っている。

勉強で暇つぶしとは聞いたこともないだろうが、柚鷺に今出来ることはこれしかなかったのだ。

「もしかして、ガリ勉？」

「んにゃ、そうでもないよ。俺は、そこまで一生懸命に勉強しているつもりは無い」

「それにしては、熱心だね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

熱心に行っていることはけしてなかった。

柚鷺は勉強は嫌いではない。しかし、中一以来進んでやろうと思ったことは無い。

熱心になったことは無い。寧ろ集中していると思ってほしいものだ。

「で？数学の何やっての？」

「先行学習・・・と言うよりも予習みたいなの」

「どんなの？」

「代数学」

「なにそれ？」

「数の性質・関係を文字を用いて明らかにする数学。高校じゃ習わないかな？大学とかの勉強だと思う」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

柚鷺の説明に、恵美は声も出せずに、何も言えずに、啞然していた。

この人はいったい何を目指してそんな勉強をしているのだろう。と・・・・・・・・・・・・・・・・もの凄く気になるわけだが、なぜか聞かないほうがいいような気がして、恵美は何も言わなかった。

柚鷺は何でもやってきた。失った記憶の全てを補うために、『全て』を対象にし勉強し学んできた。

だからこそ、大学の数学だろうが、外国語だろうがやってきた。

努力に努力を重ねる。一年という歳月の中で、柚鷺はそれだけのことを学び尽くした。

ふと がちゃり とドアが開き

「柚鷺ちゃん」

と、母方の杏里が柚鷺の部屋に顔を出した。

「はい。なんですか？」

椅子を回転させて、背後にいる杏里を柚鷺は見た。
既に部屋に入って柚鷺の目の前まで来ている。

手には書類を持っていた。

「あら？恵美が何故いるのかしら？柚鷺ちゃん、誘惑でもしたの？」

物凄い勘違いを吹っかけられた。一瞬グーパンが飛びそうになる。

だが、そんな言葉には動じず柚鷺は

「誘惑自体に興味がないのに誘惑してもしようがないでしょう・・・」

と呆れ半分で答えた。

「それよりも何かようですか？」

「そうだったわ。柚鷺ちゃんに【私立白媛高等学園】の学校内容のことを教えておこうと思ってね」

「あー、そういえば、あまり有名ってなだけでほかの事は知らなかったな・・・」

「じゃあ、この案内書を読んで。多分それで、学園の大抵の事が分かると思うから・・・分らないことがあったら夕食中に聞いて頂戴。後二十分で出来るけれど、それまでには呼んでおいて頂戴ね。それと、夕食は豪勢だから」

書類を受け取りながら杏里に柚鷺は怪訝そうな顔をした。

「豪勢？なぜですか？」

「今日は、家族が一人増えたからよ」

その言葉に、杏里も微笑を表す。その言葉に、柚鷺は首をかしげる。

そして杏里は部屋から出てゆく。

柚鷺はよく分からない違和感を抱きつつ

「・・・・・・・・ふう。人間ってよくわかんないなあ」

と呟いた。

手に取っていた、書類に目を通す為、【入学案内】と書かれたペー
ジを捲り、最初に書いてある案内文章を読んだ。

私立白媛高等学園案内

1：我校は、最衛生で最適な環境を提示した場所であり規則正しく
一切の違反を許さない学園である（多分これは自慢）。

2：本校は進学校であり、生徒一人一人に秘められる才能を発揮
させ、進学、就職率を100%を目指す学校です。

3：本校は、女生徒を主に教育する場であり、女性に合った進学
や就職を見つける学園です。

4：本校は、共学ですが女生徒が主に中心ですので、男子生徒が
入学することは年に数人です。よって申し訳ありませんが本学校に
よる、進学、就職率は低いですが、全力で対応させていただきます。

・
・

・
「ん？」

4行目の文に柚鷺は目が行った。あらかさまにこれは変だと気がついていた。

文章が変だとかではなく……こう……人生に関わるような重大的な……あれ

『本校は、共学ですが女生徒が主に中心ですので、【男子生徒が入学することは年に数人です】。よって申し訳ありませんがあまり本学校による、進学、就職率は低いですが、全力で対応させていただきます。』

「男子生徒が入学する人数が………数人？冗談にも程がある………」

「冗談じゃないよ」

先ほどまで、無言だった恵美がベッドの上に正座して、こつちを見ていた。

「その学校……元々女子高だったし………」

「……ソレハ最悪ダ………」

ぎくしゃくぎくしゃくぎくしゃくぎくしゃくと柚鷺の声がテンポが音程が崩れる。

「声が宇宙人っぽいよ」

そう恵美が言おうとしたが

「冗談じゃねー!!!!!!!!!!!!!!」

柚鷺の絶叫が木魂するぐらい、屋敷内に響いた。

使用人たちが一斉にその声に　びっくり　と反応し、更に他の部屋にいた住人まで　びっくり　とした。

「何これ！？俺の居た田舎と何にもかわんねえ！」

柚鷺のいた田舎は、女子だらけに加え男子で同じ年が一人で、他は全員大人でおっさんか爺さんだった……。

その他幼馴染や年下やちょっと年上は全員女の娘だった。

まさにハーレム！大絶叫！引越しと言う事件が起きても何も変わらないと言う事実！

「虚しっっ！」

と、柚鷺は心で絶叫した。

「ちょっと黙った！」

柚鷺の暴れっぷりにちよつと鬱陶しくなったのか、柚鷺の首に腕を巻き、首を絞める。

首を絞める力がヘラクレス級。

「おおおおおおおおおおおおおお．．．ギ．．．ギブギブ」

首を絞めている恵美の腕を　ばしばし　叩く柚鷺の表情は死人同然だった。

だが、それに全く応じない恵美は、暫くそのまま抱擁するかのよう
に、首を絞め段々力を弱くして静まるのを待った。

力が弱まるにつれて、柚鷺もだいぶ落ち着いていった．．．．と
いうよりも、呼吸困難に陥った為、荒い息を吐いていた。

「は、初めてだ．．．．呼吸こんなになる日が一日に、に、二回
もあるなんて．．．．」

「今のは、自業自得だと思うけど．．．．」

「ともあれ、母さんもどえらい学校を見つけて入学させようとしや
がりやがったか。後で電話入れてけちゅんけちゅんにしてやる」

「たしかに、男子が数人しか居ない学校なんて早々ないもんね」

「因みにお前はこの学校？」

「え、うん。兄上達も未来もだよ」

「なんだよかった」

「？」

「知り合いがないんじゃないじゃ。少し心配だったからね」

「意外にも心配性？」

「初めていく先は、不安で一杯なんだよ。お前たちと会うのも、こ
れでも緊張していたんだ」

柚鷺は眉を緩めて、笑って答えた。

こう見えて繊細なのだ。性格も決まっていただけに．．．。

柚鷺は放って置いた資料を再び手に取り、内容を黙読する。

説明

我高校は、神奈川県秦野市に所在となっておりますが、正確には秦野市から数キロ離れた茅ヶ崎から橋で渡った島に所在しております。申し訳ありませんが秦野市周辺の方は、電車通学とさせていただきます。

「うわお。島を丸ごと使っていやる」

確かに橋を渡ったその先にあるが、その先にある島を丸ごと使った学園だった。

ある意味凄い。

「そうは言っても、学校ほどの大きさしかないけどね」

「でも、凄いよ。島を丸ごと使う学校なんて全然ないだろ？」

「まあ、そうだね」

その後、恵美談笑して少しばかり、自分の事を話し合った。

そして、十分ほど経ち食事の準備が出来たと使用人に言われた、二人は部屋を出た。

1・5×2〃3話（後書き）

テストだりい・・・

2
×
2
||
4話(前書き)

更新。

2 × 2 〓 4 話

「食事は豪華で、迎えられるなんてことは、一生無いって思ってたんだけどなあ」

艶やかな眩しい漆を塗った廊下を歩きつつ、柚鷺はそう呟いた。

「でも、あるということは凄いでしょ？」

「お前が自慢していいのか分からないな」

招待された場所まで徒歩数分。この邸は随分と面倒だ。迷惑だ。

とっちはいけないので、黙って柚鷺は歩き続けた。

「夕食は何かな？豪勢って言うから、鍋か？鍋なら蟹か？」

「・・・お前は、俺の豪勢な食事を貪ろうとでも企んでいるのか？」

「え？い、いや、あははは、違うよ。勿論柚鷺のための食事なんだから贅沢はしないよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「な、なに？その極寒の眼差しは・・・・・・・・」

柚鷺の目から発射される極寒の視線が、恵美を攻める。

そして醜く口元を緩めると笑った柚鷺は

「多く食うと太る」

「うっ」

攻撃を開始した。それも最も失礼に・・・

「さらに多く食べるともつと太る」

「ぐう」

「喰いすぎると弾腹」

「ぐは！」

「甘いものとカロリーは高い」

「グフツ！」

「肉食だともう最高最悪。特に脂身」

「ぐばあ！」

柚鷺の言葉によって恵美は撃破された。

彼女にとっては言葉の抜群の攻撃力だった。

ともあれ、二人の仲はこれで適当に深まって訳であり、柚鷺は他家族とも仲良くしないといけないな などと考えつつ、和室までやってきた。

艶やかな廊下。真っ白な壁。楼閣な天井。鼻を衝く水分が多い空気の匂い。天井を叩く雨の音。

そして、また随分豪華な襖が目の前にはあった。

「すげえ。見つとも無いほどすげえ、寧ろ無様だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

意味の分からない柚鷺の言葉に溜息をついて恵美は襖に手をかけた。

「ふむ」

「？」

みんなが首をかしげる中、柚鷺は一人頷いた。

どうもこの家族には父親のような人が居らず、未来の母たった一人がいる程度で他は使用人たちや杏里の兄弟の息子や娘たちだけ……
・・男は数人。

柚鷺、海斗、樂歩、蓮

かなりこの家族では下回りな軍団っぽい。男より女が強力的な感じ。

特に海斗がボコられていそうだと柚鷺は見た。

ところで、豪勢な食事は既に目の前へ展開しており、見事鍋だった。

すき焼きである。

すき焼大戦争である。

「美希が柚鷺ちゃんの隣って………凄い組み合わせ………」

↑杏里

「感慨なく言ってるでしょ、お母さん」↑未来

「そんなことは無いわ。まるで兄と妹よ」↑杏里

「物凄く望ましそうな顔だわ」↑芽衣子

「俺は望ましくもねえ。てか、」↑柚鷺

「今のままで十分なの？」↑美希

「うん。実は言うと、僕は都会より田舎が好きだ」 ↑ 柚鷺

「田舎って何？」 ↑ 美希

「でっかい建物が一切ない。そして、空気が濃い！美味しい！産物が美味しい！」 ↑ 柚鷺

「わあ。今度連れてってー」 ↑ 美希

「止めとく。姐さんに怒られる。マジであの人五月蠅いから」 ↑ 柚鷺
「誰だそれ？」 ↑ 梨花

「頭良くてDSで特に男子を弄るのが好きで、起こると五月蠅くて暴力で来るから少し喧しい人で……（以下略）」 ↑ 柚鷺

「うええ……」 ↑ 海斗

「とりあえず、五月蠅いが美人だと言える。一言言つならば、絶対結婚したくは無い」 ↑ 柚鷺

「そこまで？」 ↑ 梨花

「いつも被害者としては分かる」 ↑ 柚鷺

「……ご愁傷様ね」 ↑ 梨花

「ま、別に他人事だし……関係ねーよな」 ↑ 柚鷺

そんな訳で優雅に、または平凡に、柚鷺の歓迎会は始まった。

すき焼きとはまた、ご馳走だった。

大体七時にはそれは終わった。

以下回想……

「うおおおおおおお、これは拙者の肉うううう！！！！！！」 ↑ 樂歩
「横取りさせるかああああ！！！！！！」 ↑ 芽衣子

「それはアタシのよ！海斗！」
↑梨花

「ぐはあ！」
↑海斗（蹴られた）

「葱が美味しい♪」
↑ 未来

「とっただー！」
↑ 恵美

「邪魔あ！」
↑鈴

「 「 「 「
・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・
「 「 「 「
↑ 柚鷺
杏里 蓮 美希

どうもこの家族は、なにやら肉に關しては、取り合いと言う名の戦争が勃発しているらしく、今その現状を目の前で見てゐるわけだが。

「すげえ。この家族殆ど馬鹿だ。それも女の子」
↑ 柚鷺

「うー、お肉がほしい・・・」
↑美希

「いつもこうだよ。たく……」
↑蓮

「ふふふ」
♪
「杏里」

上記の四人は戦争国では無い所謂日本のようなもので、戦争を破棄している為、あのように戦争には突っ込んで行かない。

たかが、肉のことで突っ込むほど愚かしくもない。

ちなみに、瑠歌姉さんが既に部屋へ行ってしまった。

ものすごく行動が早い人である。COOLな天才に感じた。

しかし、美希の表情は肉を食べたいといわないばかりだった。たので、

「しかたない。ほら」

柚鷺は自分の御椀の中に入っている肉を、美希に分け与える。

「
い
い
の
ー
!
?
」

美希の顔が一気に明るくなって元氣潑刺に成る。

人間の欲望ってすげえと柚鷺は内心で感心する。

欲望を解放された人間の心は潤いしく甘美で、可愛いものだ。幼女となればなおさらである。

まあ、柚鷺はロリコンではない。ただ単に、笑顔が好きなだけで、人の笑顔を見るとこう……『ああ、可愛いな』と思ってしまうのだ。

男、年増、以外ではあるが・・・

「アタシにもよこせええええええええええ！！！！！！！！！！」

柚鷺に向かつて酒に酔いに酔つた芽衣子が突つ込んできた。

「うおおお！！！！！？？？」

机の上を跳躍し滞空して柚鷺の真上から突っ込んできた。

まあ、突っ込んできた方がいいが、箸を向けられて突っ込んできてもらっては、箸が凶器だ。

欲望と言う物凄い剣幕だったのだ

「逃げるが勝ち！」

御椀を丁寧置いて、柚鷺はその場から脱した。

「待ちやがれ！」

追ってきた。よりによって、ご丁寧に御椀を置いたというのに、追ってきた。

しかも、芽衣子だけではない。戦争していた全員だった。

ノリがいいのか、それとも肉が欲しかったのか、どちらにせよ、逃げなければいけないと考え襖を開けて、廊下へでた。

そのまま疾走し、縁側まで駆け抜けると、外へ出る。

出た瞬間、雨が全身を叩き、泥濘の感触が足に伝わり、冷え込む温度が肌を撫で、空気が鼻を衝いた。

靴などを履いていないので、靴下ごと泥濘に突っ込むことになった。

そのまま、庭にあった岩に登り屋根の縁へ跳躍した。

縁を掴んで這い上がり、屋根の上へ上がった。

「何処へ行つたあああああ！」

屋根下の廊下を慌しく何人もの荒ぶった人間が通り過ぎてゆく。

何の信念があつて、あんな風に成るかはわからない。

ただ、あんな音は何は絶対にならないと決めた。

そして、他の連中はどっかへ走っていった。

間一髪。

「はあ」

白い息を吐く。

全身は既にずぶ濡れで、雨は全身を叩き、寒さは肌をなで、水分の空気は鼻腔を衝く。

正直言つて寒かったりする。

だが、あの『恐怖』^{トラウマ}はない。先ほどのことで、精神的な高潮が意識をずらしているのだろう。

柚鷺は、縁を掴むとそのまま屋根から下りて、庭に着地し、縁側から再び入った。

無論靴下を脱ぎ、髪は濡れて水分が入っているので絞る。

それらを済ませると、再び先ほどの部屋に戻った。

中には、杏里さん一人しかいなかった。

「おかえりなさい」

湯飲みで緑茶を啜っていた杏里がそういつて出迎えてくれる。

「あれ？ほかは？如何しました？」

「部屋に戻ったわ。随分、ずぶ濡れね」

「逃げたときに庭に出て濡れましたから。逃げる為に、なんでもした結果って奴です」

柚鷺がそう、冗談半分に言ったその言葉が杏里の表情を変えた。

「まだ、逃げているの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

杏里さんの言葉に、柚鷺は一瞬黙した。

逃げている。その言葉から柚鷺は逃げることさえ出来ない。

「・・・・・・・・仕方がないですよ。逃げないと、落ちてしまいそうですから・・・・・・・・」

詳しいことは言おうとしない。だが、その深刻な顔からは訊いてはいけないと

「そう・・・・・・・・でも仕方がないわ。逃げなきゃ。逃げなきゃ。って思ってるしか、今は無いものね」

「そうですね。でも、母も義母^{かあ}さんも、何れは過去が追って来ると言っていました」

二人はそんな風にして、脅えるように、逃げるようにして、話した。

恐がっているのかもしれない。と柚鷺は思う。

何時も後ろから追いかけてくるように、憑いて来るように、前に向

けない自分がそこにいる。

恐い、暗闇の中で、覚えている自分がある。

今日はもつと酷い日になるかもしれない。立っているのもやつのこと。

支えてくれるものなんて何もなくて、だって自分は強い人間じゃないんだ。

逃げて追ってくる物は、絶望だけ。

「ぶえつくしゅっ！」

「そういえば、ずぶ濡れね」

「ええ。すぐにでも体を温めたいです」

「そうねえ・・・風呂にでも入る？もう7時だし、丁度いい時間じゃない」

「じゃあ、入らせてもらっていいですか？今日は、早めに寝ようって思ってた・・・」

「柚鷺ちゃんって何時ごろ寝るの？」

「大抵が九時です。遅い時で十一時ですかね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ああ、一応確認ですけど、僕が入っている途中に、別の人に入っているよ。なんて言わないでくださいね」

「どうして？」

「その口調からしますと、入れる気満々ですね・・・」

「当たり前じゃない。そういうのが家内では常識よ？」

「知らねえよ。とりあえず、止めといてください。もうこりこりなんです」

「前に会ったの？」

「ええ、遭いました」

以上回想・・・・・・・・

「温かい・・・」

湯につかりながら柚鷺は呟いた。

現在風呂に入って、濡れたため抜けた体温を暖めている。

髪を結んでいたリボンは解いている為、漆黒の髪とその中に混じる碧の髪色が水面に散らばるようにして浮いている。

触れたら切れてしまいそうなほど、細く、繊細に、綿密に、艶やかに、美しく、髪は揺らんでいた。

この風呂には、入浴剤が入っているらしく、真っ白な風呂だった。その分肌に潤いが行くのか、ツルツルになってしまっている。少し気持ち悪い気分だが、まあ悪くは無かった。

「・・・・・・・・」

左掌を柚鷺は、眺めていた。

数多くの刺し傷の後や、切り傷の後が、死んでも消えないものとし

て残っている。

ずたずたに、ざくざくに、ばらばらに、切り刻まれ、刺され、跡形も無く手の表面は、壊滅していた。

皮膚と言つ皮膚らしくは見えるものの、人とは全く違う。

傷を縫つた縫い目が、切り裂かれた痕が、禍々しく残っている。

手相などを見ようと思つのなら、見れるのか訊いて見たいものだった。

しかし、何をされればこんな風に成るのかさっぱりわからないものだろう。人から見ても、何があつたのかさっぱり分かるはずもない。

柚鷺が過去に拷問され、尋問され、虐待され、誘拐拷問事件に遭つた。とでも言わなければ、絶対に分かるはずもないはずだ。

それほど、傷の後は酷く、惨く、残酷で、卑劣だった。

無様でも無残でもある。

死ぬまで絶対的に消えない掌の傷は、柚鷺にとって苦痛だろう。

でもいいこともある。

皮膚が進化していた。

医学的にはなんていうのか分からないが、短期間での外界からの外傷や、病気や毒などでの内臓への損傷を多く受けることで、それにあわせて心身代謝などで、体の損傷を早く直そうという働きや、外

傷を少なくする為、肉体の強靱化、が発達する。

つまり、人間の持つ回復力や皮膚の強靱度が高く、普通の人間よりも回復力が高くなっているというわけなのだ。

柚鷺の体は、強靱で回復力が高いということになっている。

特に成長期へ入っていた柚鷺の体は合わせる様に進化したのだ。

幼い頃での体の進化。

特に左手が、進化しており。ナイフは刺さらず、トラックに踏み潰されても、骨は一切折れることは無い。

銃器でも撃たない限り、その手を破壊することは無理に近い。

体の筋肉も進化しており、少しばかりか強靱に成っている為、普通より力が強い。

もともと、今の義父が鍛えてくれているため、体つきはいい。

だが、筋肉がついていない。

細く、少し筋肉の膨らみがある程度だ。

そして、太ってもいない。

「うーん」

前髪がだらりと垂れ、今、鏡を見れば別人だろうと思えるほど、別人の顔をしていた。

紫色で少し濁った瞳が見るものは、自分の左掌。

「如何しようも無いよなあ……如何って程でもないし……」
一生直らない、消えない傷。

どうしようもなく、どうにも出来ない。

『^{イニシャル}呪の傷』。『^{デッド}死の痕』。『^{キル}屍の残』。

誘拐に巻き込まれて、拷問を受けたとき、最初に受けた傷だ。

痛さで喚いて泣き叫んで、目の前で名前をつけられた三本線。

鋸とチェンソーとドライバーで其々刻まれた。

「誰も、気が付いてもらえる筈も無いんだけどさ……いや、
気が付いてもらつと俺が迷惑つて所か」

傷。古傷。古い傷。昔に負つた傷。

痛くて仕方が無かつた。泣き叫ぶことも出来ず、絶叫することもままならず、小さい柚鷺を虐待した。

悲鳴の毎日。腹をすかした毎日。痛い毎日。苦しい毎日。

虐待された毎日。

「逃げることも、逃げる勇気も、逃げる心さえも、失つた。あの頃の僕は……希望なんて二文字を知らなかったしなあ」

唯一四年前より残っている記憶といえば

現在二〇一一年より、四年前の二〇〇七年。柚鷺は十一歳。

孤児から解放されてから一年後。

友達も出来て、楽しく小学校で暮らしている中。

夏休みがもうすぐ終わろうとしている時期。

八月三十日。誘拐された。

それから……一ヶ月……ほどだったか。

虐待に虐待を重ね、暴行と言う暴行で嬲られ、拷問と言う拷問に地獄した。

誘拐犯は笑っていた。柚鷺が痛めつけられて叫ぶところを、それが楽しくて解消していたのだ。

殺傷症候群。D / L / L / R シンドローム。

誘拐犯の持つ持病と言うか、症状と言うか……病気といえよう。

兎に角、誰でもいいから殺したくなる症候群。

だが、柚鷺は殺されることはなかった。じっくり試されるように、じっくり甚振って殺すように、傷をつけるのを楽しんで精神を解消していたのだ。

勿論、すぐに死んでは困るので、餌は与えてくれた。

腐ったパン屑や肉や、泥水を掬った物を飲ませられた。

それが一ヶ月間だ。

少量の腐った飯しか食えなかった、汚水が入り混じった濁水を飲んで生きた一ヶ月間。

呼吸と拷問と餌だけを与えられた毎日。

それだけの虐待を受けても、柚鷺は死ななかった。

今では、再現が不可能なほど、あ那时的精神は、すでに無かったといえる。

毎日痛い苦痛は、何時の間にか感じなくなり、触られているという感覚を味わうだけだった。

声を上げるほどの力も無く、声にするという行動も出来なくなった。

聴覚は痺れ、味覚は不味さで溢れ、嗅覚は血の匂いを嗅ぎ取り、神経は大部分が機能を停止し、脳の機能

の約八十%近くは機能していなかっただろう。

目の前で自分の体が刻まれることは、当たり前で一つの風景と化し

ていた。

ただ、記憶にはそういう風にシニールに残っている。

両手両足の爪は全部剥がれ、皮膚には傷が出来て血が流れ、希望を見ることは絶対になかった。

光なんて無かった。

ただ、独房の天井にぶら下がる、電球の光があっただけだった。

記憶を探って何かを思い出そうとも、何があっただのか分からなかった。

ただ、光景だけが思い出されている。

今となつては、何もかもが頭の中の引き出しから引つ張り出せば分かるが、あの時この世界に、見渡せばあるものが、柚鷺には思い出せなかったのだ。

当たり前でも、当たり前じゃなくても。

記憶は何も覚えてはいなかった。

ただ、光景だけが、景色だけが、時間の流れと言う空間の中で見た景色だけが、鮮明に、静謐に思い出される。

空と言うものはなんだったのか？雲と言うものはなんだったのか？刃物ってなんだっけ？凶器ってなんだっけ？匂ってなんだっけ？臭いってなんだっけ？

血ってなんだっけ？恐怖ってなんだっけ？表情ってなんだっけ？痛みってなんだっけ？傷ってなんだっけ？

考えるってなんだっけ？生きるってなんだっけ？字ってなんだっけ？人ってなんだっけ？

光ってなんだっけ？闇ってなんだっけ？心ってなんだっけ？色ってなんだっけ？

感情ってなんだっけ？悲しむってなんだっけ？喜びってなんだっけ？楽しいってなんだっけ？怒るってなんだっけ？

言葉ってなんだっけ？読むってなんだっけ？歌うってなんだっけ？言うってなんだっけ？

泣くってなんだっけ？笑うってなんだっけ？苦しむってなんだっけ？嬉しいってなんだっけ？

親ってなんだっけ？名前ってなんだっけ？大人ってなんだっけ？世界ってなんだっけ？意味ってなんだっけ？許すってなんだっけ？

憎むってなんだっけ？

狂うってなんだっけ？狂気とはなんだっけ？性格ってなんだっけ？友達ってなんだっけ？親友ってなんだっけ？恋人ってなんだっけ？愛ってなんだっけ？恋ってなんだっけ？

僕ってなんだっけ？いいや、なんだっけってなんだっけ？

硬い地面。血の腐敗した匂い。肉が腐り、毒が沸く。

痛みは無い。感覚もない。感情もない。悲しくも泣ければ恐くもない。

何もない。

毎日、虐待する誘拐犯の顔は風景でしかなくて、自分の体も風景でしかなくて、痛みも風景でしかなくて、時間が過ぎるたびに

『ああ、なんだ。生きているのか』と思っていた。

死なない程度に傷を付けられ。死なない程度に虐待する。

最初は恐くて泣いていた。今となつては風景。

そう思い始めていたそんなある日。

柚鷺は気が付いたとき、また拷問の日々が来るのだと思っていた。

腐敗した飯を食い、汚水の混じった濁水を飲むのかと思っていた。

『なんだ。死んだのか。呆気ないものだ』と思った。いや、そんな風に考えることさえ思えなかったのだから柚鷺は単純に風景と言つ目に見える物に任せていた。

目を開くと天井があつた。

それも、病院の。

体中に包帯やガーゼが張られ、手術が施され、点滴が異たる所にあつた。

体中に感触は無い。感覚もない。

だが、病院ということ自体は頭が空っぽな柚鷺には分からなかった。

「起きたかな？」

そう言われて、振り返るとそこには医者がいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

言葉に出そうとして、出なかった。

本来なら言える言葉を、柚鷺は失ったのだ。

発言するとき、出すはずの声も、口の動きも、舌の動きも。全て失っていたのだ。

動くのは体だけ。誣いて言えば、眼球と首だけ。

あ　と言う言葉さえも柚鷺には残ってはいなかった。

「何か言いたそうだけど・・・・・・・・言いたいことがあるなら、言ってみなさい」

言いたくてもいえなかった。

精神を根こそぎざっくりと？ぎ取られ、殻になった抜け殻のような状態なのだ。

その負担が、全身に及び、脳の機能が殆ど動いていなかったのだ。

あの生活の中、考えるだけで過ごした日々が、一番の影響だった。

感じなくてもいい。声を出さなくてもいい。考えるだけで過ごせばいい。

そう思ってきたから・・・・・・・・喋ると言うことを忘れた。

生まれたときから、喋ると言うことも、叫ぶと言うことも知っていないはずなのに、出来るはずなのに、それすら出来なくなっていた。

口を動かすことも出来ないほど、肉体は疲労しているのだ。

腕を動かす筋肉さえ、腕を支えることさえ出来ないほど、衰弱していると言うわけだった。

そしてなにより、風景だけしか記憶には残っていなかった。

解放されてから、二日。

本来なら、誕生日だったこの日は、脳の機能が徐々に回復の兆しをみせた頃だった。

さらに、二週間後。

全部の機能を取り戻した脳は、やっとの事で体の回復を始めた。

そこから一ヶ月間。

体の大部分が回復し、リハビリを始めた頃だった。

歩き方も忘れた感覚をまずは四つん這いから始め、徐々に手摺りを使って立ち、指の些細な動きを、まずは鉛筆を持つことから始めた。

そして、失った機能である言葉も徐々に覚えて言った。

失った物を全て戻す為に……

だが、まだ意味のあるような言葉は覚える間もないままに、久し振りに、養母と養父に会った。

「元氣？」

養母にそう訊かれた。

「・・・・・・誰？」

言葉を覚えた幼稚園児のような少年は無論そう答えた。

「お母さん・・・・・・よ」

母は涙を流してそう言った。

「お母さん・・・・・・？つて・・・・・・何？」

言葉の意味を知らない柚鷺は、虚しい目で母を見ることしか出来なかった。

無論養父にもそう答えた。

友達にもそう答えた。

親戚にもそう答えた。

みんな、涙を流していたが、その意味も分からない柚鷺は恍けた顔をするだけだった。

退院したのは、二カ月後だった。

「改めて考えると酷えな．．．俺って．．．人間って言う状態じゃなくて、植物状態だったんじゃないのか？」

あの頃の自分は一体全体何を考えていやがったのか。

今となつては、思い出すことも出来まい。

結局、柚鷺を虐待していた犯人は死刑で死亡。

このことは、日本中に報道されることはなく、一部のものだけがこのことを知っているしかなかった。

流石に、過激すぎる事件だっただろう。

「仕方ないな」

そろそろ体も温まってきた頃だし、湯銭から出ようと思ったその瞬間．．．

がちや　って音が鳴って、脱衣所から誰かが入ってきた。

入り口が見えるようにして湯に浸かっているの、湯気で殆ど脱衣所のほうは見えないが、入ってくる人物は見えていた。

「．．．．．え？」

「．．．．．」

杏里さんはどうも、悪戯好きのようだ。

言われたことは破るほうのようで、信用できそうではない人のよう
うだ。

柚鷺は入る前に、誰にも入らせないでいっておいたはずなのだが、
まんまと破ってしまう人のようだ。

怒る気もなく、柚鷺は随分と呆れた気分になった。

「え……えつとお……柚鷺君が……なんでいるのか
な？」

「……未来さん……若しかして、状況把握能力が足り
ないんじゃないの？」

こんな状況、もう散々だ……馬鹿馬鹿しい。

「お母さんが、入って大丈夫だって言ったのに……」

でも、意外にも未来は冷静なのか鈍感なのか分からないが、状況を
掴もうと必死らしい。

事実、普通であれば、叫ぶところを叫ばないのだから……

「僕は元々入るとそのお母さんに言ったんだけどなあ」

「やっぱりそうか」

「やっぱりって？」

「時々ああやって人に意地悪とか悪戯するのが好きなんだ。お母さ
んって……」

「ふうん・・・・・・・・」

柚鷺の予想は、バッチリの中しているようで、この先が思いやられるのは確実だった。

・ ・ ・

いまさらなんだが・・・・・・・・

初音未来　今年で一六歳だが現在は十五歳。

国民的アイドルで、『歌姫』と呼ばれるほど歌声が美しく軽やか。

顔良し、歌良し、性格良し。　悩みなし。

身長：百五十八cm

体重：四十二kg

スリーサイズ：72　53　76

アイドルポップスやダンス系ポップスが得意。

緑色の艶やかなツインテール。血液型はA型。誕生日は八月三十日。九歳まで北海道に住んでいた。

甘いもの肌いすぎだが、納豆のようなものが大嫌い。例に挙げると、里芋や納豆やオクラ。

恐いものが苦手で、虫が触れない性格。葱が好き。生で食うときがある。

以上柚鷺が先ほど知った初音未来のプロフィール。

・ ・ ・

火照った体を冷まそうと、風呂から未来と入れ替わるようにして柚鷺は自分の部屋に戻っていた。

リボンを解いていた髪は、現在ドライヤーによって乾かされている。そのため、中にゆらゆら揺れる陽炎の様に、靡いていた。

現在八時五十分。

あと、十分で就寝するわけだが、なぜか美希が来て、居心地よさそうに柚鷺のベッドで寝ていた。

「僕は一体なんなんだよ」

それよりも、今日は何て日だ。

居候している身ではあるけれど、ここまで勝手に人の部屋に入ってベットやらなにやら占領させられているとは、一体如何いう……

如何いう……扱いと言うか、自由と言うか……めっちや説明付けにくい。

まあ、歓迎されていることは分かるけれど、何の目的で部屋にやってくるのか分からない。

自分自身の部屋があるのに……

たぶん、柚鷺が見るからに、新人の住む部屋と言うのが珍しいという物だろう。

リフォームした新築を鑑賞するみたいな感じだ。

と、柚鷺は把握している。

「はあ……」

ベッドには美希が眠っている。人形の兎っぽい物を抱いて寝ている。因みに、誰かの為にスペースが空いているのは何故なのかは、柚鷺には理解できなかった。

小さい子と一緒に寝るわけにも行かないので、美希をちゃんと寝かせ、柚鷺は電気を消してベッドの横で寝ることにした。

ああ、眠いな。

2×2Ⅱ 4話（後書き）

なんだか、話の進み具合が変のような気が……まあいいか。

ふう、やっと次は入学式に向かえるぜ……

ところで、ボカロキャラの名前を勝手に漢字にしてみました
が、誰が誰だかわからなければ感想欄にでもかいてください。

2・5×2〓5話(前書き)

よっしゃ、テスト帰ってきたけど赤点無かったぜ！
いやっふおう！

そんなわけで、テンション高いまま更新です。

2・5×2〃5話

四月七日

入学式。

現在、午前七時前。

つまり、六時五十五分。

「んん．．．．．」

頬にやけに固い感触。そしてやけに肌寒い体温感。

窓からは薄暗い日光が射し、閉じていたまぶたの中に浸透してくる。

瞼を開く。ぼやけて部屋の景色が映る。

「．．．．．ん？．．．ああ」

そういえば、ベッドじゃなくて地べたで寝ていたんだっけ？と柚鷺は思い出した。

天井の色や家具の置き位置、本棚の大きさ．．．．．見慣れない風景がそこにはあった。

これもまた、そうか居候しているだっけ？と思い出す。

何故地べたに寝ていたのかと思えば、誰かにベッドを占領されていたからであり、仕方なく地べたで寝ていただった。と思い出す。

起き上がり、とりあえず背伸びをして、体の筋肉を伸ばした。
みしみしと、体が鳴り、解れるような感覚が体を走る。

立ち上がって、電気を点け、机の上においてあつた時計に目をやる。

六時五七分……過ぎ。

まだ、起きるには早いけれど、柚鷺は部屋を出て覚えていた洗面所への道を歩いていった。

だらりと垂れた髪は、揺ら揺らと揺れて少し重く感じる。
鬱陶しくも感じるが、それはすぐに消えてたはずのぬくもりが戻ってきたような気がした。

まだ春先の肌寒い外気が頬を撫で、冷たく冷えた木の廊下は足に冷気を与えた。

そして気がつく

「雨は降り止んでいるな」

あの鼻を衝くような、水分を含んだ匂いがなくなっていた。
それに、空気が肌を触っても嫌な感触は無い。

縁側を通りかかったとき、庭を見ると水溜りはあつたが、空は晴れ渡り転々と雲が広がっていた。

鮮やかに、広がっていた。

「あら？」

縁側に立ちすくんでいた、柚鷺に声かけられた。

振り向くとそこには、和服で朗らかな微笑を持った、杏里が立っていた。

碧の髪。後ろで束ねられて、櫛で固まっている。団子っぱい。

「早いね」

「おはようです・・・杏里さん」

スタスタと、杏里は柚鷺の隣へ立った。

こうして比べてみると、やはり柚鷺のほうが背が高い。

そして髪の長さも長い。

纏めているとはいえ、かなりの大きさだ。解けば結構な長さになるだろう。

しかし、柚鷺の髪は珍しい物だ。

杏里の髪は碧一色だが、柚鷺の髪は一部が緑色なのだ。

生まれつきこうだったので、人によつては嫌われたり、変な異名を付けられたりする事も多かったが、柚鷺自身は気に入っている。

黒髪の中に、一部潜む緑色は不思議な色を表している。

加えて、彼の瞳の紫色をした少し濁ったような瞳に水面に広がる、波紋のような虹彩が広がっている。

幻想のような、幻惑のような、困惑のような。そんな不思議すぎる

瞳だった。

「あ、そうそう。美希ちゃん知らない？昨日から見当たらなくて」
「俺の部屋で寝てます。ベッド占領されて、昨日は地べたで寝ました」

「はぁ・・・困った子ね」

よほど気に入ったのね　と一人杏里は溜息をついた。

柚鷺は、廊下を再び歩き始めた。洗面所へ顔を洗いに行く為だ。

流石に、使用人はこの時間帯から働き始めているようで、わたわたと急がしそうに走り回っていた。

洗面所にはいり、蛇口を捻り水を手で掬って、顔を洗う。

一瞬の冷たい感触。肌を水が滴った。

タオルを取って顔を拭く。

それから、洗面所の壁に掛かっていたブラシをとった。

ブラシをとって髪を梳く、梳いた後に柚鷺は髪をゴムで括った。
何時も巻いているはずのリボンは、部屋においてある。

それまでは、ポニーテールでいいだろう。

歯ブラシに歯磨き粉を着けて、わしわしと磨いた。
口の中に歯磨き粉の味と、泡立って行く感触を嫌にも感じながら、

歯ブラシを動かした。

その後、歯磨きが終わって、杏里に再び会った。

「柚鷺ちゃん。はいこれ」

杏里は、手に持っていたものを差し出した。

「制服。まだ渡してなかったから、渡しておくわ」

「せめて、昨日渡してくればよかったんですけれどね」

柚鷺は制服を受けとりながらそう呟いた。

「結構忙しかったからね。暴れた芽衣子を抑えるのは結構時間がかかるもの・・・」

「そつえば、酔っていたな・・・」

発狂状態で箸を持ったまま突っ込んできた覚えがある。

「部屋に戻るついでに、美希ちゃん。起こしてきてね」

「あ、はい・・・」

制服を小脇に抱えて、柚鷺はその場をあとにした。

そして、自分の部屋までスタスタと歩いていると

「あら？おはよう」

瑠歌にあった。昨日の晩飯以来一切見ていないがこの人いつの間にか透き抜けて来そうな人だ・・・

毒舌とか痛そうだ・・・。

「おはよう・・・ございます」

「いや、別にそんなに畏まらなくていいわ。というより、随分早いじゃない？結構見た目的にずばらだと思ったけど・・・」

「・・・・・・・・」

「私は、何時も六時後半に起きているから、如何ってことは無いのだけれど。まあ、早起きでしょうが寝坊でしょうが、どっちにしたって如何と言うことは無いわ」

「・・・・・・・・」

「芽衣子姉や海斗は、社会人だからそろそろこの時間には起きるわ。でも、梨花や恵美に未来や鈴、蓮、美希はねぼすけ」

多！何だこの家族！ほとんど寝坊野郎じゃねーか！と柚鷺は落胆する。

会話を終えた柚鷺は、瑠歌の横を通り過ぎて自分の部屋へ戻った。

ベッドの上には、未だに心地よさそうにして眠っている美希の姿があった。

だが、心地よさそうにしているところに問答無用で柚鷺は布団を剥ぎ美希を丸ごとベッドの下に転げ落とした。

がつん 結構痛そうな音が響いたと持ったら、美希の頭が直接地面に激突していた。

「いったーい！！」

ベッドから転げ落ちても柚鷺はまだ寝ていられるが、流石に小さい子には痛すぎたか……

頭を抑えながらも、ゆっくりした動作で起き上がる。

熊柄の寝巻き。寝癖が飛び跳ねた桃桜色のロングヘア。矮躯な体。

「起きた？」

剥いだ布団をベッドに放り投げながら柚鷺は言った。

「柚鷺のおにーちゃん！もう少し優しく起こせないいい？？」

流石に怒られた。可愛いく怒られた。

「ごめん……」

「ふーんだ！」

ムスツとした顔で美希はそっぽを向いた。

そんな美希を見て柚鷺は苦笑した。

ご機嫌斜めになった美希だが、柚鷺はしゃがみ構わずして美希の頭を撫でた。

「っわっわ。なにになに？」

「髪がぼさぼさだな。梳いてやるから来い」

柚鷺は美希にそう言って立ち上がった。カーテンを開け、日光を差し込ませる。

そのまま、出口に向かい電気を消して部屋を出た。

柚鷺の後ろ背を追うようにして、美希はトコトコとついてくる。そして何時の間にか、柚鷺の袖を掴んでいた。

少し歩きにくいのだが、もうこれは慣れるしかないだろう。

美希はよほど柚鷺のことが気に入っているのだろうか。

長い廊下をスタスタと歩き、洗面所まで数分掛けて行った。

既に縁側から空を見れば太陽が昇っており、目の前には日向が広がっている。

急に風が吹いて頬を撫でていく。髪が浮かんで靡く。庭にある木々が、葉が、揺らいで音を立てた。

柚鷺にとって嫌いな桜も揺れていた。

「春だね」

感慨のない感覚で卒業をした中学三年生の言葉を美希は言った。

「当たり前だ。桜も咲いているだろうが」

柚鷺は教師みたいな台詞を吐いて嘆息を吐く。

「桜って好き？わたしは好きだよー？」

「僕は嫌いだね。どうも好きになれないんだ」

柚鷺はそれだけ呟いて、美希を引いて洗面所まで歩いていった。

洗面所に着いて……………

「……………」

「未来おねーちゃん。凄い寝癖……」

洗面所には明らかに今起きたらしい顔をした未来がいた。

ツインテールがぼさぼさである。てか、髪を結んだまま寝る馬鹿がいるとは知らなかった。

美希より酷かったりする。

あっちこっち、あちらこちら、どっちもこっちも、飛び跳ねていた。

因みに歯を磨いていたりする。鏡に映る目が、滅茶苦茶しょぼい。

胸元のボタンは外れ、寝巻きは肩からずり下がり、ズボンもやや下がっていた。

だらしない……そして地味にエロかった。

「ううあ。おはよう……」

「うん……おはようだ」

柚鷺は何となく気まずそうな顔で、髪梳きブラシを取った。

「ううん……眠い……」

まだ寝ぼけているのか、柚鷺だと判断できてない風に見えるのは気

のせいかな？

美希の髪を手にとってその分だけ梳いてゆく。髪が長いから結構時間が掛かるが、柚鷺も似たような感じだし、まあ問題は無いだろう。桃色の様な、桜色のような、色をしている美希の髪は、やはりいうかさらさらだった。

これも可愛いの一つなのだろう。

「髪梳くの上手だね」

何時の間にか、顔を水で洗った未来がさっぱりした顔で言ってきた。

「俺も髪が長いしね。梳くのは慣れている」

全部梳き終わった柚鷺は手首にあったゴムで美希の髪を括って縛って終わった。

得意のポニーテールである。

「えへへー」

「明日からは自分で梳けよ。僕の部屋は、お前の部屋じゃない」

柚鷺は未来にブラシを渡す。

「ありがとう」

「じゃ、俺はこれで」

「あ……うん……えっと……」

「？」

何処となく未来はなぜか戸惑うような顔をしていた。

そして、うつむきその場に立ち尽くしてしまう。

なんだかよく分からないが、柚鷺は不思議そうな顔をして未来の顔を覗き込む。

「どうした？未来？」

「え！？ふあああ！！！？！！！？」

驚愕の事実を聞いたときのような驚きをあげて未来は目を見開いた。

その瞬間、自分の目の前に柚鷺の顔があることに気がつく。

さらに昨日の風呂での出来事を思い出して・・・顔が真っ赤になっ
てしまう。

「うつうつうつ・・・」

赤くなってうつむく未来に、ますます不思議になったのか柚鷺は片
手を未来の額に当てた。

「つつ！？」

声にならないほどの恥ずかしさがこみ上げさらに真っ赤になってし
まう。

「熱は無いみたいだけど・・・」

顔を赤くしたので、ひよつとしたら熱なのかと思ったのだろう。

未来が急に俯いた理由も分かるはずもないし……

「お前大丈夫か？」

不審なものを見る目で柚鷺は未来を見た。

未来は

「へ、平気だよ！大丈夫！大丈夫だから！」

「うお！」

急に怒鳴るような声で未来は言って柚鷺の背中を押して洗面所から追い出そうとする。

「？」

もう流石に混乱したのか柚鷺は抵抗も無く疑問を持ったまま洗面所を出た。

その際美希が余分に未来へピースサインを出した。

意味が分かっていた未来はまた真っ赤になった。

・
・
・

美希を美希の部屋に連れて行き、柚鷺はもらった制服を着込みに自

分の部屋に戻った。

身長や体格などは既に義母が詳細を教えているので、多分制服の大きさは大丈夫だと思う。

うん。大丈夫だ。

そう思いながら、制服に着替えた。

流石に、一応名の知れる私立学園であるから男子の制服は、普通の私立高校とはあまり変わらないようだ。

種類はベストだった。

白媛学園の紋章が入ったネクタイとカッターシャツにVネックのガーディガンに無地のズボンと一般的な制服だった。

とりあえず、着々と着てみる。

「うーん……」

装着した事の無い服に対しての違和感があったが、まあこれから着てゆくうちに何とかなるだろう。

なんでも慣れが必要なのだ。慣れが。

首を絞めるネクタイの感触（実のところネクタイの締め方さえ分かっていなかったがそれっぽく見えるように結んでみた）も何となく苦しいような、そんな違和感もあるけれど……

「いつか」

体格にも合っているし、緩い所もきつい所もない。

ほぼ、ぴったりだ。

そしてためしに少し動いてみる。

腕を捻ったりある程度無理な体勢や動きを駆使しても破れる所はなかった。

その後、柚鷺は矢の様に、または川の流れのように、使用人の呼び出しで食堂へ案内され、朝ご飯を喰い用意をして家を出た（未来がこちらを見るたびに赤くなっていたのは内緒）。

家を出て玄関門を通りすぎて、柚鷺は違和感に襲われた。

物凄く久し振りに町を出たような、暢気な違和感だった。

ほんの昨日の事にしか過ぎないというのに、何か何ヶ月もいたような気分だった。

「たぶん作者が何日も地道にしか書かなかった結果だな」

マジです

住宅街には人がちょこちょこいた。

無論、来たばかりなので誰なのかもさっぱりわからないが、同じ学園の者と思える制服を着ている女生徒がいた。

何故、女生徒なのかはもとも女子が多い学園だからだ。

学園に行ったら男子一人だというのはあまりにも不安だ。それにこりごりである。

さて、彼女が未来たちの友達なのかはさておいて、まずはこの住宅街の構図を記憶する必要があると思い、あれやこれやと思考を巡らし覚えてゆく。

初音家の裏口から見える、住宅の数に住宅地の塀の高さ、分かれ道の数、特徴、標識、その他もろもろ……

「頭イタイ……」

朝っぱらからこんなに頭を使ってしまうと、何故だか非常に糖分が欲しくなる気分になる。

それは、頭が栄養を必要とするからだ。

柚鷺は特に彼是訳の解らない思考をし始めるので、糖分がかなり必要になってくる。

そのため、前の田舎では家の棚の中には甘い物が絶対に入っており、それで頭の養分を補っていた。

甘い物でお気に入りだったのだショートケーキである。だが好きでは無い。かといって嫌いでもない。

手持ちにはそんな物は無いので、とりあえずあたりを見渡してみた。

昨日の雨のおかげでだいぶ水溜りが残っているが、昼ごろになれば乾くだろう。ただし、道路の窪みがやけに深かったので、とりあえず気をつけることにした。

「うひょー、いい天気だねえ」

後から遅れて出てきた恵美が、空を見上げてそう言った。

「入学式日和って感じー」

「上機嫌だな」

「だって、高校生活の始まりでしかも青春の始まりだよ！？機嫌がよくないほうがおかしいじゃんか」

凡ゲームのプロローグみたいな台詞を吐かないでほしいものだ。

逆にむかつく。

「残念ながら、僕らの学園は男子が僕を合わせて二人か三人いる程度だろーよ。期待したって恋愛青春は出来ねーぜ」

「ちえ」

意気消沈した恵美は溜息を吐いた。

いや、何で僕にこいつは突っかかってくる？いや、僕に棒を振るなよ。お前がこの学園選んだんじゃないかねえか。と思ったが、ここはあえて黙っておくことにした。

そんなことをしていれば突然風が吹いた。

神に頼まれたかのような、或いは吹かせた様な感じで強風がその場

にいた二人を扇いだ。

髪が揺れた。風圧に引っ張られるようにして大きく靡いて行く。黒髪は日光を浴びて艶やかに光り、その奥に潜む碧の髪が一瞬だけ見え隠れした。

風で引かれる髪に体全体が引っ張られる。それに対抗して足に力が入る。

煽られた髪が目に入らないように、細く瞼を閉じる。

「いい風」

なにかを受け止めたように、恵美は呟き歩みを始めた。

未来が遅れてやってきた。

袖鷺たちがのんびり歩き出す最中、【私立白媛高等学園】の新生である【高梁亜由美^{たかはし あゆみ}】は、街を走っていた。

全力疾走である。

あらかじめ乱暴に整えられた髪が、風を受けて靡き、やや大人への成長をし始めているその顔は焦りを増していた。

息は乱れ、呼吸も上手く出来ない。

ちゃんと着こなせていないまだ新品の制服やローファー、学生鞆は、

急いでる所為で少々乱れていたり、乱暴に動き回ったりする。

なぜ、急いでいるのか？亜由美が急いでいる理由は、寝坊したからだ。

いや、正確に言えば本人は気がついていないが、目覚まし時計が一時間ほど早く進んでいて、見間違えて寝坊したと勘違いをしたのだ。何故一時間以上早く進んでいて、亜由美気がつかないのかはさておいて。

亜由美はかなり混乱した状況と言うか、そんな意味不明な困惑した顔だった。

現在脳内は急ぐ為だけに働いているのか、全力疾走の速さは止まることはなく、かなり不注意だった。

コンクリートで塀が連なった住宅街の中を走り、水溜りを跳躍で越え、バス停までの道筋の一つである角を折れる。

景色が一瞬にして、変わってゆく。

少しでも速く。少しでも速く。足を走らせる。

間に合うはず。いや、間に合わせてみせる。

そう思い、走り続ける。

だが、息が上手に出来ない所為か苦しい。

中学のとき入部していた陸上部ではこんなことはなかった。

フォームを取れていないのだ。

肺が朝の空気によって痛みを奔らせる。心臓に痛みが鳴り続けている。

だけど進み続ける。

そうして行つて、次の角を折れる前にある水溜りを越える為に跳んだ。

「うわっ！」

跳んだは良いが……着地して再び走り出したとき、角から出てきた髪の高い少年とぶつかってしまった。

如月柚鷺は普通に歩いていた。

今日は良い天気だなあ。良い天気だから青い空しか見えないなあ。

みたいな惚けた事を考えて歩いていたのが、悪いのかなんのかさっぱり分からないが。

歩みだして数分。角がある交差した道に差し掛かったとき、少女とぶつかった。

後ろには、未来と恵美がついてきていた。

瑠歌や樂歩や梨花は先に学校へ向かって行っていて、鈴と蓮は中学生なので自分の学校へ。美希も同様。

さて、柚鷺にとってぶつかるといことは、どうやら普通らしい。

昨日も何回かぶつかったが、今日もぶつかるとは思ってもいなかったのだが、ぶつかってしまった。

これは、あれか？神かなにかの悪戯か？と、思ったのだが、自分を考えていれば、不注意だったこともあるだろう。

で。

ぶつかった柚鷺と少女は、お互いの衝撃を中和することなく堂々と受けた。

だが、意外にも柚鷺の体は少し仰け反っただけですんだが、少女の方は派手に倒れて尻餅をついてしまった。

「いたたた」

「おい、大丈夫か？」

尻餅をついた少女に、近寄って柚鷺は言う。

新品で乱れた服装に、乱暴に整えられた髪はゴムで縛られてポニテールになっている。

やや、大人への成長過程に入った顔立ち。黒い墨汁で彩られた様な瞳。

雰囲気的には活発そうな感じの少女だった。

柚鷺には、そう見える。

「あ！えつと・・・その・・・ええつと・・・」

とつさに我に帰った彼女は胸の前であたふたと手を振り、焦った表情で口をパクパクしていたが、どうも混乱しているようで、最初に出す言葉が中々見つからないようだった。

それが何だかじれったくて、寧ろ段々気まづくなって来たので

「下向いて歩くなよな」

めんどくさそうに、柚鷺はそっぴいながらさっきの反動で飛んで行ってしまい、水たまりに落ちた鞆を拾う。

ぼたぼたと雫が落ち、濡れていないアスファルトに模様を作る。

それを肩に担ぎ、ポケットに手を入れたまま

「ほら、ちゃんと立て」

そう言って、片手を差し出す。

少女は、それを両手で受け取り、柚鷺に引っ張られて立ち上がる。

「・・・・・・・・」

無言のまま柚鷺は少女の頭に手を置き　ぼんぼん　と叩く。

そして慰めるようにして薄く濁ったその瞳で見た。

呆れ半分の表情だったが……………

叩かれた少女はそんな柚鷺の表情とは裏腹に硬直した。

石像の如く。像の如く。彫刻木像の如く。

固まった。

そんなとき

「うわ！柚鷺君！もうバス来ちゃうよ！早く行こう！」

ふとして、携帯を見て時間を確認した未来が声をあげ、早くも走る体勢に入っていた。

恵美は既に走り出していてバス停まで疾走していた。

結構早い。若しかしたら運動系の部活に入っていたのかもしれない。

「と、今行く！」

そう言い少女の頭の上から手をどけ代わりに片手を掴み走り出した。柚鷺でも分かるように、少女も一応同じ学校の生徒だ。置いてけぼりにするわけではない。

が、問題があった。

一般的に走るスピードであれば、少女の運動神経であれば付いていけるだろう。

柚鷺には知られていないが、彼女は陸上部に入っていた生徒だ。体力的にも運動的にも問題は無い。

そう問題は無いはずだ。

だが間違いだった。

柚鷺の走る速度は普通の人間よりも数倍に速い。田舎で鍛えられたその肉体は、体力的にも普通より何倍もあるのだ。

勿論微調整は出来る。

しかし問題はそこでは無い。

柚鷺の人間的能力が著しく向上していることが問題ではない。

問題は、先ほどまで少女が体力を根こそぎ使って疾走していたのが問題だった。

つまり体力がない。

・
・
・

亜由美の体力の事を全く知らない柚鷺が手をつないで疾走して数分。

何とか着いたバス停には既にバスが到着していた。

慌てて鞆からバスの定期券を二人は取り出し乗り込んだ。間一髪ギリギリセーフである。

亜由美はいろいろな意味でギリギリセーフである。心臓がとんでもないほど痛い。そして何よりも喉がイガイガする。

肺が すかすか に穴が開いたように痛い。簡単に言えば空気を通すような気管が痛い。

完全に運動のしすぎた後遺症だった。吐く息も荒い。体が重く感じる。

「ふう・・・・・・・・・・」

「はあ・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・」

柚鷺は平然とした顔で、亜由美は思いつきり体力を使いきった顔でバスの空席へ座り込んだ。

「何とか間に合ったあ・・・・・・・・・・」

未来が安堵の声を漏らすと、体に一気に脱力感が出る。それに合わせて体力の消費が体に出た。

柚鷺は少し息苦しい程度だ。学園に着くまでには回復するだろう。

「未来ー。こんなんでもバテちゃったら水泳部に入れないよー？」

体力の大半を使い切って、思いつきり付かれきった顔を現す未来に

恵美がそう言う。

「えー？酷いなあ。もう」

「クスクス」

「えー？なにわらってるの？」

「いやー、本当に未来は面白いなあって」

「・・・・・・・・・・」

「黙ってもらっても困るんだけどさ」

未来の恵美の会話が耳に入ってくる。

「水泳部に入部したら、体力増やすもん！」

「可愛くぶつても無駄だよ。続ける気力さえも妖しいのに・・・・・・・・」

「

「いーだ！絶対後で仕返ししてやるもーんだ！」

何だか、未来が非常に子供っぽく見える。周りからの眼差しが優しい。

それを見ていると、未来の精神年齢が非常に低い子供に見える。

まあ、あればアイドルと言う属性なのかもしれないと、柚鷺は素直に思った。

「あの、えっと・・・・・・・・」

隣に座っていた少女が柚鷺に話しかけた。

再び認識する。

乱れた新品の制服。髪ゴムで結ばれたポニーテールの髪型。墨汁で塗りつぶされた様な真っ黒な瞳には、輝かしい光が入っている。

何処か活発そうな、大人への成長過程に入った顔。しかし、今は体力がないので脱力感全快。

柚鷺より一頭身少ない身長は、高校生と言っても過言では無い。

「あ、ありがとうございました」

少女はそう小さく呟いて、礼を言ってくれた。少しだが、顔が紅潮している。

「うん」

柚鷺はそう短く答え、

「バスに急いでいたのはお互い様だよ。お礼をいわれる意味がねーよ」

と言葉を紡いだ。

「えっと……名前教えてもらってもいいですか？同じ学園ですし……」

「んー？俺か？俺の名前か？」

「他に誰がいるんですか……？」

「そっか。僕しか居ないか」

「……………」

柚鷺の答えに少女の顔が一気に呆れ顔に変わる。

「僕は『柚鷺』。『如月 柚鷺』だ」

如月柚鷺

それを聞いた、少女は自分の内心で大きく心臓が飛び上がるのを感じた。

しかし、それは内心で表には出なかった。精々驚きで体が震えたことと冷や汗を掻いた程度だ。

いいや、この程度ですんだ。だ。

彼の事情を知っている。彼が過去に何があつたのか知っている。

世界中に、日本中に、知れ渡ってはいないけれど、この街の住民はせいぜいそれを知っている。

本当に、可哀想な少年だと知っている。

亜由美は、息を呑む。

隣にいるのは未来と同じく昔の幼馴染。憧れだ と母に自慢していた少年だ。

しかし、一度も母親に見せることもなく、引越してしまった。

憧れも、彼と話した楽しい思い出も、あの事件の後では、意味もなく、存在意義すらなく、粉々に、崩壊した。

だが、今戻った。憧れが目の前に戻ってきた。

あの思い出が、今戻ってきて少し嬉しくなってくる。

過去の記憶はなくとも、今隣に存在することが凄く嬉しい。

「お前の名前は？」

柚鷺の質問に思いを内心に押さえ込みながえら、亜由美を答える。

「『高梁亜由美』です」

ちゃんと答える。

「ふうん。いい名前だね。亜由美ちゃんってことか」

「あ、はい」

「はい じゃなくて うん でいいぜ？どうせ同じ学校の生徒で同じ学年だ。敬語はねーよ」

「うん」

それでも、少し嬉しそうに、彼女は笑って返事を返した。

ここから、また始める。思いでも、憧れも、今から折り返す。

物語を始めるには丁度いい。

2・5×2〃5話（後書き）

ご意見、ご感想バリバリ待ってます。

誤字の指摘や助言をしてくれると嬉しいです。

さてと、次は入学式か・・・しかし、最近眠たいな・・・

3 × 2 〓 6 話（前書き）

明後日から学園祭だよ畜生！

パソ部なんかに入るんじゃないかった！

ゲーム作るとかめんどくさいよ！

てなわけで、少し遅れた更新です。

3
× 2 〓 6 話

凡会話

美希「柚鷺おにーちゃん」

柚鷺「んー？」

美希「鈴お姉ちゃんが行ってたけどヤンデレってなに？」

柚鷺「ワカメか何かじゃない？」

恵美「いや、意味分かんないから・・・」

『私立白媛高等学園』は一応共学である。

前は、女子を専門的に進学させる為の女子高だったが、社会に出たとき男性との接点を考えるという方針を立てたところ、共学のほうが良いと言う案が持ち上がった。

それにより、四年前から共学と言う方針に変わった。

しかし、元が付くとはいえやはり女子高だ。男子はあまり集まりにくい状態だった。

それでも、共学の方針に向けたところ数人程度は入学した。

男子と交流を交わすという点となるとやはり最初の方はやりにくかったのだが、後期になってくると徐々に慣れ始め、それなりに交流を深めることが出来る女生徒が増えた。

しかし、たかが数人しか居ない。1割の男子対9割の女子では、全部の女子とではつりあわない。

そこで、出来るだけ多くの女生徒を男子生徒と交流をさせるため、「大概の力仕事などを男子に手伝わせたらどうだ？」という案が出たりして、修学旅行先では男子に荷物持ちと言う条件を与えることで、交流を深めたりした。

そんな、共学の歴史が浅い『私立白媛高等学園』共学を始めて五年の今年には、おおよそ五百人近い生徒が入学することになっている。

男子は一割未満。女子は十割未満。と言うあたりの、いろんな意味でかなりギリギリだ。

適当な過程として五百人のうち、数人……大体五人程度が男子だ。そのほか、四百九十五人が女子である。

ハーレムといえば、その通りなのかもしれない。しかし、ハーレムと言うものの単に女子が多いだけで、男子を好いてくれるというわけでもなく、性格も千差万別な為、人情の上下差が激しいことは、予め覚悟しておくべきだろう。

現在、柚鷺たちは電車に乗っていた。

学校までの道のりは、結構シンプルだが遠い。

家から徒歩で数分でバス停へ、バスで数分で駅に着きそこから都会離れる方面への特急の電車に乗り込み、三十分程度の旅をする。

そして都会離れた駅で下り、再び歩いて海岸線にそったガードレールが続く道を数分ほど散歩して、学校の正面橋に辿り着く。

見たいな感じ。

「流石に遠すぎるってことはないけど……やっぱり、毎朝歩くのは大変だなあ」

「朝の運動は、体にいいらしいぜ？俺のいた村じゃ毎朝年老い達がランニングしてた」

「村？」

「僕のいた里の事だよ」

「いや、それは分かるって……村ってことは田舎に住んでたの？」
「……当たり前だ」

柚鷺の住んでいた村は、事実上だが存在しないことになっているらしい。

まともな道がなく、塗装された道路はない。村へ行くにはトンネルを越えなければならないし、何しろまともな道がないので道が見つけにくい。

三千人程度とまあそれなりに人口の多い村で、比較的男性は4割（そのうち1割も満たないのは十代の男子だったりする）、女性はそのほか全部に当て嵌まる、女性が比較的多い村だったりする。

「窮屈じゃない？田舎って言ったらあれでしょ？コンビニとかスーパーとか、一見有るか無いかみたいな場所なんですよ？」

「まあね。田舎では一番大きく見えて、こっちじゃ滅茶苦茶小さいスーパーが一軒あって、駄菓子屋が一軒あってくらい。学校の教室

が4個分くらいのスーパーなんだけど……」

「凄いちっちゃいね」

「駄菓子屋は……6畳くらいの大きさ」

「ちっちゃ!」

「そんな感じ。僕の住んでいた家は、普通だけど」

適当に、そんな雑談を交わしていると、柚鷺の携帯にメール受信が入った。

バイブが揺れ不快な振動がポケットの中で震える。

柚鷺はストラップが着いた携帯を引っ張り出し、画面をスライドしてメール内容を見た。

送信者は、『内海 修司』だった。

「おおおおおううう……」

『内海 修司』。

紫木中学校で3年連続学級委員、および生徒会長を務めた超弩級の変人且つ変態である。

所謂、オタク（ギャルゲなどの）で、超変態で超天才。とまで言われる奴だった。

結構テンションが高く、何気に鬱陶しくも、楽しい奴であったりする。

主な学校祭イベントを、己の思考で埋め尽くしたり出来たすげえ奴でもある。

学力は柚鷺よりかは低いが、それでも高いほうだ。

クラスの中では、半々に人気が丁度よく分かれており、柚鷺だけがどちらでもない中途半端なくらいにいた少年だった。

紹介はともあれメール内容はあ・・・

『ふっふっふ。伝説のハーレム男如月ギャラクシーよ。今日は転入先の学校の入学式であろう？当然お前の動きなど把握済みだ。そこでだ、我々の学校の情報をこまめに交換し合おうではないか。君にも私にも利益はあるだろう？特に女子の情報を私によこしてくれたまえ。私は君に、こちらの女子の情報を渡そう。どうだ？いい情報交換ではないか？』

柚鷺は、その訳の分からないメールを最後までみると、同時に

「はあ」

意気消沈した。

内海が通う学校は、柚鷺も入学する予定だった紫木高校だったりする。

あいつの言う言葉の大体が理解できない柚鷺は、あしらう事で凌いで来たとも言えるだろう。

文化祭でクラスの出し物がまさかメイド喫茶とか言う物になったと

きは、乱闘寸前にまで及んだことを柚鷺は未だに生々しく覚えて
いる。

携帯画面の向こう側で、内海の表情とメガネが キラツキラ 輝い
ているシルエットが浮かんできた。

「誰からだったんですか？」

後ろから着いてくる高梁亜由美の声に、柚鷺はそのまま歩きつつ

「んー、中途半端な奴から」

曖昧な返事を出した。

「とりあえず、気にしないほうがいいですか？」

「うん・・・」

その後歩き続けること数分。徐々に白媛学園の生徒が増えてきた。

ただし、殆どが女子なので柚鷺に希望の二文字は中々見えてこない
ものだ。

このままじゃ、また一人で女子の中に入らないといけないというこ
とになるのかもしれない。

勘弁だった。

そして徐々に、徐々に、段々と橋が見え、その先にある学園が見え
てきた。

「柚鷺君は、初めてだよね？」

「ん。そうだね。実物を見るのは初めてだ」

大分想定はしているが、実際のところ実物の大きさと云うものがまだ目に見えていない。

近くで見なければ全貌もつかめないような、縦にも横にも面積のある超高層建設ビルの目の前に立っていると例えが出来るだろう。

生徒の人数は先ほどより何十倍も増えている。そして、一向に男子姿は柚鷺だけとなっている。

何ということだ！と内心で絶叫する柚鷺。

絶叫と言うよりも、絶望と言うのが近いのだけれど。

そうして柚鷺がこのこと歩いているうちに橋に着いた。

その光景に、言葉を失っても誰も文句は言っまい。

「うわあ。なにこれ・・・」

巨大な建物がそこには建っていた。

橋の幅が二十mほどで、その向こうにある建物は、島を丸ごと使った超巨大な学園だった。

『私立白媛高等学園』。そう呼ばれる学校は、誰もが憧れるような、もしくは憧れれない様な、もしくは憧れ様にも憧れにくい様な、そんな感じを保っている学園に匹敵する。

柚鷺の地元でも、一時期有名な話題になった。

ただ、有名とまでしか知らなかったが、今、目の前の光景を見て有名な理由がはつきりと分かった。

城をそのまま建てたような六階建ての城のような巨大な学園だ。

学園の屋上に立てられた、校章が入った布が風に煽られて揺ら揺らとなびいている。

「何時見てもでっかい時計だよなー。柚鷺なんって言っただけあの時計？」

「振り子で動く背の高い時計だから、あれは構造の部品を単に大きくして作った『グランドファーザークロック』だと思うぜ？」

「なにそれ？」

「つまり、でかい振り子時計」

グランドオファーザークロックは鉄で作られていた。

丁度、ハリーポッターに出てくるホグワーツの時計を真似した様なものだ。

校舎は大理石で作られている。様々な、模様が入った大理石は校舎の壁を彩っている。

ここからの視点では真っ直ぐ見ると、校門の奥に巨大な噴水があったり、殺伐と切られた木々たちがあった。

目に見える生徒人数は、一瞬で見る限り百人には及んでいる。

ただし、男子の姿は一向に見えない。

「嫌がらせか、不運か・・・」
「？」

男子の姿が乏しいことに、柚鷺は呟きを零すと、眺めていた橋を渡りだした。

海から香る微かな潮の匂いが鼻腔の奥を衝いてくる。

波が海岸の岩肌に身をぶつけて音を響かせている。静寂に静謐に。

叩きつけられている。

驚くことに、橋を構成している材料は木材だった。よくもまあ、幅が二十mもある端を支えている物だと感心した。

この木材の中にワイヤーが何か入っているのだろう。

流石、近くへ行けば行くほど大きいといえば大きかった。

何もかもが大きかったとも言えるだろう。

昇降口、庭、教室の窓。巨大で、他の学校とは天と地ほどの差。

所々から天に向かって生える様にして建っている塔が四つ見える。

あれが何かはさっぱり分からないが。

見る限り馬鹿にならないほどの巨額を掛けたであろうこの学園は、本当に計り知れない。

一体全体、何部屋存在するか分かった物ではない。

教室の数も、どれほどあるのかもわからない。

「まあ、大きさをなんてほぼ如何でもいいや」

大きさに対して、感心する感情に一切厭きた柚鷺は考えることを放棄した。

さて、クラスわけである。

一学年生徒は、大きく分けて十五まで分かれている。

AからO・・・・・・・・どんなクラス分け順だよ。A～Oって、多すぎ。

柚鷺は一クラスが大体四十二人程度だと、どこかの教師から聞いた（本当かどうかは分からない）。

「恵美」

「何？」

恵美に話しかけたのは殆ど好奇心だった。

「四十二×十五は幾つだ？五秒以内に答えよ」

「え」と・・・・・・・・・・」

「五」

「ん・・・・・・・・・・」

「四」

「・・・・・・・・・・」

「参」

「・・・・・・・・・・」

「貳」

「・・・・・・・・・・」

「壹」

「・・」

「時間切れ。お前って意外に計算能力ねーな」

「いや五秒じゃ無理でしょ！ただ計算能力がないってことに付いては文句は無い。しかし！」

恵美はぐるんとその場で片足で一回転して柚鷺の背骨を思いっきり蹴打した。

しかし、恵美の攻撃はあっさり跳躍で交わされる。最初からあるつきり分かっていたかのように跳躍で避けた。

恵美の伸長の軽々と越える跳躍だった。

「正解は、六百三十でした」

着地しつつ柚鷺は余裕で答える。

「ちっ・・・・・・・・」

蹴りを当てられなかったことに恵美は舌打ちをした。

ともあれ、四十二×十五〃六百三十人も人数が今年入学する事が分かった（もう一度言うが本当かどうか定かではない）。

そのうちに人数の何人が男子かは、柚鷺が一番心配するポイントであつたりなかったり．．．．．。

さつきから、柚鷺が男子だけと言うだけで物凄い視線が集まっているのを感じているのが、一番の不安になる原因だったりする。

・ ・ ・

実のところ、柚鷺の入るクラスに恵美と未来は一緒だったりするのは、果たして偶然なのか、それとも教師たちによって仕込まれていたことなのか分かったものでは無いけれど、少なくともちよつとした不安が消えていた。

教室は思いのほか普通だ。

普通の公立高校のように席は並び、机はやや横幅に大きく、いすはクッションが着いていた。

席は出席番号順で決まっていらないようで、最初からチョイスされていた。

自分の私物は教室の後ろの個人ロッカーで管理することになっているらしい。四十二人分の長大なロッカーが並んでいる。

天井からは、蛍光灯が白く輝き教室を照らしていた。

窓も大きい物だ。会社のオフィスビルの社長室にある下界を除ける様な、巨大な窓ガラスが張ってある。

どうも、この窓ガラスは防弾ガラスに近いらしく、鉄パイプで撲つても、傷一つつかないほどの強度を持っているらしい。と柚鷺は、クラスメイトから聞いた。

精々、重火器・・・RPG7とかカールクススタフM2榴弾とか（どうも戦争ゲームが好きらしい）でやれば罅程度ははえるらしい。

めっちゃ強度たけえじゃん。その分留めてある金具が壊れたら危険だろ。と柚鷺は思ったりした。

さてこのクラスには他に、男子の姿は一人しか見当たらなかったりする。

一応、これも幸いかもしれない。

見ている限りではだ。

「嫌な存在じゃないといいけどなあ」

ああ見えて内心が変な奴だったりする。上から目線の人間だったら、結構対処に困るのだ。

柚鷺は、そういう人間を嫌な存在と認識している。

さて、本来普通の高校……もとい、柚鷺の高校であれば体育館とよべれる場所で入学式が執り行われるのだろう。

『白媛大講堂』。

そう呼ばれる、体育館の様な式場には一千何百人の生徒達が学年順に分かれて椅子に座っていた。

そう、全校生徒が椅子に座っているのである。

ステージはなく赤に染まった金糸が縫いこまれている大きな幕引きカーテンや、一年生が座っている場所より少し手前……柚鷺の視点からして目の鼻の先にある壇上にはマイク……ではなく上映機器が置かれ、背後にある白い幕に照らし出され今は校章が浮かび上がっているだけだった。

「学園長でも映つて来そうな展開だ^{フラグ}な」

そして柚鷺の一言が始まりを告げるように、浮かび上がっていた校章が急に乱れて画面が変わり、黒い影^{シルエット}が映し出される。

『アーアー、マイクテスマイクテス。校内放送。校内放送。あーあー、大丈夫？ちゃんと聞こえてるよね？』

白媛大講堂に設置された大きなスピーカーから、それよりも大きな腰を抜かすほど間抜けなで心が沈むほど拍子を抜けをするほどの声が聞こえてきた。

なんとさえいいのだろうか？まるで、土曜夜七時の子供系番組に

出てくる青いネコ型ロボットの昔の声のような声だった。

その昔聞いた声にそっくりだ。だが、機械音みたいに区切りが多い。なんで？と思ったのは柚鷺だけだっただろう。

と、ぷつん と電子音が鳴った瞬間、白い幕には映像が映し出された。

そこに現れたのは、誰もが絶句する想像上の肖像を遥かに上回る -
- - - - -

- - - - - 熊の人形だった。

【.....】

たぶん柚鷺だけだっただろう。完全に驚愕の表情を浮かべや眉間
が引きつっていた。

しかし、ただの飾りだということは確認できた。

たぶん、今の学園長の声は改良されているのか機会音が混じって
て本当の声がわからない。

『アーアー、入学生諸君。それとお越しくださった保護者様ご来賓
ありがとうございます。ただいまより、入学式を執り行いたいと思
います。不束な登場ですが、なにとぞ宜しくお願い申し上げます』

・・・なんだか、あの声で話し続けられると馬鹿にされている
のか、謝られているのか、やる気がないのか、どれかなのだろうけ
れどかなり気まずい。

怒る気にも、呆れる気にも、規則正しくして欲しいとも言えなくな
った。

早く、終わらせたいという気分が柚鷺の心で渦を巻いていた。

『では、早速ですが私は本名をさらけ出せない身でして『クマ』と
申します。この学園の学園長でございます。顔は一切見せないよう
にこうして人形を代わりに映させていただいて居ります』

世間に顔がばれてしまつては悪い人なのか、それともただ単にこう
いう風にしてだけなのか分かったものじゃないけれど、あまり気に
すると何か変なことが起きそうなので柚鷺は考えるのを放棄した。

『この学園は四年前から現在まで共学高等学園とさせていただいて
居ります。四年ほどより前は女子高でしたが、社会との接点を考え
にふまえ議論の後、こうして共学となつて居るわけです。ですが、
中々男子生徒が集まらないのは残念なことです・・・嫌な噂が立
つてないといいのですが・・・』

画面の向こうで、学園長が引つ切り無しに落ち込んでいるのが空気
で分かった。

男子生徒が集まらない理由は、柚鷺にはそう分かった物じゃないけれども。

わかってたまったもんじゃないけれども。

あれから、モノクマ学園長に長々と数十分にわたって『説明』ではなく、この学園の歴史に付いて自慢話を奥深くまで語られ終了した。一年生の出迎えの言葉もなくただ単に自慢話をされて終わった。

虚しく空しく、空を切るような感覚で終わってしまった様な気分だ。

入学式が終わり次第巨大な大講堂の中は平然と静まり、入学生は担任の話を聞いて教室へ戻ってゆく。

心の中に詰まっていた緊張は『クマ』によって完全に削除されたように、大分緊張感が湧かない。

これは、いい事なのか、もしくは悪いことなのか、どちらにせよどちらにもよくは無いだろう。

校舎と『白媛大講堂』は一つの渡り廊下で繋がっている。そのため、学年ずつしかその場所を通ることは出来ない。

しかも、大講堂と体育館は別々にある。

大講堂は基本的に文化祭がイベントなどを行うときに使用され、体育館は道具を使用するスポーツ……つまり、バレーやバスケット

トボールなどをする際に使用する。

グラウンドは、外で体育の授業をするか体育祭で使用するかで分かれる。

その他は、何に使うか柚鷺には見当もつかなかった。

現在十一時四十四分。教室にて・・・・・・・・

柚鷺の席は、教室の窓際だった。結構景色の良い窓際のスペースである。

中々のポジションだと、自分でも実感していた。

しかし、

「どうやってこれ窓を開ける？」

疑問は唯一つ。換気する為の窓は何処だという話だ。

そもそも、こんな強度の高いフロントガラスを貼り付けること事態が間違っているようにも思える。

普通に窓設置しろよ。換気できねえじゃん。

そう柚鷺は思っていたが、

「換気する必要がないんやて」
「？」

隣の席にいる女子（名前は篠 香織）がそういう。

茶髪の髪が頭の旋風から螺旋するようにして生えてだらりと下がっている。

やや肩に掛かる程度の長さだった。

性格はやや高めのテンションに関西弁っぽい口調をする。

「天井見てみー」

言われるがままに、柚鷺は上を向く。

勿論蛍光灯と、換気扇が設置してあった。しかも物凄い静か。

「高性能過ぎる！クオリティがたけえ！」

「そいつは仕方ないと思うやけど・・・」

換気は教室の天井に有る換気扇を使っているらしい。とことん、金持ちな学園だと実感する。

巨大なボイラーを丸ごとそのまま設置したように、その分だけ大きさがあった。

「これ、ボイラーなんやけどさ、なんとエアコンまでついてるんや」

どうやら、教室の天井の半分以上を埋め尽くしている理由は、エアコン機能までも搭載してあるかららしい。

「夏はちゃんと空調が最高に良くなる様になってるし、冬であれば熱が籠るように機械が自動的にやってくれるんやて」

「都会人はみんな贅沢だな」

田舎じゃ工夫して何でもかんでも過ごしていた。暑いときも寒いときも、エアコンもストーブもない所では自ら工夫を凝らしていた。

「贅沢なん？」

「贅沢だよー」

「どんなところが？」

「機械に頼りっぱなしなんだよ。工夫しろって、俺は親父に言われてた」

しかし、機械ばかり使っていた自分がそんなことを言える義理ではない。と自覚しているつもりではあるが、どうしても言ってしまうのは心情かもしれない。

ちょっとした放課が終わり、各自担任の話と発布される教科書類をもらって、解散に相成った。

柚鷺達のある教室は一階ですぐ隣に昇降口がある。当たり前なのかもしれない場所だった。

昇降口はこの学校には一つしかなく、もしも逃げるときには良い場所なのかもしれない。

「逃げる必要があるかどうかは知らないが……」
「？」

柚鷺の戯言に、隣で歩いていた未来が複雑な表情をした。

因みに恵美が居ないのは、部活を観に行っているかららしい。

確か水泳部とか何とか言っていたな。と柚鷺は思い出す。

「急にどうしたの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・独り言だ」

あまり、深く関わらないように、興味を唆らないように、柚鷺は言った。

現在柚鷺と未来の二人は最寄り駅から出たところだ。

時刻は午後十二時三分。

「ね、ねえ、私これから街に行って買いたいものがあるけど、柚鷺君は・・・・どうするの？良かったら・・・・・・・・一緒に来ないかな？」

未来は緊張しがちな声で、顔の前で両手を合わせて拝む様なポーズを取りつつそう言ってきた。

「いいぜ。僕も丁度、買いたい物があつたからね」

「あ、奇遇なんだね」

返事する未来は、とても嬉しそうに微笑んだ。本当に、心の底から嬉しそうに微笑んだ。

柚鷺にはどうしてここまで嬉しそうにするのかが分からなかった。

でも、言葉自体深い意味を持って居ないだろう。

ただ、嬉しい。それだけでしかない。

意味はただそれだけしかない。

単純で、時には複雑な言葉だ。

「じゃ、行く?」

「うん」

流石は都会だ、街の至るところには普通の町には無い、店舗や会社の高層ビル、飲食店が数多く並んでいる。

田舎には精々小さなスーパーに駄菓子屋が一軒ずつしか存在しないし、山を越えた町にはコンビニやレストランはちよくちよく存在するものの、あまりたいそうな店ではない。

この街にある普通の店舗よりかは、何割程度か小さかったりする。

田舎にいたときは修学旅行で都会に行った事は無いし、街に出てもデパートなどは存在しなかった為、今柚鷺に見えるもの全てが珍しかったりする。

「何処寄んの?」

「ちよっとした、服を買おうって思って。前着ていた服がちっちゃ

くなっちゃったから」

「はあん。成長したからってことか……丁度いいや。僕も案内してくれよ」

それから、最寄り駅から程ほどに歩き何時も行くという常連の店に辿り着いた。

大きい専門店だった。

フロントガラスの中には、今人気だと思えるモデルに着せられた服が注目を集めれるように飾ってある。

『GOD・ADORU』

店の名前はそう書かれていた。色が入った蛍光灯が、昼だというのに眩く光っている。殆ど効果は無い。

「GOD・ADORU。良く飾る」

「あ、そういう意味なんだ」

「……………」

ま、店の名前の意味なんて英語で書かれていたら、大抵の人は分からないだろうけれど…………。

「さてと、店の名前はいいから入ろうぜ」

「あ、うん。言ったのは柚鷺君だけど……結構投槍派だね」

「そこは、見捨ててくれていいぜ」

もう、面倒くさい。と柚鷺は綴る。

店に入ると、その空間にあわせた様な匂いが柚鷺の鼻腔の奥を衝いた。

多分、これが専門店独特の匂いなのだろう。

店の中は、殺風景で客はそれほど居なかった。

殺伐。沈黙。やけに役に立たない言葉が頭をめぐって出てゆく。

店の中は煌びやかだ。様々な、洋服が色とりどりに飾られている。

男性用から女性用まで揃っており、柚鷺の好きそうなものも見つけられそうな勢いだった。

そんな、感慨に浸りながら未来の後に付いてゆく。

何処へ向かうかは彼女次第だが、柚鷺も興味がありそうなものがないか、自分の目で見ながら歩く。

一応言っておくと、柚鷺が好きな服は主にフードがついたものだ。

つまりパーカー。あと長袖で生地が硬くないなら何でも。

逆に、生地が硬かったり半袖やノースリーブの服装は好みではない。

最近、生地が伸び縮みするとか柔軟性のある服を好んできている。無理な動きを偶にすることがあるからだ。

変に硬かったり伸び縮みしないと、服がびりびりに破けたりするときもある。柚鷺の場合は。

「あ、あのさ、お願いがあるんだけど・・・いいかな？」

「んー？」

「私がこれから選ぶ服の中で、似合っていたのがあったら言ってくれないかな？」

「？どうしてだ？好きなものがあるなら、自分で選べばいいんじゃないのか？」

「私これでも決断力がなくてさ。恵美みたいにすぐに『これ』って決められないんだよ。それにテレビに出るからみんなからは変にみられない服装で行きたいから・・・」

「・・・あー、でもさ、僕ってあんまりセンスないんだぜ？似合うに合わないなんてよく分からない。自分の好みはあるんだけどさ」

「そこら辺は大丈夫。みんなから見られても変じゃないと自分で思えるものを選ぶからさ、そのなかで自分が一番だと思ったの言って」
「・・・あれ？それって別に僕居る必要がなくて？変じゃないと自分から選んでくれるのなら、別に僕が選ばなくてもいいんじゃないのか？」

「だーかーらー。私は決断力が弱いんだって、人から進められたもので決めちゃう性格だから」

「あー、確かにそうだったね」

忘れてた。と柚鷺が言い。

あはは・・・と未来が笑う。

「じゃあ、早速選んでくるから。ここで待ってて」

未来はそういうと、手早い足取りで走っていった。

「決断力が弱い・・・ね」

如月柚鷺はアイドルのとある性格を知った。経験値貳百GETした。

LEVELが1UPした。

現在のLEVEL2。次のLEVELまで後三百。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

懐かしい連想だった。

・ ・ ・

程なくして、柚鷺は未来のほうへ行った。

どうも、選びに選んで選び抜けない未来にとって、あれもこれもどれもあつちもこつちもどつちもどこもかしこもあれこれ、とりあえず見られてもおかしくないと未来が思う服は二十五着ほどあった。

女子の乙女心は複雑怪奇で単純明快だと柚鷺は思っているが、未来は果たして単純なのか、複雑なのか、分からない間隔にある。

とりあえず今は目の前にある二十五着の服装を見ることに専念しよう。

雰囲気が合うとか、服装が似合っていない空間があるとか、空気の流

れにおけるテンションとか、そういうのは柚鷺にはあまり分らない。

殆ど、物静かに過ごす柚鷺はこの如く期待を外すのが体質である。テレビなどでやっている、UFO、幽霊特集や、トーク番組、ドキュメンタリー、エンターテインメント、映画。などの番組を一切見ないため、世間的な若者の反骨精神を殆ど持ち合わせていない。

唯一持ち合わせているといえば、偶にニュースでやる報道などで若気の至りを知る些細なことだけでしかなかったりする。

この街に住むであろうアイドルたちの名前を知ったのもつい最近だったりする。

さて、柚鷺がテレビを見ないで、一体何をして過ごすのかといえば、殆ど世間話の雑誌の鑑賞や勉強が寝るか……。まあ、普通ではないことをその他沢山やっていた。

大半が勉強と言う類に入るが……。これは伏せておこう。
ところで

結局、柚鷺は二十五着の中から十着ほど選び抜ける事が出来、それを購入すると同時に宅配の手続きを終わらせて店を後にした。

もう、何と言つか感無量だった。

乙女心はさっぱり分らない。と柚鷺は今日は心が疲れるほど感じた。

複雑怪奇な心を持ち合わせない柚鷺にとって、本当にこつこつものには苦難する。

家路についたのは二時過ぎだった。

どうやら、二時間も掛かって柚鷺は選り抜いていたようだ。

余計な時間を、多く食った所為で昼食をとらなかった分腹に凄い空腹感が合った。

「めっちゃ、腹減った」

「わたしも、ぺこぺこだよー」

「さっさと家帰って食うか」

あれ？何か忘れている様な気がする。と未来は思った。

3
× 2 〃 6 話（後書き）

曖昧な終わり方ではないです。

次の更新は結構先になります。

其の壹々休日とアップルパイとお迎え々（前書き）

53時間生放送パネエWWW

限定ファイルゲット！

PSPの初音ミク プロジェクト ディーヴァ エクステン

ド
が待ち遠しい今日のこの頃・・・太鼓の達人DXで暇つぶし。

そんな中更新です。

其の亶々休日とアップルパイとお迎え々

篠 香織「始業式面倒くさいっちゃあらへんのお」

柚鷺「なんだよ、寝てなかったのか？」

篠 香織「よくあのうるさい中寝れとっ たな!？」

柚鷺「耳栓してた」

篠 香織「……………」

四月八日。

入学式が終わって次の日。

早速、普通に学校があるかと思えば、学園の営業的、事業的なもので休日となっている。

何でも、新学期で新入生のごちゃごちゃとことがあるらしく、担任は大変のようだ。

こうなると、土曜日、日曜日も含めて三日ほどの休みが訪れるわけだけれども……

「・・・・・・・・」

現在、特に家にいることが一番に暇な【如月 柚鷺】は現在進行形でベッドでごろごろしていた。

特に話し相手は居らず、することもなく、動く気もなかった。

ベッドの傍らにある情報雑誌は読みつくした。

新しく買って来ようにも、気力がない。

未来達といえば【お仕事】だ。

たぶんテレビをつけてチャンネルを変えれば芸人達と会話している番組が映るに違いない。

みんな殆どお留守だ。

母方である【杏里】は父親の元へ手伝いに。

芽衣子、海斗ともども社会人として会社に出勤。

樂歩は武道が如何とか、剣術がなんじゃらほいとか。

梨花。携帯持ってドSっぽい集団と遊びに。

瑠歌のお姉さまは未来と同様【お仕事】。

恵美は高梁亜由美（後で聞いたのだが中学後半からの同級生らしい）と遊園地へ（仕事なし）。

未来は【お仕事】でテレビ出演。

かがみねきょうだい
鏡音姉妹は同じく【お仕事】で【テレビ出演】。

美希は学校だ。小学校は今日、今後の活動やクラス内の役割決め、その他たくさんことがあるため登校しているが昼には帰ってくる予定だ。

んで、柚鷺は困ったことに【暇人】状態だ。

屋敷内ではお手伝いさんが忙しく働いているというのに柚鷺は暇すぎた。

使用人の世話を手助けするという考え方も放棄した。

下手にやって失敗はしたくないし、邪魔をしたくない。

ましてや、暇つぶしに会話をするなんていうのもアホらしい。

迷惑にもなるだろう。

「いや、本気でどうしようっ?」

窓から飛び降りて遊んでみるか？んな、馬鹿な遊びはないけれど。

「あ」

そういえば と柚鷺は思い出した。

「アップルパイでも作るか」

いい暇つぶしだし、材料買って来て作ればおやつの時間に合う。

途中で美希が帰ってくるが問題はない。

最近田舎でも卒業式のなんちゃらかんちゃらで忙しくて作ってる暇はなかったし、食べている暇も少なかった。

一応好物だし。損はないと思う。

そういうわけで、柚鷺はベッドから起き上がって荷物をまとめた。

荷物といっても必要最低限のものだ。

財布と携帯を持った。

まだ、少し寒い感覚が残る曇りの今日。

外着を着て部屋をあとにした。

玄関から柚鷺の部屋まではそう遠くはない。複雑に行くわけでもないので簡単に着く。

「あ……」

ちょうど、使用人が奥のほうから来るのが見えた。

出かける報告にちょうど良いと思い、歩み寄る。

それに気がついたのか、使用人はパタパタと小走りでやってきた。

「どこかお出かけですか？ 柚鷺様？」

いい加減【様】はよして欲しいものだが、彼女達からすればそれは許されない行為だろう。

使用人は殆ど同じ髪型だ。紙を束ねて後ろで簪で纏めている。

んー、簪かんざしかあ……。

「すこし、買い物に。何か作ろうと思って」

「？それなら申し付けてくれれば……」

「んにゃ、暇つぶしに作りたかったしね。どうせ、俺は普通人だし」

「はあ……そうですか。じゃあ、玄関で待っててください」

「？」

「お供します」

「え？ いや別に……行っちゃったよ……」

善意なのか何なのか。この使用人はそういう気遣いが良い。

少しでも困っていきそうな顔をしていたら声を掛けてくれるほどだ。

でも、少し柚鷺にとって気まずかったり、悪いと思ってしまうのは当たり前なのだろう。

「しゃーねーわ」

柚鷺はその場を後にし、玄関へ向かった。

・ ・ ・ ・

初音家から、歩くこと十分。都会のでかいデパートに着いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「~~~~~」

柚鷺の隣には、鼻歌を歌う先ほどの使用人が一緒にいた。

いや？別におかしいとかそういうのじゃないよ？荷物持ってくれるとかそういう気遣いが在りそうなのは嬉しいよ？

でもさ、使用人の征服で一緒に来ることはないと思う。

着物の上にエプロンだぜ？んで、ヘッドドレスだよ？

違和感ない方がおかしいだろ。

（なんだか、一緒にいて気まずい・・・）

居心地の悪さを、柚鷺は感じていた。

やけに、風が吹いてきて柚鷺の長い髪を揺らしていた。

まあでも、周りの視線が嫌に感じるときは田舎ではずいぶん多かったからなあ。今更見られても大丈夫か・・・。

「ところで？なにを買うんですか？よかったら、私の買い物の序に持ってきますよ？」

デパートの中にある公共のスーパーに入ったところで使用人はそう話しかけてきた。

「調味料的なものは砂糖とかは家にあるので使わせてもらうので・・・じゃあ——」

そうやって必要な材料を言い渡すと、使用人はテトテトとペンギンみたいな足取りで歩いていった。

あの人・・・すげえ危なっかしい・・・

「まあ、大丈夫だよなあ・・・」

柚鷺はその場に背を向けた。

如月柚鷺は田舎人だ。都会のデパートが本当に大きいと感じたのは、今が最初なのかもしれない。

田舎の学校の修学旅行では都会に行くのではなく、主に風物の感じ取りだった。

ほかの、田舎へ行ったりして交流を深めるものだった。沖縄行ったときは……柚鷺は酷かった。

まあ、そんな感じで都会へ行って何に成る？見たいな発想だったのか、校長はそんな感じだった。

『んー、都会？空気臭いよ？』

『都会が臭くなくて如何するんですか……』

『でも、アイドルとか可愛いんだよねえ』

『主な目的はそれですか……』

『初音未来って知ってる？まだ十四歳なんだけど？』

『知るか！てか、その発想から離れる！あからさまにロリコンみたいじゃねーか！』

『君！なんて口を利くんだね！』

『……』

『初音未来を知らないとはそれでも人間か！』

『そっちかよ！』

（ああ、そういえば俺がまだ十四歳の頃って言えば一人前の人間のようなしゃべり方が出来た頃だったつけ？もう二年か・・・未来を知ったのは本当に最近なんだよな。まだ、出会って一週間もしていないのに・・・なんだろうなこの居心地のよさは・・・）

それに、初めましてという気分じゃなかった。

以前にどこかであつたかな・・・でも、柚鷺の地元は有名人が目をつけるような場所ではない。

村を出てすぐ近くにある町なんか人が着て楽しめるような場所はなかったし、第一彼女たちが『下霧村』への入り口を見つけることができたかどうかわからない。

村へ続く入り口は山にあるのだがあそこは比較的にちゃんとした道がなく、見えないのが特徴なのだ。

車が通れるには通れるのだが砂利道だ。

（わっかんねーよなー・・・・・・・・ハア、面倒だ・・・）

デパートのスーパーの棚から必要な材料を取り、籠に放りこみながら柚鷺は嘆息を吐く。

次に艶で輝いている様に見える林檎を探し求め人が多いスーパー内を歩いてゆく。

『んなもん知るか！アホ！くたばれPTA！』

この言葉は柚鷺が事件以来初めて自分らしく、故に普通に、日常的に発した最初の言葉だったりする。

なぜ、このときなぜ『PTA』と言ったのかはさておこう。

柚鷺自身はつきりと自覚はしなかったのだろう。

だが、それまで臆病で丁寧で惨めな口調しか出さなかった彼が『本来』の姿に戻った瞬間だった。

感動の瞬間には程遠く、むしろ苦笑いとか笑いとか、巫山戯^{ふざけ}たりそんな空間だった。

周りの人間も自覚したのはずいぶん後になってからだった。

柚鷺がさっきのことで怒って出て行ってしまったからだ。

そのことで呆然^{ぼうぜん}していて、あわてて止めに入ったりして、殆ど如何でもよかった。

状況からして構ってる状態でもなかったのだ。

そのあと、柚鷺自身がその場で初めて気がつき自覚した。

みんなも自覚し気付いた。

感動もへったくれもなくただ、苦笑いがその場に漂った。

でも、その日が境に柚鷺は変わった。

案内材料はすぐに集まった。後は会計を済ますだけなのだがメイド（あれってメイドって呼ぶの？）・・・いや、使用人の姿が見当たらない。

はて、どこまで迷子になりやがった　と呟きながら柚鷺は人の間を潜りながら探す。

不覚にもこのスーパーは広い。探すのは時間が少しながら掛かりそうだけど・・・あの人なにを買いにきてんだろ？

日用品とかそのあたりか？

シャンプーとか洗剤とか洗面道具とかの補充かな？

それとも夕食の買出しで、肉やら魚やら迷っているのかもしれないし。

自分のためのおやつを鑑賞しているのか、野菜や果物で連想でもしているのか。

あの人のことはよくわからないので何を考えているかは知らない。

もしかしたら、昼飯の材料でも見ているのか。

風漬しに探すしかなさそうだ。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
五分経過
・
・
・
・
・
・

「あつれえ？」

全く持つて見つからなかった。おかしいな、ここまで迷子になるほど広くはなかったはずだ。

スーパーで迷うって・・・前代未聞じゃねーか。

五分も探しているのに全く見つからないとは・・・・・・・・・・一体全体如何したことが・・・。

携帯で連絡を取ろうにも電話番号を知らないし、あの人携帯を所持していなさそうな感じだった。

こういうときに限って携帯が必要になるとは・・・・・・・・便利じゃねーな。

仕方なく、柚鷺はその場を振り返り再び探そうと思いきや・・・・

「ふう・・・・やっと思いつきました」

籠に大量のものを入れた彼女が荒い息を吐きながら柚鷺のそばまで

やってきていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

追いつきました？ってことは、柚鷺が探し回っていた時間帯は追いかけてっこしていたというわけか？

申し訳なさが柚鷺の中であふれた。

「声でも掛けてくれればいいのに・・・・・・・・」

「でも、公共の場で『柚鷺様』というのは恥ずかしいのです・・・

」

「一々その呼び方しなくても、『如月』でいいよ」

「そんな！滅相もないですよ！」

「じゃあ、どうしろと・・・」

今更ながらに柚鷺は思う。

使用人ってめんどくせえ。と。

「とりあえず会えたり、会計済ませて帰りましょ。いろんな意味で疲れたし」

「そうですね」

柚鷺は会計レジに向かって歩き出したが・・・

「ちょっとまってください」

「？」

「籠が重くて・・・」

まあ、流石に五分くらいその両腕で持ち歩いていたし当たり前か・
・・・・・

柚鷺は、自分の籠を片手に持ちもう片方の手を差し出した。

「？」

「もつよ。あんた重いんだろ？」

「失礼な！無礼な！まだ四十キロ台ですよ！？四十台で重いか鬼畜でしょ！？」

「何暴露してんだよ。あんたの体重なんて知るかよ。籠重いからもつてやろうと思ってるのに・・・」

「・・・・・・」

次の瞬間彼女の顔が真っ赤に爆発した。

この人馬鹿だ。

日用品 四千七百六十円ナリ アップルパイ材料 二千九百十一円ナリ

食材 二千三百五十四円ナリ 洗面用品（使用人用）千九百三十円ナリ

+ 税込み5%で

一万二千五百五十二円ナリ

重！

帰り道。柚鷺が全部買ったものをエコバッグに詰めて持ち帰るわけなのだが重かった。

何しろ、家族全員分の食材や日用品がエコバッグの中には入っているわけだ。

これほど荷物が出るのならいつそのこと車で来たかった。

両腕に掛かる錘は肩の骨や筋肉の筋が悲鳴を上げている。

（何のスパルタだよ……）

親父の訓練でもここまでのものはなかった（ただ、百kgのダンベルに縄を括り付け柚鷺の腰につなぎ動くまでその場で走り続けるというのはあった）。

それまで、昼飯や糖分（水分はあり）は一切もらえなかった。

あのあと、三時間で一cmは動かせたが目標は十cmとなっていて結局一日中掛かった。

腕が使われなかったのは、『腕動かなかったらお前料理作れないだろ』という理由。

精々、懸垂を一時間、定番で百回というあたりだけでほかに何もなかった。

いや、実際のところ筋力だけで言えばこの程度の荷物は重くはない。

ただ、持ち続けると言う事なのだから重くなる。

それに、五分もこれをぶら下げて歩けば当たり前なのだが・・・

残念ながら交代は出来ない。

彼女の腕がこの重さに果たして持つかどうか分からない。

片方だけでもかなりの重さがあるし、自分の体重を暴露してしまったという絶大なダメージがある彼女がいまだに残っているようだ。

後ろで真っ赤になったまま彼女は俯いて歩いている。

まともに顔を合わせない様になっている。

（仕方ないよな）

出来るだけ後ろを向かないようにして柚鷺は前を見つめて進む。

既に都会外れの住宅街だ。人通りは少なく車がたまに通過する程度で他には通行人を見かけることはなかった。

道路からは柵を通して他の家の庭が覗ける。

犬が寝ていたり、ギター弾いてのんびりしている人がいたり、自転車とかバイクとか、そんなものを作ったりしている人を見かけたりした。

玄関先で奥さん達が最近会った家の話題で笑いあっている。

傷が付いた 止まれ の標識が目に入る。

電線の雀が停まって鳴いている。

のんびりした風景がそこに広がっていた。

田舎だともっともつと平凡だ。

本当に電線の数も少なくて、ここまで家が少なくて、煩いほど鳥が森で鳴いていたり、風で木々が揺れて自然の音を生み出したり。

軽トラくらいしか通る車がなくて、まだ無邪気なこどもが走り回っていたりする。

コンビニだってない。小さな駄菓子屋と小さなスーパーが寂しくあるだけだ。

道路だってない。削ったような砂利道が道路でまともなのはなかった。

んー、美希に田舎のころの事話してあげてと杏里に言われているのだが……こういうことでもいいのだろうか？

でも、実際に行った方が早いような気がするし、夏休みあたり誘ってみてもいいだろう。

「あ、あの……」

やっと、使用人が口を開いた。

柚鷺は

「？」

と答える。

「体重のことは他言しないでください……」
「……」

一々体重なんて気にすんな と思っている柚鷺だがどうやら『女子』
にとってそれは重大なことらしい。

だが、『乙女心』が理解できない柚鷺という存在からは『女子』は
かなりぞんざいな扱いらしい。

事実、田舎では普通に殴り合っていた。

こつ……拳で……語り合っ？ 見たいなこと**ほく**きながら。

殴り合っていた。

（いやぁ……面白かったなぁ……）

帰宅後、とりあえず昼飯を食べた柚鷺は早速準備に取り掛かった。

田舎でもよく作り、スーパーには常連として材料は必ず置かれていた。

お裾分けして近所の人とおやつとして食べたものだ。

まずは林檎を切ったりして鍋に砂糖とかレーズンとか一緒にぶち込み火にかける。

水分が出てきたら中火にしたりして水分を抜けるまでまつ。

その後、火からおろしてシナモンやレモン汁加えて冷蔵庫へ入れた。

途中、帰ってきた美希が匂いを嗅ぎ付けて「なに作ってるのー？」と尋ねてくる。

柚鷺は「お楽しみだよ」とだけ言って微笑む。

美希は「おおー楽しみー」とはしゃいだ。可愛いと思った。

次に生地を作ることにした。

田舎では市販の生地を使っていたのだが、この際作ってもいいだろうと思い準備する。

途中美希と一緒に作りたいたいと言い出したので、学校の家庭の時間で作ったエプロンをかけてやってきた。

柚鷺は嘆息を吐いて、まあ、いい経験になるだろうし と思いなが

ら薄力粉と強力粉、冷水、角切りにしたバターを用意した。

ボウルの中に薄力粉と強力粉角切りにしたバターを加える。

自然にバターが溶けて馴染むのを美希と眺めながら待機。

馴染んだら冷水を美希に注がせた。

手を洗ってから生地を練りこむ。

「ボロボロしてて混ぜ難いね・・・」

「んー？まあな」

美希が生地を練るところを見ながら柚鷺はもう片方のボウルで捏ねている。

いつその事使用人も含めて作ってしまおうという寸法だ。

お世話になってます という単純な気持ちを込めて。

ある程度固まって美希が疲れたと言い出した。

ちょうどいい風に纏まっていたので、二人はラップに包んで冷凍庫へ入れ三十分ほど放置した。

キッチンを一旦抜け二人は縁側まで着た。

ゆっくり休むようにして二人はその場に座った。

「腕がー」

などと、美希が面倒くさそうな口調で転がってきた。

胡坐をかいていた柚鷺の太腿に美希の頭がぶつかる。

「つかれた？」

「見てた方が楽だったよー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

這い蹲った格好で美希は顎を柚鷺の太腿に乗せてくる。

「どうした？」

「今日学校でいいことがあったんだー」

「んー？」

「やっぱ教えない」

「なんだそりゃ」

美希は太腿から顎をのけて柚鷺の胡坐の中に座ってくる。

こういう状況は田舎でも良く在ったからすっかり慣れてしまった。

「なんかお話聞かせてー」

「そうだな・・・・・・・・」

柚鷺は縁側から見える景色を一回り見てみる。しかし、嫌いな桜の色が柚鷺の気分を阻害してゆく。

これじゃ意味がないと思い記憶を探ってみる。

「なあ、美希」

「何ー？」

「こつちが訊きたいんだけどさ。あのさ、俺ってお前達と昔どっかで会った？」

「さあ？でも……わかんない。お姉ちゃんたちはなにも言うてくれないから」

「そっか……」

居心地のよさ。ここが前々から自分に合っていた様な場所。

異常だ。

柚鷺は彼女達にあつたことを覚えていない。病室であつたのが最後でそれ以来思い出してもいない。

それに柚鷺自身がそれを思い出す機会さえないだろう。

「そろそろ行こうか」

「うん」

二人は立ち上がってキッチンへ向かった。

冷凍庫から休ませておいた生地を取り出す。

打ち粉を振ったまな板の上で縦に生地を伸ばしてゆく。

ある程度伸ばし終えたら、三つ折りにして再び伸ばす。

美希が「面倒くさい」といいながらも伸ばしてくれる。

四回くらい繰り返して生地が殆ど纏まった。

折込みを終え生地を伸ばして三分の一くらいカットして冷蔵庫へ入れる。

残りの生地を丸型に敷き詰める（このとき美希が苦戦して時間が掛かってしまった）。

その後ちまちまと手間を加えて型を直してゆく。

美希にフォークなどで模様をつけさせ先ほどの林檎やら何やらを丁寧に入れ冷蔵庫へ入れる作業を頼みオーブンを二百二十℃に温める為スイッチを押した。

先ほど残しておいた三分の一の生地を手間を加えたときに切り取った生地と加える。

伸ばして棒状にし装飾用に形作ってゆく。

冷蔵庫に入っていた生地

網目模様の装飾や雑な星型の生地を載せたりした。

とき卵を塗り二人はオーブンへ。

温度調整をしながら大体五十分ほど焼いた。

・ ・ ・

時刻は午後二次四十分になっていた。

仕事が終わえた芽衣子や海斗たちも丁度居たりして、覗きに着たりした（アイスがどうだとか海斗がぼざいていたので黙らせた）。

オーブンから焼けたアップルパイを取り出した瞬間甘い匂いが鼻腔を衝いた。

「おおー」

テンション上がった美希が声を上げる。

程よく焼けたアップルパイの良い匂いがキッチンを満たしていた。

柚鷺と美希の出来はなかなか上出来だった。

美希は少し形が崩れていたりしているが、それでも十分に良い焼け具合と匂いを放っている。

これを包丁で人数分に切るわけだ。

切った瞬間熱が手の表面を撫でる。同時に、食欲をそそる匂いがさらに溢れた。

今にも涎が垂れそうな美希を苦笑しながら柚鷺は切つてゆく。

使用人の数は多いので一人当たりの食べる面積は多くはない。

分けても残った分は柚鷺と美希と芽衣子、海斗、さつき帰ってきた瑠歌姉さんや梨花がいる。

その他はまだ仕事なのか着ていない。

「ま、先に頂きましょう」

ほかはまだ暖めれば食べれる。出来立てほやほやじゃないのは仕方ない。

切り分けられたアップルパイを紙皿へ載せられている。

柚鷺は一つとる。美希はお盆にそれを載せてゆき、まだ忙しい作業をしている使用人に届けに行った。

「うん。美味しい・・・」

自分で作ったものはやはり美味しいものだ。

「へえ、よく出来てるじゃない。ひよっとしなくても料理できたのね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

とりあえず芽衣子姉さんの言葉には無視を決めた。

「今度、アイス作ってよ」

「お前の頭はなに？冷たいの？だから青なの？つまり馬鹿なの？」

海斗に対しては完全に皆罵倒しか浴びせない。柚鷺も別ではないのだ。

「また作つくない？」

「機会があれば・・・」

瑠歌の言葉にはどこか気まずさを覚えてしまつて柚鷺は言葉が上手く出なかった。

この人苦手だ。

「友達にも作つてね」

「お前が作れ」

梨花は特に苦手だ。こういうどうも棘のある人は柚鷺にとって特に天敵に等しい。

特にツンデレ とかいう性格は特に柚鷺にとって天敵なのだ。

話がやりとりしにくい、コミュニケーションがとりにくい、性格上付き合いきれない。

だから、仲良くなれない。

この場合柚鷺が悪いのだけれど・・・

「あら、お揃いで」

キッチンの入り口から杏里が顔を出した。

「あ、母さん、爺さんどうだった？」

「元気だったわ。相変わらず筋トレよ」

「うわ、まだ続けてんのかよあの爺・・・」

爺さん・・・となると祖父か。

柚鷺には縁も縁もなさそうなのだが・・・

「誰？」

と柚鷺は訊く。

「家のお爺ちゃん。軍を抜けてからもまだ鍛え続けてるってね」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

義父と最も近い位置に居そうな気がしてきた。
義母と最も近い位置に居そうな気がしてきた。

別に問題ないけど。

怖！会いたくねえ！遭いたくもねえ！

「ところで、柚鷺ちゃん」

「？」

「あの二人迎えに行ってくれない？」

「二人？」

「鈴と蓮はこっちで迎えに行くって言うてあるから、未来と恵美のお迎えに行ってきた」

「一緒に迎えにいいじゃないか」

「行ってる場所が離れすぎているのよ。あの姉弟の居る場所は来る

まで行かないといけない場所で、自転車で行ける場所に未来達いるから……」

「……………」

「だから、何で俺？って顔ね……んーとね、面白そうだから」

やっぱり、この人嫌いだ。

以下回想。

『あれ？何で恵美居るんだ？遊び行って自分で帰ってくるんじゃないの？』

『放送局に呼び出し貰って未来と一緒にお仕事になったのよ』

『ふーん、そんな業界に入りたくねーな』

回想終わり。

未来の仕事が終わる（アイドルの出演とかそういうのを仕事とっていいのか今更だが分からん）のは七時過ぎだった。

杏里が先に言っけて置いてくれたおかげなのか、時間通りに家を出ることも出来たし多少余裕を持てる。

自転車を漕いで十五分。住所を見る限り柚鷺はそう見た。

はつきりとした場所は分からないけれど、行けばなんとなくは分かるような気がする。

空はすっかり真っ暗だ。街灯が道を照らしているのがよく目に入る。家から漏れる明かりが街中を光で照らしている。

都会なので空の星が見えない。それが柚鷺にとって残念で仕方なかった。

夜に何も出来ないといわないばかりだ。

天体観測ではなく、天体観察。星を見るだけということが田舎では夜の風習として流行っているのだ。

都会にきた瞬間、ここまで空の輝きが消えてしまつのは本当に残念だ。

すぐにでも田舎に帰って星空を見てみたかった。

「んー、そういえばいつ帰ろうか？」

夏休み？そりゃあ、祭りに呼ばれるから帰る。そのほかと来たら、墓参りや秋とか冬とか元旦あたり。

「ゴールデンウィークなんていいな。丁度一ヶ月もないけど丁度いいや」

柚鷺はそう考えながら街中を自転車で走り抜けて行く。

その背中はいささか寂しさがあるようにみえた。

片手で紙に書かれた住所を見ながら自転車を運転する。

大体このあたりかな？ と思いながら角を折れる。

街を離れたこの場所は電灯の光が唯一道を照らしていた。

来たのは街のテレビ局ではなく神社だ。ここへなにをしに一体全体来たかと考えるのは止^よして置くとして、あいつらどこ？

と思ったが、自転車を停めて階段を上り神社へ入れば一発だった。

何人かのスタッフが忙しく動き回っていた。

照明器具や小物が段ボール箱に慌しく入れられそれを車のワンボックスカーに詰めている。

後ろに未来。隣で手帳に書き込みをしているのは・・・あれは・・・マネージャーか？

黒いスーツと赤と紺色のネクタイに白のワイシャツ。肌が少し透けて見えるタイツにハイヒール。

泣き黒子^{ほくろ}に赤の眼鏡。

すげえ、初めて見た。

あそこまで漫画みたいに何でもかんでもマッチしている人初めて見た。

完璧にマネージャーじゃねーか。怖いよ。

しかしなんで、あんなにきびきびしてんだろ。キノコでも自家で作っているのかもしれない。

それで律儀に育ったのかな？

明らかに声を出して呼べない状況だったけれど、柚鷺は何の躊躇いもなく

「未来ー」

と、呼ぶ。

「うわ！」

とかなり吃驚した表情で彼女は叫んだ。

「早！」

簡易式折り畳み椅子に腰をかけていた恵美が足早に駆け寄ってくる。

「どうせ地形分からなくて道に迷うと思って余裕をもって俟ってたんだけど以外に早い」

「まあ、住所は大体分かるし。お前の母親のおかげで時間通りにくることが出来たからね」

「ふーん、で？母さんは？」

「双子のお迎え」

「車で？」

「・・・うん」

「こっちにも車よこせよ．．．．．なんで柚鷺なの？」
「面白そうだから．．．．．だって」

恵美の頭の中に気ままな表情をする母親が思い浮かぶ。

ちよつと腹が立ったのか舌打ちした。

「ところで、**柚鷺君**」

「あー？」

「一人？」

「うん、自転車であた」

「は？自転車？」

「**自転車**」

「なんで？」

「さあ？」

「どうやって帰るのよ？」

「んー、どっちか二人を後ろに乗せてもう一人はダッシュ……じゃない？この場合」

「ええええええええええええ!!」

「うるせえな」

「走りたくねえ・・・」

「私……」

二人して項垂れる。うなだ 柚鷺はそんな二人を見て

「じゃあ、どうする?」

• •

「じゃあ、未来。来週の土曜日。シフト入ってるからね。恵美も遅れない様に……」

「はいはい」

結局、恵美がじゃんけんで負け、未来は柚鷺と二人乗り、恵美は走りになった。

恵美が早かったら『殴らせてあげる』という、条件付きで走りに成った。

いま、体力があるかどうか分からない恵美だが大丈夫そうだ。

「因みに俺が勝ったらお前アップルパイ無しね」

「はあ!？」

「美希の手作りだけど」

「おおー、美希そんなの作れたんだ。すごい」

「俺と一緒に作ったんだけど……」

「なんだ……って柚鷺作れたの？」

「まあな。さて、行こうぜ。未来しっかり掴まれよ」

そういつて柚鷺は足を踏ん張りペダルを踏む力を込めた。

一瞬、どこを掴んでいいのか分からなかった未来は咄嗟に柚鷺の腰に手を回す。

その行動で体が密着する。

理解できた瞬間未来の顔が真っ赤に染まる。だが、柚鷺はそんなことにも動じない。

それを見ていた恵美が

「柚鷺、アタシが勝ったらアップルパイ&拳骨ね」

「は？」

「問答無用！」

次の瞬間恵美が突進速度で走り出した。

「くっそ！殴られてたまるか！」

柚鷺はペダルに込める力をさらに増して踏み始めた。

一瞬、従姉弟のように見えたのは気のせいだろう。

少しの呆れと温もりと家族のような感覚に未来は浸っていた。

其の壹々休日とアップルパイとお迎え々（後書き）

結構遅れましたが何とか書けました。

これは間話^{あいだばなし}みたいなものです。

本編ではありますが物語としては全く関係ないです。

本編の進行に影響のあるものじゃないというわけです。

次の更新ですが未定です。

3・5×2Ⅱ7話（前書き）

明日から冬休みだが、一月のオフ会までやることが全くない俺。

そんな中更新です。

3・5×2Ⅱ7話

四月七日から三週間前

柚鷺「【初音未来】って何？犬？魚？猫？それとも動物園の新種か何か？」

義母「いや、まず人間って発想はアンタにはないの？」
柚鷺「あー・・・そういう解釈もあつたな」

「死ね！このクズ男！！！」
「ゲフ！」

昼休み。

女子の怒号と共に爆発音が廊下に響き、人が一人と机が何台か吹っ飛んだ。

「ハア・・・・・・・・・・」と誰かが鬱陶しそうに呟いた。

四月二十日。

入学してから何週間か経った。

既に馴染みが出たのか柚鷺はクラスにすっかり溶け込んでいる。

でも、馴染んだというより一番近い友達が未来や恵美といってテレビでよく目に入る人物だったため、よく周りのクラスから目に入るのだ。

友人関係だけでも相当に注目を浴びるらしい。

こちらとしては放って置いてもなんら問題はないのだけれど、それは普通の高校だったらの話である。

女子九割強、男子一割未満という、男女の差が激しいここ『私立白媛高等学園』には通用しないのだ。

「迷惑な……」

そう、はた迷惑だ。

男子が一割未満な為女子の目によく入るわけだ。

柚鷺だって注目されたいわけじゃない。

本来、親の都合がなければ【市立紫木高校】で無事普通の生活を受けていられたのだ。

それがだ。

なぜか一人暮らしではなく、居候する羽目になった。

しかも、自分の世界とは全く持って無縁な超人たちの一家に居候だ。

親はどんな縁を持っているのかさっぱり分かったものじゃないのだけれど、絶対に無縁のほうがよさそうだ。

はつきり言って冗談じゃない。

有名人と屋根一つ下？何でそんなハード過ぎる生活を送らないといけない？

田舎で平凡に暮らしたっていいじゃないか。農業やって暮らしたっていいじゃないか。

てか、色々疲れている。

居候を始めてその家族のことでバタバタと色々ある所為だ。

まだ何週間としか過ごしていない馴染めない居場所だ。昔は居た感覚があるような気がするのはたぶん気のせいだと思っている。

家に帰りたい。実際実家と呼べる本来の場所はないけれど中学時代に作った居場所だけはある。

てか、一日くらい休暇が欲しい。田舎の実家の掃除がしなくなってきた。

近所のおばあちゃんに合鍵を貸しているため掃除はしてくれというものの、けしておばあちゃんが悪いのではないが自分で掃除しないと気が済まなくなってきた。

さておき。

今日は年に一回の行事だ。

いや、行事と言うよりもただの身体測定だ。

年に一回。

身長を測ったり体重を測定したりして、成長を記録するのだ。

大した大事ではないのだが今日の教室の外はいつも以上に騒がしい。

何事だ。

・
・
・

【私立白媛高等学園】

そこは元々お嬢様学園であり男性がけして立ち入ることの出来ない場所だ。

いや、交流会とかそういうのがあれば本当に別なのだけれど、何年か前以来に共学になった。

校長や教員の話し合いで決まったのだ。

やはり社会に出てから男子の耐性がないと困るというのが考えだっ

たらしく結構あっさり決まったようだ。

しかし、卒業までの過程とはそれほど簡単なものじゃない。

「じふつつつつつつー!!」

教室の外。すぐその廊下で呻き声と共に内臓でも殴ったかのような鈍い音が響いた。

「うるさいなあ……」

柚鷺は鬱陶しそくに廊下のほうを見た。

四限の数学の宿題を既に済ませようとノートを開いてやっていたのだが、昼放課になって数分。

早速事は発生した。

何時もなら静かにしていたものだけけど、今騒がれると流石に面倒なことになる。

ここの教員は騒がしいのが大好きのようだ。

少しことが起きればたまに傷口を広げてくれるときがあったりする（面白い発展のほうで）。

仕方なく柚鷺は席を立った。

この状況になるのは必ずあいつの所為だ。

教室のドアには人が集まっていた。

掻き分けるわけには行かないのだが――

「あ、ごめん」

道の妨げになっていた髪を括った女子が道を空けた。

「すまん」

柚鷺はそいつって手を振った。

――こうやって男子が来ると自然に道を空けてくれる。

その行動は男子が少ないためか。気を使ってくれているのか分からない。

騒ぎの中心には男子が居た。

身だしなみを整えていない乱れた制服。茶髪に前髪をピンで留めところどころ髪が跳ねている。

明らかに悪戯好きといわないばかりの顔立ち。

そんな奴が、柚鷺の目の前に突っ伏していた。

「四季……おまえなあ……」

四季……四季^{しき} 朋幸^{ともゆき}。

柚鷺と同じクラスの男子であり今年入ってきた男子、五人のうちの一人である。

「いつてえ……」

「もう懲りろ、俺に迷惑をかけるな」

溜息を吐きながら柚鷺は呟いた。

「俺はなんもしてねえよ……」

「なんかしなきゃこんな状況にならないだろ……」

「じゃあ、ユサツチ。四限目の授業の課題を提出に行こうとしてドア開けたら女子がいて、いきなり打ん殴られてこんな有様になったんだけど、これって俺がなんかしたの？」

「……」

因みに、ユサツチ という柚鷺のあだ名だがこの数週間のうちに彼に名づけられたものだ。

嫌いでもなくしつくり来るわけでもないそのあだ名は格別お気に入りといいわけでもなく、馴染めるあだ名だった。

しかし、女子もなんで殴ったんだ。

「あれだろ。日ごろの行い」

「……否定はしないけどよ……流石に酷くない？」

「俺はそうは思わない」

思わないって言うか、そもそもそれなりの事態を引き起こしているお前に酷いもクソもないと思う。と柚鷺は考えている。

「というわけでユサツチ」

突っ伏していた顔を上げがばつと起き上がる四季。

「あ”あ”ん？」

「いや、ガンつけなくていいから、助けてくれよお。主に後ろの女子から」

「お前の方をつけるか、自主して気が済むまで殴られるかどっちかにすればいいんじゃないの？」

「それって俺が死ぬってこと？」

「うん、それに非常に近いけど、もうちょっと手前。半殺しで病院一年入院とかそのあたりかな？」

「すいません、勘弁してください。そして、助けてください」

「やだ」

「そんな殺生な……」

柚鷺は呆れた顔をして四季の後方にいた女子へ視線を向けた。

いまだに怒りの籠もった視線が四季に向けられ、その眼光は殺気を放ち、鋭く尖っている。

部活の所有物だろうか？右手には木刀を持って肩に担いでる。

背後がなんか歪んで見えてきた。陽炎の様にねじれる様に見える。

うわぁ、これは相当怒ってる。

あれで、何回殴ったら死ぬんだろう。

それを確認して柚鷺は立ち上がった。

戦略的……ではなく、現実逃避^{とっひ}。

「ガンバ」

「いや待てい！」

踵を返して去ろうとする柚鷺の脚を四季は全力で掴んだ。

「逃がさんぞえ！」

^{やまんば}
「山姥かよお前……」

掴んでいる柚鷺の足からみしみしと握力によって締め付けられてゆく。

だが、黙ってそれを見続けている柚鷺ではない。

ずるずると柚鷺はかまわず四季を引きずりながら教室の扉へ向かう。

いつの間にか野次馬が増えていた。やっぱり日本人てこういうのだよな。

ブレーキも何もないので簡単に進むのだが……異常に四季が重かった。

今になって何でここに来たのか後悔する……うるさいのなんて無視するのが一番のはずなのに……

「ふふふ、飛んで火に入る夏の虫……」

心を読まれた。

こいつ、いやらしいところで鋭いな。

だが、ここで後悔したところで逃げ切れないわけではない。

そう思っ脚を進めようとしたが何かに引っかった。

ぐん と引っ張られる感じで足は止まった。

「あれ？」

握力がかけてられている脚を力を込めて前へ踏み出してみる。だが、ぐん と引っ張られるようにして進めない。

「？」

不思議に思っ振り返ってみた。

「えー・・・・・・・・えー・・・・・・・・」

四季の脚に縄が括りつけてあった。

「ふふふ、だから言っただろう・・・・飛んで火に入る夏の虫」

「・・・・・・・・知らん」

「だからお願い・・・・助けて・・・・」

今にも殺される寸前の表情が柚鷺を見ていた。

「嫌だね。面倒は嫌いなんだ」

「助けてくれるまで逃がさん！」

今度は両足を両手で掴まれた。

重心が前へ行き、顔面から地面に倒れる。

ガツン と嫌な音を立てて柚鷺の額がカーペットが敷かれた地面に
激突した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・お、おい」

「・・・・・・・・・・いたい」

「・・・・・・・・・・だろうな」

四季が柚鷺の両足から手を離し、這い蹲りながら倒れている柚鷺の
横まで来た。

「とりあえず助けてくれ」

「お前・・・・・・・・ってかな・・・・・・・・」

なにを？　　といいかけたその瞬間縄が引つ張られ

「おおおおお！！！！？？？？」

一気に四季の体が吹っ飛ぶような感じで引っ張られていった。

「遺言は済んだ？」

向こうにいる女子が重い声でそう言い放ち、四季が震え上がったのを見計らつて縄を引つ張り連れ去つていった。

「あぶねえ……俺まで殺されるところだった……」

柚鷺は四季が持っていた課題を手にとって教室へ戻った。

これが日常茶飯事になるのが怖い。

• • •

四季がどこに連れて行かれたなんて、考えもしたくないというか、そもそも考えようとも思わない。

こういうことを言うのも難だが、柚鷺は面倒くさいことに巻き込まれたくないのだ。

たとえ、隣の家の犬が腕に噛み付こうと、猫が顔を引つかこうと、怪我をしようと、事故に遭おうと、死者が出ようととも面倒くさいのは嫌いなのだ。

つまり、四季がどこへ連れて行かれようと一向に構わないのだ。

あの後、数学の宿題を終わらせた柚鷺は一先ず昼飯を買おうと席を立った。

「お」

そこに用がありそうな顔をした恵美がやってきた。

「丁度いいところに」

「あ？」

「柚鷺。数学の宿題終わった？五十六頁のどこ」

「ああ、つて見せないよ」

「えー、ケチ。減るもんじゃないじゃん」

どうやったら減るというのだ。

「自分でやらなきゃ何の意味もないじゃないか」

「わかんないんだもん」

「未来は？あいつなら分かるはずだろ？」

「解らないって。今解いてるよ」

恵美が未来の席を指す。

確かにそこには教科書とノートを広げた未来が難しい顔をして机に向かっていた。

「・・・・・・」

「ていうか、あれって結構難しくないか？アタシでもそう思ったん

「ただど？」

「あー」

そういえば皆苦戦していたような空気が四限の時間に流れていたな
と柚鷺は思い出す。

隣の席の【篠 香織】も質問して来たっけか？と思い出した。

確かに、難しいといえは難しかった。捻りがあったので間違え易い
のは見てて分かった。

てか、馬鹿な恵美もよく難しいとわかったものだ　とは言わない・
・

「後で教えるからとりあえず昼飯食わせろ」
「ん」

恵美はそう返事をしてその場をどいてくれた。

・
・

持参弁当、学食、もしくは購買で昼飯は手に入る。

いつもであれば柚鷺は使用人が作ってくれた弁当を食べるのだが、
柚鷺にしても使用人にしても珍しく忘れてきてしまっていた。

一々届けてくれるのも悪いので、今日は購買で飯を簡易に過ごそう
と思ったのだ。

まだ、昼の放課の時間はたっぷり残っている。これから購買でモノを買って屋上で食べても十分時間は残るだろうし、未来達の勉強を教える時間もある。

そう考えると、昼食は早めに済ませてたほうがいいのかもしいない」

因みにここ【私立白媛高等学園】には購買や食堂をあわせると全部で七つほど存在する。

大抵のプライドが高いお嬢様は上の階に三つほどある豪華な食堂へ行き、気品のある食事と高級な料理などを召し上がる。

だが、一般生徒などはそういったものに手を出せるはずもないので、下の階にある購買や食堂などに赴くのだ。

街中にあるような、普通の私立の学校のような食堂が下の階にはあるのだ。

購買はおもに校舎の隅にあり、お菓子から軽い菓子パンや飲み物まで売っている。

丁度柚鷺のいる階には自分が高評している昼飯に持って来いのパンがあるのだ。

小腹が減ったときなどここに通っているため既に男子としては顔を覚えられていた。

「こんにちは」

「お、来たな」

なぜか購買にいる人が青年だったりする。

青髪のミディアムで半袖スーツにネクタイと前掛けをした服装。

傍目で見れば軽い気持ちでやっているのだと感ぜれる。

なぜ青年であるのかはわからない。

お爺ちゃん、お婆ちゃんがこの学校に居合わないのか、それともこの校長の趣味なのか解らないが十九〜二十一までくらいの青年だった。

そこら辺の女子がこういうのが良いと言ったと言っのなら、まあ話は分からなくもない。

「今日は何にするんだ？」

「焼きそばパン」

「おいおい、またそれか？他にもいいもの揃ってるじゃないか」

「貧乏舌だね。高級なものはあまり好きじゃないんだ。食べれないわけじゃないんだけどさ」

柚鷺は代金を青年に払ってその場を後にした。

飲み物は外にある自販機で買える。昼飯なので麦茶で十分だ。

しかし、たまに思うのだが……田舎と都会って何で自販機で売

っている飲み物の値段が違うんだろ。

缶は田舎だと百五十円。都会だと百二十円

ペットボトルは田舎だと百八十円。都会だと百五十円だ。

なんだか、理不尽って言うか損して生きてきたって感じがして少々悔やんだ。

今更なのでどうしようもないが・・・

さてはおき。

昼飯を手に入れたのはいいがどこで食べようか？

生憎中庭のベンチは上級生が占拠しているし、教室で食べるというのもなんか嫌だ。

となると無難で屋上というわけになるのだろうか？

上の階を通るのは好まないが食べる場所がない以上、上に行くしかない。

「ハア・・・」

柚鷺は溜息を一つついて屋上への階段を上り始めた。

実のところ【四季^{バカ}】を除いて他のクラスに居る男子のことだが、対面はあるけれど昼飯のとき以外話さないため、仲は良好だとしても友達としてはまだ何か到達していないような気がする関係の最中だ。つたりするのだ。

いつもどこで食べるかといえば、中庭や教室なのだがたまに屋上へ登るときがある。

屋上へ上るのはあまり好きじゃない………と言う訳ではないが、途中で目に入ったり遭う事のある【高飛車】な人間。

つまり、金持ちやお嬢様たちだ。

この学校にはそういう人間がけて多くはないが、指の数だけでは数え切れないほどいる。

いい奴なのか悪いやつなのか、自分で確かめないと意味がないが、少なくともあまり関係を保ちたくはなかった。

っていうか、思えば未来達も金持ちだっけ？

そう考えると今の関係は仕方ないで片付けれる。

今は仕方がない……そう、仕方がないのだ。

屋上までの階段は異常なまでに長かった気がしたのは果たして気のせいなのか、それともどこからか聞こえる断末魔の所為なのか定かではない。

廊下に見える風景はなんだか違和感があった。

お嬢様学校・・・とは若干違う今のこの学園は、規則正しいところもあれば若干緩んだ公立の女子高みたいな風景が目にも嫌でも入る。

それらが今後どんな影響を齎してくれるのか、先が思いやられる柚鷺だった。

さて、先ほど【他のクラスの男子】のことについてだが、屋上に今日もいるようだ。

さっき「どうせ一人で食ってもつまらない」という発想から誘いに行っただが、教室を覗いた所いなかった。

この数週間でお決まりに場所である屋上で食べることにしているのだろうか？と思いついて現在階段を上っているわけである。

一応この学校には階段のほかにエレベーターなども設置されているのだが、どうもエレベーターなどがある校舎は行くと何かであつてはいけないものに出会いそうなので、殆どの一般に近い生徒は行かないらしい。

「エレベーターを使う人間もどうかと思うけどなあ」

屋上のドアの前で柚鷺は呟いた。

普通の公立の高校みたいに鉄で張られたドアではなく、カラス戸で作られ押して開くドアのようだ。

まあ、なんとも豪華だ。

屋上は校舎の一部だけにしかない。

他の場所には塔があり文化祭などのときにフラッグやバルーンなどを飛ばすときに使っているらしい。

それ以外何があるかといえ、何があるといえいいのか分からなかったりする。

屋上には庭がある。といっても、人口花壇で作られた庭だが・・・

他にもパラソルがついたベンチや、そのまま地べたに座り込める芝生がある。

だが、場所が場所だけに風が強い。

島一つ丸ごと使っているわけであり、海から吹いてくる風や標高の高さによって吹いてくる風力は違うのだ。

ここからでも、海の塩の匂いを感じたり、海水の冷たさが風に乗ってくるのをじかにここで感じる事が出来る。

もうすぐ五月だというのに、未だにここは寒くて仕方がない。

いつも、柚鷺は芝生で食べるようにしている。イスなどに腰を落ち着けるのは田舎で過ごしてきた柚鷺には落ち着かない習慣だった。

「遅かったな。待ちくたびれたんだぞ」

芝生の上で弁当を広げていた黒髪の少年が柚鷺を見るなり気だるそうに呟いた。

淡い水色の瞳の虹彩に、単純に伸ばされたショートシンプルな髪型。まだ春先だというのに制服袖をまくって夏みたいな格好をしていた。ネクタイがだらしなくぶら下がっている。

どうやら待っていてくれたらしい。

「ごめんごめん」

柚鷺はドアから出て芝生の上を踏んだ。

瞬間風が吹き込んでくる。芝生を踏むのと同時に風が柚鷺を煽った。

長くしなやかな柚鷺の挑発が暴れるように靡く。

服のあちこちが ばさばさ と音を立てながら揺れている。

「うおー！」

あまりにも強い風な為、引つ張られる感じで柚鷺は重心を崩しそうになる。

「大丈夫か？」

正面にいた銀縁眼鏡をかけたやや大人への階段を上り始めたような少年が言った。

白に薄い麦色を足した様な髪色。整った顔立ちに服装はしつかりとしていた。

どこにも崩れた様子はなかったが耳からぶら下がるイヤリングがちらちらと目に入った。

「あぶねえ・・・」

体勢を立て直して柚鷺は足を踏み出した。

「あれ？四季君は？」

「さあ？俺もしらねーんだよ。どっかいった」

「ふーん、珍しい」

「そうか？いつもじゃねーのか？」

女子に誘拐された　とは言わない。今話しかけてきた少年は何かと心配性な性格なのだ。

身長は低く、いふなれば女の子のような顔立ちに、茶髪でもさつとした髪型。

矮躯でひよろつとしたその体格は簡単に折れそうな感じがした。

彼は変な冗談が通じない相手なのだ。

話し次第で会話がややこしくなってしまう事もある。

だが、冗談が全て通じないわけではない。

けれど、ここで話を面倒くさく指定しまうのは柚鷺として望むことではなかった。

「また（・・・）焼きそばパンか。好きだなお前」

「お生憎様。どこかの誰かさんじゃないからな。豚カツパン何ぞ買
つてこないぜ」

因みに購買にはもつといいものがある。

高いのであまり手を出す気にはならない（そもそも食べようと思わ
ない）。

「弁当は如何した弁当は」

「忘れた」

「ほお、お前にしては珍しいこともあるものだな」

「そいつはどうも」

芝生に腰を下ろして焼きそばパンの袋を開けた。

まだ焼いたばかりの焼きそばの熱気と匂いが袋の中から溢れた。

実に香ばしい匂いだ。

「やっぱり一般食はうめえ」

一口齧って呟いた。

「そついえば如月」

銀縁眼鏡の少年が柚鷺にそう言った。

「この学園にいる暴力女を知っているか？」

「なんだそりゃ？料理かなんかの名称か？食堂の」

「違う。風紀委員のやつなんだがどうも規則を破った男子に対してかなり高度な体罰を与えるらしい」

「・・・・・・・・・・」

「お前も気をつけたほうがいいぞ。四季がいい例だ」

四季が連れ去られたとき、木刀をもっていたあの人はたぶん風紀委員だったのだろう。

ていうか、四季は本当に何をしたんだろうか・・・気になって仕方がない。

知らぬが仏というが・・・何の規則を破ったらああなるのだろうか。

考えたくもない。

そもそも規則を破ろうとも思わないし、破る必要もない。

「てかなんでそんな話をするんだ？」

「お前の身近にそういうやつがいるから、というわけで警告したんだ。ありがたく思え」

「へー」

身近にそういうやつ＝四季

この数週間の行動上。規則を簡単に破っているため、唯一近い位置に居る男子の柚鷺は被害を受けたり、巻き込まれたりするわけだ。

これも運命なのか・・・なんなのか・・・

「気をつける」

「ああ、そうしろ」

ところで、先ほどから話している、銀縁眼鏡の少年や、黒髪の少年や、きしゃな体の少年の名前だが。

一人ずつ説明しておこうと思う。

まず、黒髪の少年からにしようか。

彼の名前は【楠木 崇】くすのき たかし。

ここへ来る前は私立中学に通い、そこでトップクラスの成績を収めていたらしい。

清廉潔白、品行方正、成績優秀。気さくで世話焼きなため、他人からの支持は非常に良かったらしい。

つまり優等生だ。今は実家から離れて一人暮らしのようだ。

バイトして生活費は自分でやっていけているらしい。

まさに優等生中の優等生だ。

続いてきしゃな体の少年にしようか。

【円城寺 樹】えんじょうじ いつき

初めて会ったときはなんだか「こいつ女なんじゃねえの?」と思ったりしたが別にそうでもなかった。

女子みたいな顔で、きしゃな体だけで男に違いはなかった。

うん。

運動はからつきし駄目に見えるが、体育実技の時間でも見ていなか

ったりして如何なのかわからない。

成績は【楠木】と同じくらい良いらしい。

なんでも、中学が同じだったらしく一番初めの友達として学校内でも相当な優等生二人組みとして見られていたようだ。

因みに女子に人気だ。

最後に銀縁眼鏡を紹介しよう。

【榎月 柩】
かしつき ひつぎ

とまあ、なんとも物騒な名前の少年だ。

さて、最初に言っておくべきなのだろう。

柚鷺に最も縁がなくていい【鬼灯財閥】の息子だ。

「もう、金持ちですよ金持ち。日本政府とか何とかかんとか出てくる財閥さんの息子ですよ。

変な風に巻き込まれれば普通に外国へ飛ばしてくれる人たちですよ。アニメとか漫画とかの妄想かもしれないけど、ごく普通にそういうことがありそうだよ馬鹿鹿野郎。

どうしてくれるんだよ。この学園生活が幸先不安じゃねーか、バカバカ、畜生め！」

みたいな、柚鷺の中で渦がまいているのはどうでもいいとして。

簡単にまとめれば、個人で立ち上げた【榊月財閥】の主であり総資産は七千億円（と聞いた）。

財閥の息子という点もあり、普通の人間と感覚が間違っていると思いきやそうでもなかったり。

さらに、サイフは温かく、学力や運動神経は高い。剣術、馬術、柔術など武術を多数持っている。

ただし柚鷺の解釈は『金持ち』である。

とまあ、こんなメンバーだ。あともう一人はいるのだが……放つておいても大丈夫だろう。

「そういえば……」

楠木が口を開いた。

「今度の合宿だけど」

合宿というのはいわば親睦を深めるための修学旅行みたいな話だ。

まだ、数週間しか経っていないためクラスメイト以外の人間と関わりはさほど無い。

そこで、合宿でもして出会うチャンスを増やそうというわけだ。

一年生にはこれを合わせると本当の修学旅行を含め合計三回ほど旅行がある。

二年生になればもっと増えるし、社会的なものから、全く都会人が見たこともないような、自然や田舎を堪能する旅行もあるようだ。

体験を積み重ね経験していくことで常識を引き締め、興味の目を広くしようというのが学園長の魂胆らしい。

いい話ではあるが多すぎるに他ならなかった。

まあ、経験をしすぎて悪いということはないと思いたい。

「どうするんだ？」

「なにをどーするって？」

「いや、班決め。女子と組むのには少し抵抗があるだろ」

「当たり前だこの野郎」

男子はあまりにも少人数だ。

柚鷺と四季は別としても、楠木、円城寺、樫月はクラスが個別だ。

女子と組むという話は小学校以来だ。

だが今を考えてみる。精神的にも肉体的にも成長したため、異性と組むというのは抵抗がある。

無いほうがおかしい。

四季は・・・別としても。

「でも、流石に男子は特別で俺らだけで組ませることになってんじやねーのか？」

「ああ、それもあるかも・・・だな」

ていうか、それじゃないと本当に困るのだけれど・・・

・ ・ ・

滞りなく昼飯を食べ終わった柚鷺はそそくさに教室へ帰ることにした。

昼放課はまだ時間が余っている。

教室に戻って数学の課題を、今も勉強しているかわからないが、恵美たちに教えてあげる必要がある。

まあ、俺じゃなくても他の誰かがやってくれてるかもしれないし、もしかしたら自分で解くことが出来ているかもしれない。

階段を下り一階までたどり着く。相変わらず綺麗なカーペットが敷かれた廊下はため息を吐きたくなる。

自分のクラスを目指しながら柚鷺は半ば面倒くさそうに

「疲れたな」

と、先が思いやられた顔をしていた。

教室に入ると一気に視線を感じた。

毎回教室に入ったりして視線を感じるたびに男子という存在である自分が妙に死にたくなるのは、実はこれの所為なのかもしれない。

「あ、遅いつて。何でそんなに飯食べるのが遅いんだよ。三分で食べろよ」

「早く食べてゆつくりしないって言うのもどうかと思っけど・・・」

三分とか無理だろ。作者でも五分はかかるぞ。

焼きそばパンなめんな。大食いの恵美とは違うんだぜ？

「早く、教えてよ。皆待ってたんだよ？」

「は？」

皆？ああ、いつものメンバーか。と柚鷺は呟いた。

なに？ばけたの？と恵美

といつてもまあ、いつものメンバーといえは未来、恵美、亜由美、香織くらいだ。

入学式の日だけでも二人も周りの人間が増えた。

だが、女の子ばかり。流石男子率一%未満の学園だ。

「それとさ・・・」

呆れ顔で恵美が大げさにため息を吐いた。

なんだ？ついに電池が切れたか？ と柚鷺は思ったが

「あれも序に何とかしてくれない？」

恵美が指を指した。

その先に、机に突っ伏した四季朋幸の亡骸のような体があった。

「ハア・・・」

頭の中でどうしようかと考えながら、まずは教えるほうから始めようといったもののメンバーの場所へ。

既に教科書とノートを広げた三人が待機していて、その隣の机に四季がいた。

気まずい顔していた未来にはジェスチャーで四季のことを煽っておき、問題に目を通した。

この学園生活の一コマにピースを嵌めていくかの日々が、柚鷺にとって徐々に記憶に残りつつあるのはこの瞬間が生きて生きているからだろう。

そんな世界中の中の一コマ。

だけど、面倒だと柚鷺は思っていた。

そして思わずため息を吐いた。

後日談

柚鷺「身長が伸びたし・・・」

恵美「何でそんなに嫌そうなんだよ」

柚鷺「百七十cmもあれば十分なのに、身体測定で図ったら百七十二だよ」

恵美「二cmよこせ」

柚鷺「恵美は身長伸びなかったっばいな」

恵美「うるさいよ。ただでさえ160前半なのに」

柚鷺「十分だろ」

恵美「あと二センチで160後半なのに」

柚鷺「知るか」

恵美「代わりに胸が成長したし」

柚鷺「・・・それは未来が大層羨ましそうに見るだろうな」

恵美「え？なんて？」

柚鷺「なんでもねえよ」

恵美「そういえば未来は落ち込んでいたんだけど、何があったんだろ」

柚鷺「（女子の成長の喜びは胸の大きさに案外決まるものなんだな）」

恵美は結局未来の落ち込んだ顔を理解できなかったようだ。

3・5×2Ⅱ7話（後書き）

毎回、話が、ちゃんと、纏まっているか、きになる。うん。

それと更新がすっかり遅くなってしまってますいません。
ここにお詫びを申し上げます。

結構書き詰まっていたので、すいませんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3375w/>

VOCALOID STORY ~ 奇跡の世界 ~

2011年12月20日18時48分発行